

# 国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『一人三臣和歌』― 釈文・略解題 ―

武井和人\*・酒井茂幸\*\*・山本啓介\*\*\*

## 【緒言】

小論は、未刊のまま多く残されてゐる室町後期歌会資料（及びそれに関連するもの）の内、既に何人かの研究者が立論で使用してゐるにもかかはらず、現在に至るまで釈文が公にされてゐない『一人三臣和歌』について、とりあへず利用して頂ける釈文を提供しようといふことが目的である。『一人三臣和歌』の本格的な考証は、あけて、今後の課題としたい。

底本とした伝本は、国立歴史民俗博物館高松宮本『一人三臣和歌』（H一六〇〇―七一一）である。底本の書誌については、【略解題】を参照されたい。

釈文作成にあたり、以下の方針に従った。

- (1) 漢字は原則として通行の字体に統一した。
- (2) 丁移りを、「一・一」の如く示した。
- (3) 上句と下句の間に、一字分空白を挿入した。
- (4) 底本の本文において特に留意を要する箇所に関しては、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵（一五二・三二三）本との対校結果等を記した。

小論は、以下の共同研究による研究成果の一部を含む。

### ① 「中世後期歌会資料の総合的研究」

（平成二四年度・埼玉大学研究機構プロジェクト（研究費）≒一般究

### ② 「外部資金獲得促進研究」、研究代表者≒武井

### ③ 「室町後期歌会資料の総合的研究」

（平成二六年度・科学研究費補助金・基盤研究（C）（二六三七〇二

### 〇〇）、研究代表者≒武井

礎稿作成担当者は以下の通り。

緒言……………武井

釈文 第一冊・墨付第一丁表〜第八〇丁表……………武井

※コノ部分ノ一部ノ釈文礎稿作成ニ際シテ、以下ノ方々ノ協力ヲ得タ。謝意ヲ表スル。齋藤亜里紗・夏傑倫・徐晶・申遠・朴玉順（順不同、イジレモ、埼玉大学・大学院・文化科学研究科・修士課程）

第一冊・墨付第八〇丁裏〜第一一五丁表……………酒井

第二冊・墨付第一丁表〜第三五丁表……………酒井

第二冊・墨付第三五丁裏〜第一〇五丁表……………山本

略解題……………武井

礎稿は相互に検討した。（武井和人）

\* たけい・かずと、埼玉大学教養学部教授、古典籍学

\*\* さかい・しげゆき、埼玉大学非常勤講師、中世和歌

\*\*\* やまもと・けいすけ、新潟大学教育学部准教授、中世和歌

【釈文】

文龜元年三月廿四日 内裏御月次勅題

立春 名残おもふこそその月日をおしむ間に たれにまたれて春のきぬらん

夏草 雪にみぬ小松かはらもうつもれぬ 草のはやまやしけりそふらん

庭雪 我も今をよはぬよのあとつけて 雪をそみつるこゝのへの庭

後朝恋 道しはに分こし露もうつり香も わかきぬのののになりぬる

社頭月 末のよを猶てらさなんかすかやま われをしれとの月もかはらて

帰雁 みすてはさすかにつらきはなを根に とはかり雁のさそひはなる 実隆

六月祓 はるの色はきふとおもふをさくらあさの おほぬさなかし御祓すらしも 同

嶺雪 明わたる雪のたかねのふもとより しくれてのほるよるのうき雲 同

片思 おもひとけは我かなみたのみもろこひの 心にたにもうらみあるよを 同

栽花 花やしるかよふにたへすうつしうへて ゆるすこゝろの色もこそあれ 政為

早秋 草の原とふほたるにもとほからす おもひしものを秋風のやと 同

水鳥 こほるよもとけてや思ふ水とりの 一をのれすみつく池のこゝろを 同

別恋 きぬはたか為ならずよをこめて 人にかこつもうきならす哉 同

述懐 今更に身を忘れてもつかへなは をろかなる名はよし残るとも 同

挿頭花 かさしても身こそはあらねはなはわか はなにかくれぬ老木ならずや 為広

七夕 月の舟紅葉のはしをせてさは 二夜のとしのわたりとともかな 同

冬月 月雪のよととひしおもかけも 心のみちにかへるとらかな 同

逢恋 きくやいかにいけるかきりのことはも 今宵身にしむうち山かせ 同

暁 おきいてまつつかへよとりのねの いさめむみちは代にたへめや 同

已上御百首中

今上御製并三臣之詠進等、抄出之、当時宗匠不逾于此三輩歟、雅俊卿稽古不足歟、世之

所推難、比于此間 者乎、仍略之畢

又、御月次一ヶ月者、三首懐紙被重之、一ヶ月者御百首短冊也、仍百首隔月也

同年五月御百首中出題雅俊卿」二

初春霞 さたかなる雲間の山のかすむより 中／＼うすき春のいろかな

遠夕立 吹をくる山かせながら冷しきの 雨にまたる夕立のそら

暮秋露 露なみたいかくわくへきゆく秋の 思ひをくらんそての名残に

寄塩木恋 こりすまのあまのもしほ木一かたに 思ひつけへきおもひなりしを

祝言

夜春雨

秋夕

風前落葉

寄月恋

往時如夢

見花

朝萩

歳暮雪

寄下草恋

山家鳥

尋花

山初雁

常盤木雪

寄宿木恋

老後懷旧

同元年閏六月御百首中勅題

春雪

早秋

寒草

寄煙恋

柚山

春月

曉虫

豊明節会

寄滝恋

鳴鶴

見花

夜鹿

落葉

なにの道もかくこそはみめことのはの まさきのかつらなきためしに

梅かゝも袖にしめりてふかきよの 首なき雨そ空におほゆる 実

此比のあらしも露も身をわかは たかなをさりの秋の夕くれ 同

散残るほどゝたのむ色もなし かせをこゝろの枝の紅葉は 同

西になかれ東にいつるつきへても 身はなかく空のなかくのみして 同

ぬるかうちにみるのみ近きむかしにて うつゝの夢そ遠さか行 同

めかれせぬこゝろをはなは中／＼に あたなるものとたのまさるらん 政

今朝も猶よるのにしきのそらしあれや 人もすさめぬへの真萩は 同」三

ゆくとしのあとみぬ雪の通ひ路に くるゝ名残をわすれぬもうし 同

消かへりおもへは露のしたくさも うき身をよその袂とはみし 同

八声なく鳥も有けり柴の戸は ときしるへくもみえぬ山と 同

咲そめしこそその山ちとわけ入や こゝろをはなのしほりなるらん 為

天津雁秋はみやこにかへるやま はるの名たてに何うらみけん 同

そめかねし時雨のはてやときはきに 雪とふりても色しかゆらん 同

契きなおもはぬかたにやとり木の かれなてつらき夜はならむとは 同

いかゝいひていかゝさためんみしや夢 ありしやうつゝ老のいにしへ 同

はなをのみまたるゝものと枝の雪の はるをやよそに思ひきゆらん

萩のをと松のひゝきに吹かへて いつれかいつれあきのはつ風

のへの色はさひしき比そ霜かれの 尾はなかつらにゐる鳥もなし

とことのはの思ひよいつをはてならん」四 ふしの煙はたゝすなるとも

おくふかき山をやまひここゑ／＼に ひくやそま木のいく木ともなき

はなとりのわかよとおもふはるの空に 月もやしみてあはれそふらん 実

秋風にごぬよの鳴のはねかきも をのかうへとや松虫のなく 同

君か代にはしめてかへす乙女子か うらめつらしき袖をこそみめ 同

せきかへすはては袖にもおちぬへし 心のうちの滝なくもかな 同

よるのつるの思ひもたれにきかせまし よにかすならぬみしまくれは 同

さま／＼の身のあらましも春きては たゝいたつらに花やなすらん 政

草のはゝなひくもしらぬさよ風に つまゝつ鹿やみをたのむらん 同

色にちる木の葉をしけみときはなる かけさひしくも山風そふく 同

寄月恋 晴間なきなみたの月のよな／＼も そふ面かけをやつす袖かは 同  
 浦船 風はやみなにはもわかぬゆふなみに なれぬるかたとかへる友ふね 同  
 惜花 やよあらしさくらよかなん時ありて 五 咲そふはなもさもあらはあれ 同  
 重陽宴 今日たまふ菊のさかつきさしくみに しらん千秋や雲のうへ人 為  
 池水 やへふきにあらぬ氷もひまなきや かれたつ蘆のこやの池水 同  
 寄鳥恋 たかの毛のうはゝからたちそれよりも さはらむものは恋ちとをしれ 同  
 寄日祝 やふしわかぬ日のもとりや月ほしの 名たかき国も光みすらむ 同  
 同元年八月御百首中 題雅俊卿  
 海辺霞 明るよのいそへにしめるもしほ火の 煙もさらにかすむ色かな  
 庭荻風 秋かせに露のかゝらぬたくひそと そよやく何の宿のおきはら  
 寄月恋 かたらはぬ月の面かけいかさまに まくらならへてわひつゝもねん  
 うけつきて今はわかよをわたたら会や いすゝの川の絶ぬなかれに  
 柳露 ちらすなよ柳か枝にさくはなの つほみもそれとにほふしら露 実  
 初秋朝 よの間に身をかふはかりうつせみの 今朝からころも秋風そふく 同  
 寄火恋 いかならん打いてゝしも石の火の つくかたなくてたゝに消なは 同 六  
 祝 あめ土も知らんものかつるかめに そへてをいのる君か干とせは 同  
 庭上落花 一枝にみしはなこそうけれ庭の面に 散ことよりははたれまよふらん 政  
 開搦衣 麻ころもうちおとろかす音もうし 身はいたつらの末の秋かせ 同  
 雪朝 音もせぬ軒はの松の雪折は 今朝みるたにもおとろかれつゝ 同  
 寄玉恋 袖のうみかはくためしはいつのよの 妙なる玉のひかりにかみむ 同  
 滝水 滝のうへのみちはつゝかぬ岩かねに いとくりかけて山かせそふく 同  
 春月 これや此月のかつらのはなくもり かすむをよそに何うらみけん 為  
 野萩露 たか跡におらは落なんことのはの 露のみやとるのへのむらはき 同  
 寢覚時雨 おとろふる袖のしくれや天人の こゝろよりふるね覚なるらん 同  
 寄石恋 などかしる思ひのつなそうき中は 千引の石もかるき心に 同  
 山家苔 とちはつる苔のとほそは霽にも ことふやたゝく山ひこのこゑ 同  
 同元年十月御百首中 題政為卿  
 歳暮立春 待みては春の日数をくれてゆく 七 年のためにも猶やおしまむ  
 五月雨久 かきりあらは雲もめたてしみな月の てる日にちかき五月雨の空  
 山家月 峯のいほふもとのさとの月かけは 雲なき空にはれくもりつゝ  
 寄野恋 とはずともとなるさどになく鳥の うつらむかたを我にきかすな

海辺眺望 山もあれやうら風よはる夕なみの しろきをみれば雲そかゝれる  
 うしつよのわか身をはるにたとる哉 うつろひかはる宿の梅かゝ 実  
 庭梅 おしとおもふ月もなかれて七夕の 袖にやかゝるあまの川なみ 同  
 七夕夜深 やとかなゆくさきおほく残る日の かけすくなくも時雨きにけり 同  
 行路時雨 ことゝはんたよりをそ思ふをちこちも しらぬ岡へのやとのこすゑに 同  
 寄岡恋 すなほなるすかたなからにあたらしき 心のみはや大和ことの葉 同  
 寄情述懐 若草のみとりの野へに咲むめの はなの雪間は木末にぞみる 政  
 野梅 あはれしるたかなみたをかをのうへに 露ともみたす荻の夕かせ 同  
 荻風 行駒もちる木のはにやまよふらん 八 今朝ふくかせのまへのたなはし 同  
 橋落葉 袖はたゝいかほのぬまのいかにそと さすかめにあまるくるしさ 同  
 寄浪恋 久かたのあめのめくみやしるからし 千世のはしめの君かひつきは 同  
 祝言 氷あしこそ雪けのさはのへに ふる葉なからもつむわかなかな 為  
 沢若菜 秋はまた遠山小田にいなつまの 光ほのめきとふほたるかな 同  
 田辺蛩 峯たかみうつる夕日の色そめて 時雨むなしき秋のやまかな 同  
 嶺紅葉 せめてさは夢路にかけてかよはなん たのめし末のうたゝねのはし 同  
 寄橋恋 老のみと身をなゝけきそしたふよは きのみおなしむかしならすや 同  
 寄老懐旧 老のみと身をなゝけきそしたふよは きのみおなしむかしならすや 同  
 同元年十二月御百首中 勅題  
 初時雨 みるまゝにきのふの雲の村しくれ 冬にもめくる山かせそふく  
 谷寒草 ちり積る木のはを霜のへたてにて 冬をもしらぬ谷のかけ草  
 河千鳥 ひさきおふるかけをやをのか友千鳥 月のこほりも清き川原に  
 古寺雪 なかむらん心もしらす初瀬やま 雪のうへなる入逢のかね 九  
 年内早梅 としきむき松をはいはし霜雪に 先あらはるゝ梅のひとはな  
 里時雨 初しくれ里わくほとも山かけは たゝいつとなくふる心ちして 実  
 篠霜 今朝のあさけ霜さむからしさをしかの あとたにみえぬ岡のさゝはら 同  
 浦千鳥 友千とりをのかうらゝなみかせに 思ひかねたる音をや鳴らむ 同  
 杉雪 心しる人しもあらは三輪のやま いかに待みん雪の杉むら 同  
 惜歳暮 ゆくとしはささいひしらぬわかれ哉 とまらぬものゝ身につもりつゝ 同  
 朝落葉 かせ渡る木末の月のあけはてゝ 落葉かうへにうすき影かな 政  
 江寒蘆 あまのすむ入江のなみのしほれ蘆は からぬみるめそよそにさむけれ 同  
 谷雪 嶺の雲に色をかはして谷の戸の ゆきの木末やさえくらすらん 同  
 爐火 みるもうきしはすの月にうつみ火の ほのかなりしもすさまじきかけ 同

老後歳暮 かそへこし身にしあれとも老か世は今一とせもうき名残かな 同  
 関時雨 雲なから人はさまよふ道のへに ひとり時雨やたゞこゑの関つと為「一〇  
 池寒蘆 池水のみとりもあらぬ色かへて 氷にとつる蘆の一むら 同  
 屋上叢 さよふかみまやのあまりにぬる玉も くだけてちるやあられなるらん 同  
 閑居雪 神ともえやはこゝろのまつかせに 人たのめなる雪の山かけ 同  
 仏名 法の師のこゑすみのほる雲のうへに 雪もかつつけのわたやみすらん 同  
 文亀二年正月廿五日御会始  
 竹不改色  
 よろつよのこゑの色をやそよ更に  
 竹にまちとるはるのはつかせ  
 色そはん雲井にもあるかくれ竹の  
 世々のふるごとあとを尋ねて 権大納言藤原実隆  
 君に今かはすちきりそあらはるゝ  
 みかきの竹のものねさしも 民部卿藤原政為  
 実をはまむ鳥もいてよとすなをなる  
 御代のすかたや庭のくれ竹 左衛門督藤原為広  
 \*以上四首、底本ノママノ字配リトス

同二年二月御百首中 勅題  
 立春 のとかなる都にきてやをのつから はるのこゝろもはるをしるらん  
 五月雨 風みえて行かふ雲のさみたれば はれまにちかき空もめつらし  
 山紅葉 よそにみてあかぬこゝろの千しほには「一一」 そめもまさらし秋のやまひめ  
 待恋 あちきなくおもひかへして思ふそよ 一つの夕へを人にまたれん  
 鞆中衣 越わふる山ちのあらしせめてさは ころもふきほせしはしやすまむ  
 帰雁幽 おもかけは心あてなる雲路にも かすみはてたる雁のこゑかな 実  
 夏草滋 夏きてはこのもかものにつくはねの かけをあらそふのへの色かな 同  
 里雪 秋の月なくさめかねしはては又 雪もさらなるさらしなのさと 同  
 逢恋 行末もたのまはたのめさきのよの ちきりはみえつさよの手まくら 同  
 霞満花 よしの山よしたちこめよ春の色の かすみもはなの外にやはみん 政  
 蚊遣火 かやり火のけふりなひかすた風は 吹こぬほどそすゝしかりける 同  
 滝紅葉 たきの音のしくるゝうちも山ふかく てらすもみちの色もあやしき 同  
 初恋 思ひそめしらせそめしをうき事の いつれかと出とまつまよふらん 為

名所松 をのか色や猶くもるらん住吉の しへのにとをき浦の松はら 同  
 花如雪 よしさらはこゝろまよひのゆきとのみ「一二」 散かひくもればなの山かせ 為  
 夕立 ひろひみんこれやまことの玉さゝに あられさやけき夕たちの雨 同  
 暮秋 面かけのきへすはありともあすよりは しくれん雲を秋と見ましや 同  
 不逢恋 人はいさうつりかどめんとときありて さくへきはなは袖たもとふるゝとも 同  
 述懐 代まかけてひとり歩しむかしそと 忍ぶもくろし敷嶋のみち 同  
 同二年四月御百首中  
 鶯 都より千里をかけてうくひすも おさまれるよの春をつけなん  
 初秋 一はよりたえぬこゝろそ玉かつら はふ木あまたの秋のはつ風  
 冬月 みたれちる木のは分きて梢には さはらぬ月も影そすくなき  
 逢不逢恋 いかにかしてかたりあわせんさたかなる うつゝの夢はひとりやはみし  
 旅 もしほ草いさかきやらんこし方の たよりもかへる波にまかせて  
 霞 立出すかすみの袖も風ふかぬ よのうれしさをつゝむ春かな 実  
 露 秋のよの晴たる空のいつくより いつともみえぬつゆみたるらむ 同「一三  
 歳暮 ふかゝらぬよわひのほともおしみしは たゞ大かたの年のくれかな 同  
 忘恋 こし方をなとかおほえずなしはてむ うつるこゝろにまきれさりせは 同  
 神祇 めのまへに神のいさむるみちもかな にこりはてたる民のこゝろに 同  
 梅 こし跡のたち枝はかすむ梅のはな 袖にをくれぬ匂ひをそしる 政  
 萩 こよひしもまくらかるのゝ真萩はら 秋風たちぬはなやちるらん 同  
 初冬 冬くれは霜のかね聞はつせやま もろき木のはにひゝくとはなし 同  
 不逢恋 あふまての身をたのむよりはかなけれ あたのなざけをまついのちかは 同  
 懐旧 身を忍ふむかしはなくて今さらに みしよの夢をわひつゝそふる 同  
 花 小はつせやひはらはははなにうつもれて にほひにくもる春のやま風 為  
 擣衣 浦ちかきあしの丸屋の秋かせに 浪もひまななくうつころもかな 同  
 雪 枝たはにさすかおられぬなよ竹や 雪にもをもれがのかすかたみすらん 同  
 逢不逢恋 身はちゝにうからむものかひとたひの なざけにかへし命なりせは 同「一四  
 祝 君か代はななみみのうらのはかりなく ほとりもしらぬ浪のゆくすゑ 同  
 同二年五月御会 三首御懐紙  
 (時鳥) ほとゝきすひとりや過しかさゝきの みねこゆるまの月はのこりて  
 \*底本、「ほととぎす」ノ異体字。便宜「時鳥」トス。  
 下掲図版参照。



書陵部 (一五二・三二三) 本モ微妙ニ異ナルモ、ホボ同字。

立かへり波やこえなんほとゝきす をのかさ月も末のまつやま 実

まつにたえ夜かれにならふ心のみ めつらしけなきほとゝきすかな 政

鳴すてゝ雲の行急にこゝろさへ 空のみたれのはつほとゝきす 為

玉にぬくはなにそへすはとはかりに 外面のあふちおしき色かを 実

雲の色もあひにあふちのはなのうへに そどもの山そとをく明ゆく 実

木す多よりたなひく雲をもる月に 映やあふちの陰そくれゆく 政

ことのはのいやしきすかたいかならん 折にあふちははなもさくよに 為

雲におち木の間をわくる滝のいとも おなしすちにやむすほゝるらん

年もへはかゝみのかけにをちぬへし くるきすちなき滝の水上 実

かり枕かたしく山のたきのいとに 一五 むすほゝれゆく夢やかこたん 政

五月雨にうつ音たかしこれやこの 天のつゝみの滝津いはなみ 為

同二年御百首中 題雅俊卿 \*書陵部(一五二・三二三) 本作「同二年六月」

若菜 雪ふかみ小松か原はみとりさへ すくなきのへに若菜をそつむ

萩風 夕月夜あかぬ名残のひやゝかに 萩のをと聞風のさやけさ

谷水 柴の戸のかけひにたゆるやま水を み谷にくむもこほるころ哉

昼恋 わりなしやひるねの床にみし夢も まはゆきかたにむかふ日影は

閑屋 波のうへに心をよするやすらひを きよみかせきのもる人にせん

余寒 ときは木のこのめもはるはそらめにて 下葉うちゝる風のさむけさ 実

蚊遣 くるゝよはむせふかやりのけふりこそ むくらの宿の思ひなるらん 同

初雪 またれこし心に積る日数を は けふふるゆきのうへにみましを 同

洩亀 淵よりもふかしやつりにかゝる亀の はなてるぬしをおもふころは 同

早春 ふるとしの雪の木末にふき初て はなのかいそく四方の春風 政「一六

対秋 一つのまにころもはすらんめかれせぬ はなはまはきよあはれこととはれ 同

閨蔽 一しきりあらはれけしき閨のうへに 残るあらしもそれかとそ聞 同

暁恋 みをはやな曉露の草も木も わか袖のみに思ひしるよを 同

海村 あまのすむ里の一むらくればはてゝ もしほ火とほく松風そふく 同

春曙 月雪の千里もかすむおもくかは 心にこもる春の明ほの 為

悲露 風にかる身をきてしもみの外に 野山の露を露とみましや 同

鷹狩 さえくらすみ山のたかのかさなかな 雪やこよひのとほこならまし 同

朝恋 たかうらみふかきあしたのかねの音も 身にしむものようちの山かせ 同

水郷 玉しきしあとをしとへは水無瀬川 袖こす浪のをとはかりして 同

同二年七月御懷紙

愛萩 思ふ色そかきりしられぬ秋はきの はなもしのふの露のみたれに

もろくちる露をかなしむこゝろをも はなにわするゝ萩の下風 実

咲といへは古枝にこもる花もなし 一七 あはれおほかる秋のはきはら 政

ぬれてみんたれそは露の下はきに とりし御笠そ宮木のゝはら 為

分つくす末野にちかき山かせも 二多ほのめかす松虫そなく

しら野も秋にうかれて鳴むしの ころこそかきり分やつくさむ 実

行／＼も聞へかりけるむしのねは あらぬのせに秋かせそふく 政

かへることの朝霧ふかしむしの音を 夕露かけてたつねこしのに 為

思へ猶我はわれにてたのみこし 人に一たひみえしまことを 為

たのましなあまりにとをきかねことは もしいつはりのなき世なりとも 実

身につらきことのはのみそいつはりの なきにつけてもたのまさりける 政

偽のなきことのはりのあまつほしに いかなる雲か君さそふらん 為

同二年八月御百首中 題為広卿

高 雪とみる月よりうへのひかりかは 秋をたかねのふしのしは山

深 五百重なみ千ひろといふもはかりしる あまは心のかきりやはある「一八

親 初かせの秋そ身にしむともし火の まともそむけぬ心すゝめて

閑 いかにと草の庵のあめのよを 板やにあらぬ軒はにそきく

旧 道は猶ふりぬる人へのこしてそ あらたまるよのしるへともせん

低 雲のよそに思ひし物を雁かねの ふもとの小田に落ちるまぢかさ 実

少 月たかく明なんとする空のほしや みしよの友の数はかりなる 同

厚 うみ山をのせて動ぬあらかねの 土はいかなるちからとかしる 同

忙 よの中よ明ぬくれぬとまきれて 身につとむへき一日たになし 同

近 吹しほる軒はの山の秋かせに なれぬる袖も色やかはらん 政

薄 なかきよものこしぬ空は有明の つれなきほとと光をそみす 同

閑 すめはかくいつくも同じ柴の戸に もとめし山はあさき心よ 同

清 袖ことにかげやとしをく月はたか 心をきよ友とみららむ 同

旧 かしこしと今みることもふるきよの をろかなるにはえやはよはん 同「一九

高 月も日もよはぬ天やうへしなき 君かひかりをはしめならなん 為

遅 いつかはとまつらんものかたかの山 そのあかつきの月の行急を 為

厚 ひとのおやのみたひうつせしあはれみも 心へたてんとなりならめや 為

疎 よし露の身をしやとさはわらの筵 竹のすかきもさもあらはあれ 為

清 汲しらん我かはあやなわかのうらや 立かへる波のきよき流を有注 為

同二年九月御懷紙

菊露 うちらはふ袖のほひにとゝめても はなにそおしき草のしら露

花そ先にほひの測と成にける つもるはしらす菊の下露 実

つむきくにけふはらふとも白露の にはひは袖の外にちらさし 政

咲そふは露の光をあまつほしと 何そは菊の名にしたつらん 為

池辺菊

秋かせにたへぬやいつれ池の面の 蓮のはなのきくの色かは

影しあれは水のうへにも大さはの 波のはなゝる秋のしら菊 実

池水はさゝ波くれて行みちの一二〇 しろへにゝほふ秋のしら菊 政

樵夫

うきしつむはなの姿や池水に をしのなたゝる菊の一もと 為

真柴とる山の山人うきわさも みをわすれては何かくるしき

まさきちるあらしや袖におもからし 薪すくなくかへる山人 実

たきゝる身は山かつもなれぬれは はなも紅葉も色をしらむ 政

分いらんおく山人もさはりある よのなけきをほこりつくさめや 為

同二年十月御百首中勅題

春草短 下もえのみとりそうすきふる草は なひくはかりの影ものこれと

新秋露 吹からにいつくをはらふものならん 袖につゆけき秋のはつ風

河千鳥 身にしむは秋はかりなるねさめかは 河かせふけて千鳥なく空

寄床恋 歎あかしひとりおきある朝床に よるのなみたのあともわりなき

山家鶯 霧ふかきわか山里はうくひすの こゑにもしれなはれぬ思ひを 実

寄国祝 へたてなくなひくをみれば四のくに みちちかゝれやわか君か代に 同「二二

孤鳴霞 春はたゝかすみにつゝく色のみや みるめにちかき浪のとをしま 政

待七夕 おもひ絶し程こそはあれ七夕の 待てふうさも初秋のそら 同

駅路雪 すゝか山ふりしく雪に引こまの あとやはわかむと今朝のたひ人 同

寄櫛恋 遠さかる中にこゝろをつくしくし さしもちきりし道を忘れて 同

田家水 庵ふりてかけひくち行小山田に あらぬ水おもせきやそへぬる 同

潤落梅 散梅のはなのかゝみやこれならん あらしにくもる谷のしたみつ 為

湊夕立 のこる日のかけのみなどは名のみして 入しほとをくくもる夕たち 同

狩場羹 ふりくらすみそれささはりたかの尾も うはらかくれはかりつくすとも 同

寄絵恋 うつしみは君かこゝろもけたものゝ はけしきかたちえやはよはん 同

陵園宴 かけふかみうきにとちむる松の戸を たゞくものとは山かせのこゑ 同

花満山 さくころは花にむもれてときは木の かけさへにほふ嶺のし雲 雅俊

堤上霧 たつ霧も人めつゝみのたかせふね さす袖まよふ秋の川なみ 同「二二

寄枕恋 するといへはつもるうらみをかくとたに 人にやつけの枕たのまむ 同

山館竹 おくふかき竹のは山のかけしめて いほりありともたつつけりかな 同

飛鳥井中納言四首為令見作意書加之畢

同二年十一月御懷紙

冬夜難曙 をくりこし年のひかりを今そおもふ 霜よのまのともし火のもと

いくね覚霜につれなきかねの音を 四方のあらしにわひて待らん 実

うかりける霜のよさむに明やらぬ 月をはかこつならひやある 政

さゆるよの鳥のみたれをなげくらん かしらの霜の茂きねさめを 為

いかはかりつれなき枝そ松ひはら 木のもとあさき雪にむもれて

初雪のあさけのやまの小松はら かくてはかへぬ色もみてしか 実

枝をゝもみこほるゝ雪にまきひはら あらはれて猶さむき色かな 政

山ふかみ青葉も色にとられけり 雪や木からしひはらまきはら 為

あけまきのよりあふからに恨むひぬ へたてなきとはかゝるちきりを「二三

かひなしやことの葉のみはやはらかに ぬるよはよそのよゝの手枕 実

なをさりにいひ出つるをたのむ身も はかなやいつを限とかせむ 政

ことのはゝなひく姿もなよ竹の さすかをられん心ならめや 為

同二年十二月御百首中題改為卿

霞は今朝春の光にうつもれて 霞にはるゝ山そまちかき

こゝにみる程は雲井の秋の月 手にとる計袖にやとして

ふみからす芝生の中の一とをり 霜にみちあるのへのさひしさ

いにしへの春にかへらぬよをうしと もゝのはやしのかげやこふらん

はる山の空は木のみもけふりたち もえて名におふ下わらひかな 実

思ひしるね覚なくとも秋はたか こゝろの外の鳴のはねかき 同

よるきては光なしとやふる郷に にしきもひるの名をとゝむらん 同

春をいそく柳さくらに宮人の そむるころも色をかさねん 同

三ちとせの花のうへにも咲てちる「二四 ならひはかはる春やなからん 政

袖のうへははらふにたへすゆく道の 草にも木にもめてぬ雪かは 同

雪

桃

衣

昼

鳴

蕨

牛

霜

月

霞

詞和不逢恋

常盤木雪

煙 月そすむ衛士のたく火のうす煙 なひくを雲のうへにみるよも 同

柏 木のもとに散ての後も玉かしは みかける露の置所なき 同

書 うちいつるわかことのはも神代より まなひやきつる水くきの跡 同

(一行分空白)

鶯 霧にむせひ雪にこもりて山ふかみ わか春うらむうくひすのこゑ 為

菊 みたれ碁にかけし心のたねとてや きくもあらそふ色のさま／＼ 為

暁 こゑ／＼のかねのみたけや待わふる そのあかつきを先きかすらん 同

塙 ことのはの道まもるらし河くちの 関のあしかきあしき名もうし 同

鶺鴒 はるゝ空も雨もよならし陰くらき 竹をめぐりの家はとのこゑ 同

文亀三年正月十九日御会始 鶴有退齡

千とせとはをのかよゝにやよはふらん まつふくかせにつまのもろこゑ」二五

君か為更にかさねよなへてよの 千とせはあかしつるの毛衣 権大納言藤原実隆

すたちぬる松のはかすをありかすに よはふやいくよひなつるのこゑ 左衛門督藤原為広

君かよはひをのかよはひにとりそふる 雲井のつるのよろつよの声 権中納言藤原宣親

\*以上四首、底本ノママノ字配トス

同三年二月御百首中勅題

立春風 霜雪の草木もしるや天津空 春たつけふの風のすかたは

野夕立 山かせのすゑのなきほふほともなし 夕たつ雲の雨そゝきして

忘恋 われそうききのふはけふにかはるよを わすれて人におとろかねぬる

待月 入目さす雲にまたるゝ月のよを をのかひかりに秋かせそ吹

磯春草 あさみとり松の色風はるとしも またあら磯の浪の下草 実

竹露 くれ竹の末こそ風の夕露に まとうつあめの思ひをそしる 同

鴨 さはくとてにこりなはてそあしかももの たちぬは水のわかこゝろかは 同

薄雪雲 その山と契りてかへる雲ならば おもはぬかたの風やうからん 同

暁更梅 ぬるかうちを思へはおしきむめかゝや二六 さむるまくらに身をしほらん 同

虫怨 聞わひぬたかみの秋のうらみをか おもひしりぬと虫も鳴らん 同

山初雪 山ふかみちる木のはさへ雲霧の色かへたてゝ冬はきにけり 同

近恋 よそなからあはれともしる道もかな 身はいひよらんひまたにもなき 同

猿 柚木きる折しもきけは山ひこの こたへにはあらてましら鳴こゑ 同

江春月 秋みしも月はほそ江のみをつくし かすむや春のしるしなるらん 為

残暑 秋きてもあきをこゝろの松かせや 身を分て夏にふかむとすらん 同

橋落葉 山ふかみ木のは散らし谷かけに あらしのわたす波のうきはし 同

逢恋 せめてうき夢になしてや手枕を わか物からにあげはかこたん 同

野風 わけまよふぬなのゝ小篠そよさらに 風もやとゝふたくれのこゑ 同

同三年三月三首御会

花浮水 もろくちりはやくなかれておしとみる 花はいくよの水の春かせ

枝よりもなれてかけみし水なれば よそにもらさん花とやおもふ 実」二七

さそひをく花のしら波こく舟に あとみる水の風のゝとけさ 政

咲かゝるひかりをきよみ榎のはぬに しら玉しづくやはなの面影 為

有明の月みるうちみる夢は 昔なりけりなはるの面かけ

別路のはるのなみたやくもるらし 月にかすまぬ空はありとも 実

うかりける霞も夢とみる月や あわれ名残のみしかよの空 政

みるかうちに春も今はとゆく月の われてかなしき老にやはあらぬ 為

さりともと人にをくりし年月の はてはたのまむ行系ともなし

いはさりき思そめてしそのかみに けふまで同じつらさなれども 実

たへてよにあらし身なからとしもへぬ たゝいつわりになさむつらさそ 政

あさはかの思ひのたねもとし月も 何とこゝろの杉の木ふかさ 為

同三年四月御百首中 題為広卿

花 まかふらん山のさくらのたくひかは 都のはなの雲のうへのはる

初秋 よはからぬ秋の日影の夕すゝみ」二八 風にしらぬめつゆものこらす

不逢恋 まことには契なきよに生あひて 人をも身をたれとかはしる

山家 思へ人心にふかきやまならは とはれてもしる道やなからん

花 あたなりと思ひもすてぬはることの 心そはなにみえてくるしき 実

紅葉 しくるゝはほとなき秋の紅葉ゝを 心とゝめてつゆやそむらん 同

忍恋 これそ又人のこゝろよ身のうへに しらすしらせは同じ岩木を 同

山家 ふかく世に思ひはてすは山にても このこゝろの又やうからん 同

霞 天津空かすみの外の春の色は あらぬものとやよにおほふらん 政

月 よもすから月をは袖にやとし置いて 千里にゆくもわかこゝろかな 同  
不逢恋 もらしける名こそつけられなさま よしやむくひを思ひしる身は 同

旅 うきにたになるゝも夢を思ふ身の かりねのまくら後やしのはむ 同  
花 うらみしなみん人からを色香とて はなもなれまつ心なりせば 為

氷 みなの川波はこほりてつくはねの 二九 峯よりおつる山風のこゑ 同  
後朝恋 朝床にあるかなさかのうつり香や きえん命のかきりならまし 同

眺望 一筆の多しまか磯は浪はれて まかふや雲のあはちしま山 同  
花 心にもまかせてをさけ九重や はなもあらしをさかぬ所に 宣親

初秋 ふかぬにもふくにもよらて秋かせの 心のよそにちる一はかな 宣  
後朝恋 今朝はしもひとりことして恨のこし 契のこせる程そくやしき 宣

此卿作骨、可立雅俊卿之上賦  
同三年五月御会 二首

郭公数声 一こゑに明しやいつとさみやみ 空おほれしてなくほとゝきす  
一こゑをさつことにせし時鳥 いかぬかたらふね覚なるらん 実

ほとゝきす名こそわかなきことわりは しみて聞こそ思ひしるゝ 政  
幾こゑとかそへすよそすいよのゆの ゆけたも今や山ほとゝきす 為

夏草深 思ふそよ夏のゝ外も道しなき われをいさめの草はいかにと  
しけりゆく野嶋かさきの夏の色は 三〇 そこひもしらぬなみのうへかな 実

行とみしよるのほたるのひかりたぐ ありわれそむる草のはらかな 政  
冬かれにみし面かけもたとるまで 心にしけるまのゝかやはら 為

旅夢 しらすきて一よの夢にうらむなよ 松かねまくら風のやとりを  
たひころもことほりすくる山かせに なれぬる夢もいかゝとそ思ふ 実

こしあとのたよりの風とおもひねの ゆめをは何のさそへはかうき 政  
ふる郷にかよふもならぬおもひとや 夢路むなしきふしのねおろし 為

同三年六月御会百首中 題雅俊卿

簷梅 あら玉のとしにかわらぬむめかゝは ふるき軒はの君にみたれて  
なかもわひぬ物思ふあきの夕露に わかこゝろをや虫もなぐらん

寄月恋 さそへたゝ心のゆく多しはしたに 月にまかせて人にはるけさ  
心よりひとり／＼のやますみは ならふ家あもしらすかほなる

山家 立そむるかすみを春のたひころも のにも山にも今朝まよふらん 政 三二  
浅雪 ふりかはるとはかりみえて雪はまた きのふの霜の野への面影 政

寄原恋 千しほをは袖にかさねてはゝそはら うすきを人のこゝろとやみん 同  
浦鶴 うらなみのよるのおもひを鳴たつの 心のやみやよにならふらむ 同

霞 はるをいへは四方の高ねもそらの山の みとりふかめてたつかすみかな 為  
夏祓 こん秋のちかき川原やすゝしさも 手にとるほどの御祓なるらん 同

鷹狩 うらちかき末のゝ鳥立かりゆけは 影さへみゆる鷹のみかこ羽 同  
神祇 ましりてやいと聞らん松のはの ちりをへてよの住よしの神 同

鶯 としをへて宿にまつさく花しあれば またてもきなくうくひすのこゑ 実  
秋田 夕日影野山の色もうすくき いなはをかけてにほふ秋かせ 同

寄海恋 このみやば思へは人にありそうみの しほしほみちたえぬこゝろに 同  
松 君か代はもゝ枝のまつの江戸ことも こもる千とせを数にとらなん 同

初花 おもひあへぬ尾上のかねのほひ哉 今をはつせのはなの夕かせ 宣親 三三二  
水鳥 うちとけぬうらみはみえしをし鳥の ともねの床はなをこほるとも 同

寄獣恋 おもひのみましらなくてふ山のなの わひしきかくれをわひつゝそふる 同  
同三年七月三首

宮城野 色にいてん木の下つゆのまたきより まはきにうつる宮城のゝはら  
秋きても夏にまさりて雨をおもふ よにみやきのゝつゆをかさはや 実

花のうへにみすともかゝるしら玉を 分やはすてん宮城のゝつゆ 政  
咲はきのにしきをりかくみやきのや 行かふ人をたてぬきにして 為

あかしかたみせよやと思ふ人しもそ おもかけうかふ浪のうへの月  
秋の色よあかしのなみはよる／＼の 月ともいはし朝霧の空 実

もしほやく人もこそあれあしかた 月ともいはし朝霧の空 実  
明石浦 明石かた嶋かくれゆく月かけに みぬよもうかふ浪のうへかな 為

筑波山 よそめにはしられしものをつくは山 よしやしけ木の中のかよひち  
つくは山はやくもなにやたつ鳥の 三三三 木かくれてこそねにもなきしか 実

同三年八月御会百首 勅題  
湖上朝霞 ふる郷と思ふもあかす朝かすみ こそゑはちかきしかのうら波  
松間夜月 もりくるもかけきたまらぬ松かせは 月のかなたの空に更つゝ

初冬時雨 立かふる袖に露けき秋もなし けふのしくれば空にのみして  
帰無書恋 今朝の間にとはぬやいかに夢うつゝ 人にさためむ契ならしを

河水流清 天雲のかゝるやいつく山川の 水そこかけてある塵もなし



雨中待花 くるらん色香をはなにほはせて 人ためのなる枝のはる雨 実  
紅葉移水 秋風の木葉の色にうつりきぬ きのふのはなの春の山水 同

忘住所恋 けふはよしところたかへにかへるとも しらせて後のかこにもせん 同  
関路行客 たひ人の袖ならずとも関のくに 涙はとめしすまのうら風 同

霞隔遠樹 千里とや猶かすむらん雪にみし 木すゑはちかき嶺の松原 政「三四  
初秋朝風 秋をよに我のみしほるころとや 岩木にはらふ露の朝かせ 同

寒夜水鳥 ふしわふるわか身よいかに水鳥は たつ音しても明す霜よに 同  
従門帰恋 とちはてぬむくらの門のかへるさや 明ぬうらみを人にのこさん 同

海辺眺雲 ちかまくらね覚てとへはうら人の 雨とこたふる浪のうき雲 同  
山路梅花 行くらしやとりとるともくらふやま あやにてならむ梅のかけかは 為

秋風隔野 いましはとうきを心のしめのゆき むらさきのゆき秋風そふく 同  
歳暮澗水 下水はこほりし谷のきた風に たきととりあへず年そなかるゝ 同

返事増恋 しらせはやうき身をさめぬとはかりの 夢のまよひもわか行急とを 同  
社頭祝君 まもれ君神もむかしはつかへてし 此野ゝみちの末とをきよを 同

同三年九月三首  
擣衣寒 身の為とおもひかへしてさよころも ねぬへきものゝ霜にうつらし  
わか為にうつと聞ともからころも なへてよさむの秋やなげかん 実

春のはなの衣はしらぬ山かつの「三五 霜をや秋の色にうつらむ 政  
やゝさむみきけは心もうつたへに 里の名しるき朝かせのこゑ 為

蕙紅葉 露霜の松もさこそは下もみち ったのはならぬ秋をふかめて  
かゝるしもわか秋ならぬ松かせや 散をうらみぬぬたの紅葉ゝ 実

紅葉ゝもおるへくはあらぬ蕙かつら なかくや色のかきりをもみん 政  
うつの山分ゆく袖の色ながら 露をかけたる蕙のはかつら 為

憑媒恋 思ふにもよるへくもあらぬ人伝に わかことはやわれとしもなき  
ことのはをあたになすなよみかは水 つみのよるせのためしやはなき 実

身にはうきこたへなりとも待きかん さりとて人のいひやつたへし 政  
いへはえにむせふは千々のおもひとを ったふたよりの人もあはれめ 為

たのみつゝさのみつらさを聞もうし わか申たにいつはりもかな 宣親  
同三年十月御百首 題為広卿

春色 はるのゝは空もひとつのあさみとり たつやかすみの色もつゆけし「三六  
夏香 あすは又よそに忍はんたちはなの 玉ぬく月の袖のほひを

秋声 立いてゝしるへきあきのことゑならし たゞ月ほしのふかき夜の空  
さりともと心なさはこぬくれを あかつきかねにおとろかされて

春色 とけわたる氷のあとのあさみとり 春にうつろふやまの下水 実  
はななてはなよりふかきうつりかそ けにいひしらぬ池のはらずは 同

夏香 たか秋とわかぬあらしものへの花 山の木のはになへてかなしき 同  
秋色 引出るほとまても猶小車の わかたくれとたのみこしかな 同

恋声 咲しより花にゆきゝのこたへして ひまやながらん春の山ひこ 同  
春声 よなゝの月にことなる色をみよ 露の草木にそめぬ秋かな 同

秋香 分すてし花の千種はこゝろして 袖にとまれる香こそあたなれ 同  
秋色 雪をこそ今は待み冬されの あまり色なき野にも山にも 同

冬色 鳥たにもねくらをさして行空に われうかれぬと音にやたてまし 同「三七  
恋声 よこのうみやひらのねおろしかすむらし みとりにかへる雪のしら浪 為

春色 軒ちかみ何たとるらんほとゝきす はなたちはなのかやはかくるゝ 同  
夏香 袖のうへの露をたへても払にき かゝみよいかに霜のましらるか 同

秋声 さらてたにおもき薪の帰るさや 雪をこつげの谷の北かせ 同  
冬声 恋香 みしや夢とはかりおもふまくらかの きえずはありとも身やは残らん 同

同三年十一月三首  
雪中眺望 雪ふりて月は有明のよしの山 くまなきかけの奥もしられず  
思ひやるにあかすも有哉行てみは 今朝こそ雪のうらの速しま 実

雪にゆく心はえやはあとみえん 雲をはしらす峯のかけはし 政  
のこれ月はなも紅葉もさもあらは あれのみさきの雪の朝明 為

おしといひふけぬといへは残りなき としの名残もよるのうつみ火  
かへりてはすさましかれやうつみ火の かきあらはせるとはすかたりは 実

うつみ火の影よりも猶かすかなる「三八 わかよかたりはきかれんもうし 政  
かたるまにかしらのゆきもけぬはかり 老をなくさのうつみ火のもと 為

いすゝ川したつ岩ねによる浪も うこきなきかけやみえてのとけき  
せき入るすゑまでも猶をとほ川 をとに聞えし水のしら波 実

神ち山ふもとの川はすむとすむ 世の水かみをくみてしらなん 政  
心たれにこりて世をしわたらゑや 大川水のきよきなかに 為

同三年十二月百首 勅題  
初花 おもふにもたくひなからんはなの為は 一木にさける程をこそみめ

田上雁 しまるらんころもかりかね露霜の小田もる袖を忘れてぞ聞

松雪 いくたひか雪のうちにもあらはれん おれかへる松のもとのみとりは

寄水雑 までといふ水はありともなかれゆく としにかくへきしからみそなき

杜霞 春にやはあはてのもりは冬かれの 霜のかれはも猶かすむらん 実

早秋 草木こそまたき秋にもたへさらめ 袖たにしはし露にしらるな<sup>三九</sup>

冬暁 かつおしみかつおとろきぬとしくる、有明かたの月のなこりは 同

寄市雑 よものたみ我が大君の市にいて、ひろきめくみをうるもかしこし 同

檜原霞 春かすみたゝすは今朝も雪きへぬ ひはらやをのか色もなからん 政

古宅月 影更るうらみはきて秋かせの やとのむかしを月にこひつゝ 同

磯千鳥 磯ねうきまくらをしらてさよ千鳥 おもふかたにや鳴てゆくらん 同

久恋 人はいさあはれもかけぬとし月を たへしやあたに思ひをとさん 同

寄橋雑 橋はしらくちすもあるらし仙人の 尽きさらんよをわたるためしに 同

草軒青 こし春のかたちの小野や下もえの 色にとらるゝ雪のむらきへ 為

夜虫 秋されはねさめのとこの露のそこに きり／＼すなきてさよ風ぞ吹 同

初冬 はるも又なたかき空や定なき しくれにつれて冬のきぬらん 同

切恋 行急なきけふりくらへもたえてみに 心にけたぬ思ひとをしれ 同

寄枕雑 はけしさのうきよの夢もいつさめむ あらしのまくらあかしかねてき 同<sup>四〇</sup>

同四年正月十九日 春の色をとしの子日にまかせては ひくてもまたし庭の松か枝

松有春色 位山今一しほとまつの色に めくみあるよの春おしそ思 権大納言藤原実隆

色そはん春とはしるしまつならぬ わか君か代も千世のはつしほ 民部卿藤原政為

世は春と心もゆらくたまゝつや 千とせのほどを君につくらん 左衛門督藤原為広

同四年二月御百首 勅題

立春 時かはるけふにあけても先ぞ思ふ 民の草はのはるの初かせ

夕薄 まねきてや入日をかへす袖ならし おはなにとをきたくれの色

埋火 さえ／＼しよはのとかにて積らん 雪をもこゝにうつみ火のもと

待恋 限あれはたへてまつへきつれなきも 有明の月に思ひまけぬる

春月 かすむとはいつみし夢そさえかへる 霜よのかねにすめる月影 実

山鹿 うき袖にこれよりふかき奥はあらし と山のさとも小男鹿のこゑ 同

神楽 たきすすむほかけもしらむ雲のうへに 今朝の神あけのあかぬこゑ哉 同<sup>四一</sup>

野宿 遠近をとふへき草のゆかりたに しらぬかりねの野へのつゆけさ 同

尋花 はなの為たかしほりともしらぬたに 今日山ちのたつ木とそなる 政

初雁 つゆけさよ猶うきかすの秋のかり なきてくるよの袖のかたしき 同

田水 朝米ちりもくもらぬ田面かな はらふあらしをもる人にして 同

見恋 いひよらぬほとこそ猶もたのみつれ 色にはみえぬこゝろつよさを 同

旅行 折しかむみねの椎柴をとたてゝ はや暮ふかき山かせもよし 同

落花 手折かねよそにみすてし木々の花を をのれかさして行あらし哉 為

残暑 きけは猶てりそふこゑよ秋来ても いかなるかけかひくらしの山 同

寒月 貴舟川なみは氷てさよかけに あられ玉ちる月のさやけさ 同

初恋 わかむねにけふ下もえの思ひくさ しけらん末は野山とをしれ 同

岡篠 笠のはのそれとはかりの小篠はら いてそよ人や岡へ行らん 同

同四年三月三首

花似雲 よそにみぬふる郷人のことゝはむ<sup>四二</sup> 雲はこなたのみよしのゝはな

咲そむるはなはふもとのにほひをも わかすは同じみねのしら雲 実

みねたかみかゝらましかは偽の なきよやいかに花のしら雲 政

山とをみ咲もそらめとおもかけの 心にかゝるはなのしら雲 為

朝かすみはなに木ふかき色みせて きふの雨の名残までうき

晴ゆくもふるものとけきはる雨は 心をはなにおくとこそみれ 実

降ほどもさはかりとはみぬはなに今 雨のなこりやなをにほふらん 政

ふりはれしよの間の雨の朝もよひ きふは色にかすむ木まかは 為

心ともさはぬかせの行急には しめてちらさむことのはもなし

空にふく風は恋ちのなになれや めにみぬものゝ身をしほりける 実

ことのはもむなしきくれの秋かせに われつてかほに吹もうらめし 政

末は猶いかなる恋のみちのくち<sup>四三</sup> はけしや人の心あひのかせ

此卿風情、以此躰世外不庶幾、於道口者為宗匠畢<sup>四三</sup>

同四年閏三月御百首 題政為卿

早春梅 波風を更にしつめて四のうみも わかこゝろなる春やたつらん

五月雨晴 五月雨は軒のしつুকを名残にて 立いてん空そ袖にくるしき

樵客帰月 かへるさをわか影そへてま柴とる おなし山ちを月もゆくらん

落葉深 みしつゝや霜の朽はに<sup>四四</sup> そひて 又はつしほのみねの木からし

\*書陵部(一五二・三一三)本作「ちりそひて」

都春曙 おりにあふ月とはなとも名にたてる 都のためのはるの明ほの 実

河五月雨 山川にたつ空もなき水とりの 床はこす糸の五月雨の比 同

遊子行月 かきりなき心や空に行月の さそひていてし秋のさと人 同

窓落葉 はらはぬも心つからの紅葉ゝに しれかしまとのふかき思ひを 同

早春山 こほりある空の八重山はるのきて かすめる色もむすほゝれつゝ 政

原夏草 おきいつるなつのゝはらはまくらかる ほとさへみえぬつゆの草村 同

秋夕述懐 うきをたにたかたくれのたくひとも みえしとおもへは袖のしらつゆ 同

紅葉秋深 またし今うつろふ色にそめかへは 四四 紅葉もす糸の秋のしくれを 同

寒夜霜 雪といはしそれともみよとをく霜に まよふこゝろもふかきよの空 同

紅梅遅 山守のこゝろをいつかゆるし色に 咲て手をらむ梅の一えた 為

岡五月雨 さみたれはくりかへす糸のなか岡や ふる郷いかに賤のをた巻 同

初秋風 一とせのなかはもすきぬとはかりに こゑほめかす風の下おき 同

田家時雨 くれすこき田中の庵のこもすたれ かゝる時雨も誰か聞らん 同

旅泊雪 下折の竹のとぎりまのうらふねや おのれとゆきの蓬しふくらん 同

永正元年四月三首

新樹朝風 思ふにもつゆけきものかふかみとり はなの香とをき木ゝの朝風

花も木も同じみとりのあさかしは ぬるよの夢や過しはる風 実

はなはまたわすれぬもうき面影を わかにはらへ木ゝの朝風 政

ふかみとりはなは夢かとおもかけの 立枝ふきしほる朝風のこゑ 為

今そしるまつをとはんのこゝろにて 都にふかき山ほとゝきす 四五

ひとこゑもまつかひあれやほとゝきす おもひあへすはきゝやもらさん 実

いたつらにまちあかすともおもふよを 誰もらしてかなくほとゝきす 政

やよいかたへてまたすはほとゝきす きゝしはつねもはつねならめや 為

たきのいとにくりてやしりぬみたれても おなしすちななる山かせそふく 実

玉のをによらはやよらむ滝のいとを なみたにのみも誰かかりけん 実

くり返すわさをはいさやしらいとを 何やまひめのみたす滝なみ 政

山ひめのをるやこゝろの滝津せに くりいたすいとの五月雨のころ 為

永正元年五月御百首 題雅俊卿

春雨 さたかにはふるともみえずはるの雨の いとゆふはかり空にみたれて

湖月 月やすむ秋こそにのみつうみに うへしやなきも一葉のこらて

寄雨恋 折しもあれわかたくれの空の雲 おもひもみちて所せきなる

夜燈 何方にそむけてかみんともし火の うけさたまらぬ窓のさよ風

朝鶯 かりまくら草のゆかりもしらぬのこ 四六 名残は今朝のうくひすのこゑ 実

萩風 幾夏か物思ふそにて音信で なみたにあかぬ萩のうは風 同

寄橋恋 まつらむとおもひやらるゝたえまたに なをはしひめの袖はぬれけん 同

寄日祝 いっはとは若木の枝にさしのほる ひかりも君か代にくもらめや 同

余寒 春さむみかゝらむとてや天津空 あまりのとかに年はくれにき 政

夜鹿 ゆく多なき夢をいかにとたとるよに かよふやいつくさをししかのこゑ 同

落葉 あたしのまよひをふかみ色にみて 木のはゝもとの霜にくちぬか 同

寄鳥恋 思ひねのまくらつゆけしゆるかりも たか秋風のたよりとかなく 同

嶺松 吹をくるあらしは松に音くれて みねこす雲の跡のさやけさ 同

春雪 霞あへぬとを山まゆのみとりさへ 色にほのめく雪のむらきえ 為

早秋 荻はらや人はかねにしふる郷に いてそよ秋とゆふかせのこゑ 同

豊明節会 月雪のとよのあかりやいと竹も おりにあひたるしらへそふらん 同

寄玉恋 しらせはやあふさきさるさに袖のうみも 四七 みちひの玉はありてふものを 同

田家雨 小山田のいほねんものかいなむしろ しくゝあめのふりあかすよは 同

同元年六月三首

瞿夏 此ころのはなそとこなつなきてへん やまほとゝきす一こゑもかな

朝なゝはつはなそひてなてしこは けに床なつの盛をそみる 実

床夏のはなよりのちをいかゝみん 秋まつ草の色はわかしな 政

つゆふかき庭のをしへにさきてけり こやことのはの大和なてしこ 為

軒ちかきおきのはならぬ秋風も さなからみえて行ほたるかな 為

飛ほたるひかりのうちの月日とや 又あきかせもふかむとすらん 実

もらてゆくほたるよいかに夕すゝみ けふあすとのみ思ふ木かけに 政

したひえぬ夏と秋との中川に なれもなかれてゆくほたるかな 為

さもこそはたのむ方とていゝるるとも 神にしのはぬ中のくるしさ 為

とし月をかけてかひなきみのはひや 神もなけきの杜のしめ縄 実 四八

人にこそかけぬたのみをはつせやま むなしきかねにさてや明なん 政

はてしなくまよふ恋路の行急をは えやはくるとの神もをしへん 為

同元年七月御百首 勅題

窓散梅 霜さやく竹のは分のにほひをも かせやはしらぬ窓の梅かえ

七夕後朝 夢うつゝひとにさためぬちきりにも 七夕つめの心をそしる

洩始恋 あちきなくたれにまけてしわれならん いはてやむへき心つよさを

遣水 山川のしらぬなかれもみかは水 心をやりてすめる影かな

竹林鶯 消あへぬ雪のむら竹奥ふかみ 春をやたとるうくひすのこゑ 実

嶺上鹿 さをしかの妻はつれなきなみたにも おのへの松は猶しけれけり 同

舟中除夜 あま小舟こよひもはてぬひととせを はかなきみにも又やつむらん 同

浦嶋子 玉くしけあくればなひくしら雲の 行多かなし浦かせの空 同

正朔子日 ふるとしは一よの雪の小松はら はらひもあへず引子日かな 政

河辺荒和祓 思ひいつる水上とをし老のなみ 四九 こえていくせのみそきしつらん 同

遠郷擗衣 あさころもいまやうつらぬ雲霧の 遠かた人もおなし霜よに 同

人伝恋 いたつらに猶たのめとやなくさまむ われつたへかほの人のことのは 同

野酌 みたやもりくむ盃のいくめぐり 露のめくみの秋にあふらん 同

岡辺早蕨 岡のへや入日はきて下つゝし ともすひかりに手折さわらひ 為

驛旅雁 夢をこそさそひてゆかめ心さへ みやこにつるゝはつ雁のこゑ 同

雨中網代 雨なからこほりて落るやま風に あしるの床やうちの川波 同

後朝隠恋 今朝こそは別し袖の露の間に かはりてなとかしらすかほなる 同

慶賀 釣たれしそのいにしへもすなほなる きみかひかりの璜とみるらん 同

同元年八月三日 漫天秋水白茫、 霧わたる水のなかれ淵すゑはれて 明ゆくなみも秋かせの空

いつとなきふしのみ雪の面影も たゞ秋かせのたこのうら浪 実

すさましとみる秋かせのそらの雲 それも立そふ水のしらなみ 政一五〇

空のはて波のかきりも有明の 月にうかふや西のうみつら 為

隣鶏鳴通知夜長 秋のよはこゝにしもなく八声をも とをやまどりに明し怱つゝ

秋さむみ枕にちかき鳥の音も ねさめの月にまたれてそ鳴 実

いつもきくおなし枕にゆふつけの なかてそなかきよをはつけゝる 政

夜なかしなそなたの里も幾度の ねさめの後の鳥のこゑ 為

林下幽閑気味深 たつねはや木の下すみの身ひとつは 中／＼なをき道もしるらむ

たれかしたる世はあさちふの露の宿 こゝろにとをき雲のはやしを 実

住なればたれも思はん春秋の あはれをしるは木との下廡 政

山ふかみ心のみつは落葉にも むもれんものか木との下露 為

式部卿邦一親王

月そすむよさのうら風はる／＼と 秋なき浪に秋をひたして

いく里の秋にかかこつゆふつけの なかぬかきりは明やらしよを

よの中の色にはしらし春のはな 五一 あきのはやしのかきこゝろは

同元年九月三日 よるの空名残しもなき有明に ひかりおさまるかきりをやみん

のこるよの山のはしつむうす霧に 半天たかきあり明のつき 実

秋のよの月は有明のかけにこそ つれなくしたふ心をもしれ 政

かたふかむわか世のすゑも有明の こゝろほそさをそらにしれとか 為

松のはも秋やはしらぬ下もみち よその千しほはあさき色かな

うつろふやのへのはなゝる人こゝろ 山の木のはの色の千種に 実

あかすみる心にわくる色はなし 枝のもみちのこきもうすきも 政

萬かへてはゝその外もうき秋の 色の千種にそむこゝろかな 為

をしあてにうたかふかたの恨をも しらすやわれに絶間をくらむ

おもひいつるたよりなくともむさしあふみ かけてたれをか又はたのまむ

とはれしもならひあれはと思いてゝ またいつかはたのむはかなき 政一五二

とはれぬるなさげの。とき有て さくてふはなのたねしならすや 為

同元年十月御百首 題為広卿 せれとしもみえぬかすみのふかき色や あけゆくみねの松の一しほ

うき秋におなしなみたよ妻こひの 鹿をさしてもわれとこたへむ

とへかしなものおもふ袖のおきふしも 河そひやなききたえむものは

さらにこの冬のまつりや千はやふる かもに色そふ松のこゝの葉

先さくは一えはかりのむめのはな いくつにこもるにほひなるらむ 実

尾はなちる秋かせふけはさをしかの つまゝつやまも浪やこゆらむ 同

はらひあへぬ心の塵のはてもうし こひの山ちの雲かゝるまで 同

老すてふ門も名にあれや君かへん 千とせのかすの百敷のうち 同

春かすみおほろけにたに山まゆの みしにはあらぬ朝ほらけかな 政

秋かせのまくらにそしるさほしかの つまどふ道もよさむなるらむ 同

をきまよふ霜に日数をかさねても 五三 氷をふゆのはしめとそみる 同

かへるさの道のさゝはらつゆけくて なをふしわひむ袖をしそ思 同

法の水むすふ契もくちせしと なにはにふるき跡や尋ねん 同

むめか枝の名たかきみねに入月も おもかけかほる春の朝かせ 為

梅

仏寺

寄竹恋

氷

鹿

霞

禁中

寄山恋

鹿

梅

神社

寄河恋

霞

鹿

梅

稀問恋

紅葉色

在明月

同元年九月三日

擣衣 聞からにすまのうらふれうつ音も あはれしほくむ麻ころも哉 同

寄松恋 しられめやよそになく鹿のまつひとり おもはぬ浪におほれ行とも 同

神社 さらにこの君と臣とやゆきあひの 真をたゝす住よしの神 同

海路 吹かはる風もあやしのうら浪に 真撒しけぬけ奥つ舟人 同

同元年十一月三日

水鳥多 山水にこほりも霜もうちわひて 木すゑのをしそもろこゑになく 池の面は秋のあらしの木のはかと 色／＼うかふ水鳥のかけ 実

池水の底のおもひをしかもの ころ／＼さむき夜床にそしる 政

あちむらは立さはく月もさよ風に こほりををくるにほの海つら 為「五四

おしと思こゝろもみえつひとすちは おなしあどゆく雪のかよひち

小車のたかひくあどか下の帯の 道はかた／＼雪にみゆらむ 実

から人は思ひたえねとふりつもの 雪こそ駒の道しるへなれ 政

道とをみくろのはや緒の一すちに ゆきやこゝろの行多ひくらむ 為

松もいさいくたひ霜にあらはれて 神代おほゆる神はのかけ

霜さやくあかつきさむし神かきに とるもうたふも神はのこゑ 実

君をいのる色もかはらず神かきや さす神はの露をへぬらむ 政

神なひのみむろのさかきうへそへて 御代もときはのかけいのるらし 為

同元年十二月御百首 勅題

歳中立春 をのつ。らふくともなしやとしふかき 雪にかすめる春の初かせ

月前郭公 忍ひあへす月に鳴よのほとゝきす 秋にあはしも思ひさためし

松風入琴 同じ音にかきなすことのとゆむ間を われにいさめて春風の吹

寄葛恋 後はいさ風の葛葉。草のはら一五五 ふかきうらみの今をとひなん

霧織女帳 天河きみきまさなむあき霧の とほりもたれをまつとかはしる 実

雪中待人 みせはやなひとりこほるゝ下折に うちらはらふ袖を松のしらゆき 同

寄煙恋 いかならん心にもあらぬ浦かせに もしほのけふりさてもなひかは 同

草庵貽夢 はかなしや夢はむかしの花のものとに 残るよふかき草の庵は 同

六月立秋 おもへなをうき秋たちぬいかならん としのなかはもくれあへぬ間に 政

暮春鶯 くれて行はるをかたはらうくひすの かへるかきりを思ひやはせぬ 政

松輝 \*底本、「ろ」右傍ニ「本ノマ、」トアリ抹消

雨はるゝもりの下葉のつゆ分て 夏なきかけに日くらしの声 同

湊頭旅泊 波かせよかゝらましかいいうきまくら こよひたゝなはいなのみなとを 同

寄鏡恋 とはぬ夜の袖行水をおもかけの はなのかゝみとみるもはかなし 同

故郷萩 うへすてしもとあらかきのあはれさへ かねて残る小はきはらかな 為

首夏 君しけふたまふあふきのうすからぬ めくみを人やわきてあふかむ 同

狩場棄 かりころもそれもうしやはしたかの「五六 すゝのをふゝきさえくらす野に 同

寄浦恋 わか身こそ波のゆく多も何ゆへと 聞や名たかのうら風のこと 同

こと浦のなかもよいかに難波江や 葦のとほその明ほのゝそら 同

\*歌題、書陵部「一五二・三二三」本作「江亭眺望」

同二年正月十九日

亀万年友

よろつよもかはらぬみちにたつねみむ

かめのうへなるやまとことこの葉

吉美賀代者常世乃久尔農常不止

支齒比毛龜能宇倍遠千喜良謀

権大納言藤原実隆

をのかすむみつのみとりの亀もしれ

君にかそふるよろつよの春 民部卿藤原政為

万代のかけさしくみに亀のうへの

山もうかふや君か御池に 左衛門督藤原為広

\*以上四首、底本ノママノ字配トス

同二年二月御百首 勅題

子日松 引手よりのへの雪間もあらはるゝ 松かねの日の春の一しほ

禁中月 今こそあれ猶いにしへにあふきみよ 雲井の月の代との面かけ

閨時雨 つゆけさの夢路ゆるさぬさよまくら しくれもそらに行方やなき

寄鶴祝 花に鳴水にすむてふもろこゑに「五七 契かをきしわかのおうらつる

たくへては我が身かなしきいとゆふの 行方しらぬのへの春かせ 実

岡薄 松たてる岡へのおはな打なひき 波よせかへる秋かせのこゑ 同

滝水 夢とみし波も氷でたきつせの 中にもよとは冬そしらるゝ 同

霧中泊 うきまくらこれや誠のからとまり もろこし舟の浪そかけゝる 同

尋花 よしやけふあくかかれてし心たに はなにしられて春もかへらは 政

夜萩 かけくらき軒の下萩音更て 月まつ袖に秋かせそふく 政

田霜 神無月はるとかへすならひあらは 田面の霜のはなやおしまん 同

寄常恋 めくり逢ぬ中にはみえしか。帯に（た）うらみをしるすためしありとも 同

老後懐旧 老そうき今はみしよをかたるとも まことすくなき名にもこそたて 同

社頭花 神もしいいやはねられん一よまつ 千世もおもふ花の木かけは 為

初秋雲 物おもへ。とはかりくるや秋ならむ 心うきたる雲のはたてに 同

落葉随風 身はかろくおもひもすてぬ山かせに 五八 つらさまさきの散まよふこゑ 同

寄磯恋 我ゆかむ君やはたつねこよろきの いそく足なみ波あらくとも 同

山柳 なをきをは鉾杉にみせて神ころ やとるやさかきにはほかく山 同

路芝 道としもわきてみえねと山かけに 芝生みしかき末のかり庵 宣親

同二年三月三首

花間鶯 咲みちておのれ木つたふ枝もみす はなよりいつるうくひすのこゑ

うつるなよ桜ひとつをねくらはと 思ひしるへき春のうくひす 実

うくひすの今朝なくこゑに起いつる 花の下ふし名残そへつゝ 政

霧ふかき太山いてゝもはなのかに 又こゑむせふ野への鶯 為

散ぬらん木かくれ遠くなかれてゝ はなに奥なき春の山みつ 為

はては又さそふ水ありと行花に かせのやとりはとむともなし 実

咲ちりしはなや雲水よし野川 色（いろ）なかれて行跡もなし 政

大井河ふくやあらしのかせにかけ 五九 なみにたえゆく花のうきはし 為

馴こしは更に夢なる春もなし あたにちきりて誰をうらみん 為

契りしはあたる春の末のまつ たくひもつらしこゆる藤波 実

つゐにたゝ空たのめなる春くれて 人にはしらぬ別もそうき 政

契さてむなしき雲に入とりの め（め）わたるほともあひみてしかな 為

わか身にはかすむ涙の空ははれて あふよやさらに春にわかれん 宣親

同二年四月御百首 題政為卿

春神祇 石清水そのかみわさのそのかみに 今たにかへせ袖のはる風

秋夜 八こゑなくかすにまさりてなかきよの 時しる鳥や鳴のはねかき

冬夜 あら玉のとしのうちより又さきて はつはななぬ梅もめつらし

夏恋 くらへては人にはふかきほとゝきす またるゝうさもしたふ名残も

秋神祇 秋をへて染こそまれ童田やま 紅葉もあかぬ神やすむらん 実

冬海 冬のくる空もそなたとこしのうみの あら磯なみや先しくらん 同 六〇

春草 あら小田の雪間の草の若みとり はやくもはるに返す色哉 同

夏速懐 身はふりぬ窓のほたるの光にも 心のやみを猶やのこさむ 同

冬月 冬こもりともなふかけそやとりきぬ よふかき霜の蓬生の月 政

夏野 立いつる里の中道のをわけて いくたくれもあかぬすゝしさ 同

秋鳥 秋かせの木末にはるゝむら雨を をのかつはさの色とりの声 同

夏松 みしかよまなにおしからん波のうへは たゝ明ほのゝ天のはしたて 同

春恋 くれなゐの色かもれは花ぞめの 袖につゝみしなみたともみよ 政

冬神祇 神山やみなみにむかふ日影さへ 袖にさえゆく北まつりかな 為

春杜 たへて人きかずはいかゝまたきかむ はなも老そのもりの下かせ 同

夏夜 よしや月千よを一よの空とても なをおしからてあけむかけかは 同

秋祝 四方の国つくるにたへぬ民やなき いなほの露のめくみあるよは 同

冬尺数 寺ふかみあかあの水たゝきすてゝ はなさらあらふ音もさやけし 同 六一

同二年五月三首

惜郭公 今よりのよかれよいかほとゝきす あきにあはしの思ひありとも

またてきゝゝてもあたに思ふらん 人にはあたらほとゝきすかな 実

今よりのよかれせずともほとゝきす ほとなかるへきおのか五月を 政

したひわひぬよるのにしきかほとゝきす 夢の一こゑふたむらのやま 為

待いつるひかりにそしる雨の中に くらす五月の残る日数も 為

五月雨晴 五月雨はまたれ／＼し雲間より やかてあつさにむかふ日の影 実

此まゝと思ふはれまもさためなき 雲こそこのれ五月雨の空 政

はれまそと立いてゝみれば夕月の かけより明る五月雨のそら 為

かへる日をまつのかた枝のさしなから 契りしまゝの道もかしこし 為

それとみて入もてゆけは山ふかく 松はらとをきみねのふるてら 実

いつくまでふかきあはれを送らん 野寺のかねに松風のごゑ 政

松にふくもむなしき風のごゑならし 六二 うき世絶たるみねのふる寺 為

同二年六月御百首 題為広卿

雲 ちりひちの山よりいてゝひとすちの 雲の行急や空にみつらん

渡 人わたす小舟ひまなき水のうへの あはれこのよのわさとやはみむ

蜘蛛 ほと／＼にみるもはかなし蜘蛛のぬの それにもかゝる虫の命よ

扇 をのつちか木高きもりの下草は あふきの風にみてもすゝしき

庭 春といへはおきをふかめて田子の浦や かすみの浪のたゝぬ日もなし 実

霞 つゆよりも身はかりこものかりのよを なにしかさのみ思ひみたるゝ 実

熊 しろしかしたゝいたつらにかり人の くまにもあらぬえ物有とも 同

絵 色どるもかきりこそあれ墨かきの 山はいく重をたゝみなしつる 同

霰 打もぬぬ心や玉をぬきためて 霰はけしきよさむわふらむ 政

泊 波風をふせくにはあらすあはちかた こよひいはやのとまりなりとも 同

神 手にとるもさす神はも君を祈る 心をふかきねさしとやせん 同「六三

雉 なくきゝすおほつかなしやまかりせし かたのゝ春のかすみかくれも 同

枕 出かぬるうき世をいかにしきたへの まくらもちりははらひてもねん 同

日 朝ひこかはへさすかけやかひかねも さやにみえたるさやの中山 為

葵 御あれそと松にあふひや人は神 かみは人にも心ひくらん 同

馬 人もしれとすればむちを大津馬の いたくも馬はすきかてのよと 同

鷹 とりこほす鳥。毛はなは名のみして かほるやたかのすかた成らん 同

筆 まなふへき三のすかたはふてのうみも 千尋の底ぬえやはしられん 同

同二年七月三首

江荻 しらさりき入江のおきはなみ風の すゑのまつにもこゆる音かな

更ぬるか入江の荻のはなの色も しろきをみれば月の下かせ 実

はけしきは聞程もなし夕しほの 入江にしめる荻のうら風 政

さす舟の入江のおきやさほの音も みたれてそよく秋のうら風 為

袖露 秋をのみ心にそめて袖の露「六四 色なきものゝふかき色かな

かゝるへき袖とはかねて思ひこし 秋をわすれて露やうらみん 実

おかぬ間もほさぬは秋の袖のうへを 猶いかにとかつゆかゝるらん 政

秋といへはうるほふ袖や久かたの 月のかつらのしつくなるらん 為

立帰し思ふ人にもしられしの 恋ちを神にはこふあゆみは

それもかなおなしのりもみし人の なてものならはしるしもそある 実

とし月のわれをことほる限あれな 千々の思ひも一ことの神 政

いのりきやさてもうき名の竜田山 心のかせのはけしかれとは 為

同二年八月御百首 此本本歌、同意敷

窓前梅 ふかきよの窓に入くる梅かゝも はなにそむかふ灯のもと

七夕迎夜 とし月をいたつらふしのからころも あふよにかへすあまの川かせ

依雪待人 みよしのや思ひたえけん音つれも 雪にうらみや有明の月

夕陽映嶋 住よしや松のこなたにくるゝ日を「六五 是るゝのこすあは嶋山

独述懐 うき事もよしやしはしと身をやすく 思ひなすへき老はきにけり

垂柳蔵水 山本のあそひやなきおきふしに たえ／＼みゆる水の木ふかさ 実

山月入簾 こすのうちもあらはにみえてまゆすみの みとりにゝほふ山のはの月

野亭月 さひしはなれしなからの草の戸も かれのゝ雪に思ひわひぬる 同

厭賤恋 よしやそのしなにもみえしとはかりを なさけしるかたにゆるすよもかな 同

名所鶯 たつた山よをこめてなくうくひすに ゆふつけとりはまつともなし 政

荻催涙 をのかうへの露もろしとはしるらめや 袖にかなしき荻のをとかな 同

時雨晴陰 身そつみにくらきまゝなる村しくれ いつはる雲の行ゑをもみよ 同

難忘恋 何事か夢ならぬ身にうき中を わすれんとするもさすかくるしき 同

寄鏡神祇 今ほよに神をかゝみそ岩戸いてゝ みし影おもへあまのかく山 同

春草短 春あさみあるかなきかともえてけり こやかけるふの小野ゝ若草 為

朝水室 夏まてものこるを君かよゝしとて「六六 くさやつけのゝ氷室成らん 同

紅葉如錦 下草のはなはぬものゝたてぬきを にしきになすや木ゝの紅葉ゝ 同

伝聞恋 あふみちの伝とはきかておもひのみ すゝのをふゝきすゝるなるこゑ 同

遂日懐旧 うつりゆくとしそとおもへあるはなく なきは数そふ月日なりけり 同

同二年九月三首 此作意、如何候哉

百舌鳥 野への色は秋かせ立てなくもすの よにとはれぬも心つからを

たくへても人ことしけきよを秋に きかしとおもへはもすのなくこゑ 実

木すゑにもねをたえぬへき時しありと きかしくとも 鳴もすのこゝろをそしる 政

朝戸いてや人は木すへの秋の霜に かねなてさむきもすの「一こゑ 為

はつしけれ色つきそむるやまにても いつれ木のはに道たどらん

さをしかの跡のみのころおくやまの こゝろも色にみゆるもみちは 実

深山紅葉 山水の落るひゝきもいかならん 分こしあともろきもみちは 政

花こそはあたらすかたのみ山木を 又かたはらにみるもみちかな 為「六七

うしといひしこゝらの人のこゝろをは みはてゝかへるあきならみそ

末葉にもしはしの露はかゝりてむ くれ行秋そ風もふきあへぬ 実

をくりきてわか身にとまる一とせも 今ひとゝきの秋はくれけり 政

あすは春としは暮ともしたひみん 秋のみとてや秋はつれなき 為

同二年十月御百首 題政為卿

春日野 いくとか雪まのくさもあらはれし はるのひかりのかすかのゝはら  
須磨浦 すまのうらやこのまもりこぬ月も猶 心つくしのあきのなみかせ

筑波山 思ひ入はてやなけきのつくはやま はやましけ山道はありとも  
海橋立 あまのかるみるめにあらぬ海松の 波にうかへる天のはしたて

葛木山 春の色になへての雲もたをやめの かつらき山よ花ならずとも 実  
作良之奈里 うき秋よ身をはさらしなさらしなの 外になくさむ月はありとも 同

石瀬杜 種しあれはまつのおひけるためしをも いはせのもりの名にやたのまん 同

芦屋里 さそふかせまたすしもあらぬよそめかな 六八 芦屋のさとのはなの八重ふき 政  
阿武隈川 雲とをく川なみふけて行月の あふくまもなき名になかるらん 同

浜名橋 中絶しちきりをいかゝなみこゆる はまなのはしも袖のほかゝは 同  
還山 はけしきよこしちのかりねいくたひか まくらの夢もかへるやま風 同

手向山 もみちにはあくへき神もあかしたや はなを手向の山かせのこゑ 為  
水荃岡 秋にそむ心の色もつかひいてぬ こやことのはの水くきの岡 同

伏見里 かひなしや行もかへるも里の名の ふしみのよはの夢路はかりは 同  
鈴鹿河 波にのみいのる御代とてすゝか川 八十瀬の滝にくたくこゝろよ 同

大淀浦 浦とをきかすみの波の大よとに あまのみるめもたとるころ哉 雅俊  
因幡山 うき雲や立わかれても夕しけれ いなほの山にまたかへるらん 同

三津浜 波高きまつかねまくらかりにたに 夢をはえやはみつのはま風 同  
此卿此分、無風情也

同二年十一月三首

寒閨月 霜よをもへたてゝふかきねやのうちに 六九 こゝろとみつる袖の月かけ  
よをさむみすたぬ月やねやのいぢに 秋のあふきの色はかりなる 実

雪中空望 閨のうへの霜もさなから板間もる 影しきわふるさむしろの月 政  
ねやさむきまぐらの霜のこほるよも とけてみよとの月のさやけさ 為  
つもりてはよるの色なきやまのみに ひかかもまたぬ雪のさやけさ 為  
いつとはわかかの松はらあけわたる しほひのゆきにたつたなく空 実  
うつるてふ心はしらしのやまも ゆきよりほか色しなげれば 政  
わたのうみや雪の白波立くらし 沖になる尾の松の一もと 為  
世にひろき道をしらん川舟の 人わたすなる往来はかりも

渡舟

夕日さす末のゝ水のわたしふね ゆくかけかろくみえてさひしき 実

追手にはなるとにさばくなみ風を たのむのから思ふはかなき 政  
すてぬへき世をしかすかのわたし舟 うきみしつみゝ何すこすらん 為

たくへみるたか年なみもわたしふね 一七〇 なかはのほりてくたるほとなき 宣親

同二年十二月御百首中 勅題 古今集句

春たつけふの 吹きかへてはるたつけふのあまつかせ かすみもよにもなひく色哉  
荻の下葉も 色かほる荻の下はもあきかせの わかいねかてにそふおもひ哉

かつみる人に みしもそのかつみる人におもひねの 夢にまさらぬ夢をこそまて  
しほみちくらし みる。うちにしほみちくらし山遠き 夕日のなみのはれてくもれる

ころもはる雨 へたて行かすみの空はたか中の ころもはるさめしほりてかふる 実  
やとる月さへ はやせ川やとる月さへ秋の月の こゝろもしらすなかれてそゆく 実

おもひおもわす 人はいさ思ひおもはずよしや身に たつ名のまゝのあふ事もかな 同  
たひゆく人を 草まくらたひゆく人をゝくらなん おきいつる露にのこる月影 同

春のゝにいてゝ はなちかふこまもやあとをしたふらん はるの野にいてゝかへる里人 政  
かたへすゝしき 河そひのみちゆく袖につゆかけて かたへすゝしき水のしら浪 同

冬そさひしき 春秋をよそにしつゝも身はさらに 冬そさひしきなれてしりぬる 同七一  
ゆふつけとりは 明ぬとやゆふつけとりはあざりして せきちこえゆく人のこゑ 同

花そむかしの 人はおひはなそむかしのとはかりに 色香身にむ春のあわれさ 為  
たなはたつめの 待えてもたなはたつめの逢瀬やは やすの川なみけふたつなゆめ 同

夜ふかくこしを 霜雪のよふかくこしをおほかたの こゝろの色にいひやけたれん 同  
千とせのためし はてなきや君かことはのはてならん 松は千とせのためしありとも 同

ちる花ことに 昨日まで松たにはるのをとるを ちるはなことにあらし吹也 宣親  
たか名はたゝし あらぬかたにかきこふるとも玉つきに たゝなはたゝしよそにちらさば 宣  
なにかつねなる 月にのみなれこし年はくれにけり 何かつねなるはなも紅葉も 同

永正三年正月十九日

萬知万春  
よろつよの春待出てかしくこきも  
谷のこらぬうくひすのこゑ  
うくひすもうつる道しれさゝ竹の  
大官人のよろつよの春 権大納言藤原実隆  
うくひすの心をそしるもゝしきに



もゝさへつりも万代のため 民部卿藤原政為一七二  
のとけしと君かつてやよろつよも

はるにこてふの鶯のこゑ 左衛門督藤原為広

\* 以上四首、底本ノママノ字配トス

同三年二月御百首中 勅題

初春 待えてはなひくこゝろよ草も木も たかことほりのはるのはつ風  
風の水のひゝきも空の月 ひかりのうちにすめるよは哉

忍恋 思ひあまりもらすともなき一ことも なみたにまざる色やみえなん  
よをすつるたくひにはあらぬ山かつの すみこしまゝの道もはかなし

柳 色をいほ春のものなる浅みとり やなきははなもたちやをくれん 実  
今朝のまをうきせなりともあまのかは きふの潤は世に絶せし 同

七夕後朝 契こし身はそれなれとおなしよの あらぬすちにやおもひはつらん 同  
つかへこしあとのまゝなるくら井やま たゞしきみちもわか君の為 同

祝 はなにうつる心の色のあたし名は たか春よりか立ならひけん 政  
七夕のそらにのみとやうらむらん 人にもまれの契あるよを 同

冬月 みし秋におもひくらへんあはれかは「七三 老のなみたの月のこほりは 同  
かくはかり思ふとをくはいかならむ 身のゆくすゑは人のこゝろよ 同

初恋 八百よろつ神てふかみやあめのした くちぬちきりと跡をたれけん 同  
あるとかはおとろきあへぬ花のすゝの あはれあらしにかゝらましかは 為

花 秋されは千とのうれへのいとすちを いくはたゝてゝ虫のをるらん 同  
行てみんこゝろのいろも朝な／＼ つもるやゆきのうらのはつ嶋 同

雪 みにかゝるなみの逢せよ聞分ぬ こゑをよすかのえの川かせ 為  
初逢恋 何をまち何をえんみのゆくゑとて 今日よ／＼と世に堪ぬらむ 同

述懐 空にこそかすみもはてめ玉しきの ひかりにうつれ春のよの月 宣親  
春月 降つもる雪よりのちのあらちやま あらぬ岩木にあらし吹なり 同

雪 同三年三月三首  
惜花不払庭 ちりをたにはなちる庭にわすれてや わかをきふしの床夏にみん  
あかすおもふはなにまかす庭の面は 木すゑそ春の色にのこれる 実一七四

枝にこそおもふかひなき花ならぬ 庭のさかりをあたにちらすな 政  
我たにもはらはぬ庭の木の本は こゝろのなきに庭の松かせ 宣親

暮春残花 にはへ猶ゆくらん春もきぬ／＼の 袖ひくはなは心ありけり

山かせにひとりのこりてさく花を をくらすはるやゆかん空なき 実  
おなしくはのこれる花の心たに はるをやみしとおもはましかは 政  
行春やつれなしとみんおしむ世に しはしものこるはなのこゝろを 宣  
あらはればそれをうらみと物ほよとの 松によせてもかへるなみかな  
きても又よるの契はたかゝたに たのむのかりの立かへるらん 実

来不留恋 同三年四月御百首 題為広卿  
こゝろとは立もかへらぬことほりの ありもあらずもひとりねそうき 政  
したふをもことほはるいかりなきものを たかためまでもとひはきつらん 宣

春曙 面影のはるも今よりさたかなる やみのうつゝの明ほのゝ空  
空にすむ月よりいてぬ光をも一七五 水にそみつるひろさはの池

広沢池眺望 猶そ思ふとしのわたりに立まさる 此川なみを袖にかけても  
稀恋 袖の色はみしにもあらぬなみたにも 又をのゝえのかきりこそあれ

寄樵夫恋 しろ人のめくみへたてぬ道しあのや はるたつけふの門ひらくこゑ 実  
元日宴 草のつゆ水のあわれも稲妻は ひさしくきえぬ物とみるらん 同

稲妻 くれかたき夏の日影の半天に てらすばかりも身はこかれつゝ 同  
昼恋 思へかし心になふものならば 命をかこつためしあるよを 同

寄遊女恋 思へかし心になふものならば 命をかこつためしあるよを 同  
野遊 あかなくのこゝろのつまとわか草の はるの野守やわかみならまし 政

野分 降くらすみそれは雪の光ありと 雨くからぬ窓のうちかな 同  
巽 限そとおもはゝ何をしのゝめに たのめて行もうきはわかれを 同

別恋 いてゝゆく身にやみらみをかけて思ふ のかみのつゆのあたしちきりは 同  
寄傀儡恋 づらゝとけむへもはるそと岩そゝく 七六 たるみのなかれ音のさやけさ 為

春水 落あへぬ一はも千ゝのあきかせに 聞はかりなる夕すゝみかな 同  
残暑 吹はらふうら風ならしまつしまや みとりにかへる雪のしら波 同

寒松 とし月の心なかさやみつつの帯の おもはぬすちに成もはてなん 同  
旧恋 恋路ゆへをもきななきもいつか身に かの市人心とはゝや 同

寄商人恋 さすか又夏ふくかせもたへぬらし 草にわかぬのへの荻はら 宣  
夏草 つゐにたゝ人のこゝろにもるものは よそめのせきのそらめなりけり 同

絶恋 同三年五月三首  
梅雨 五月雨は木ふかくなれる雨の露 あたらひかりのすゝしけもなし

浪こさむものとはなしにさみたれの 雲にこえゆくみねのかけはし 実

たか身にかかれぬ思ひをさみたれの 雲こる山にたくへてもみる 政  
みし春のはなのしら波えたこすや さ月の雨のむめの下水 為  
おとろかすくゐなはたれとたとたねと まきの戸あけて月やみてまし」七七  
月まつと折しも明るまきの戸に たたくゝくゐなを我をかほなる 実  
行鳥をそれともわかぬ夕やみに まかふものなく水鶏なくこゑ 政  
陰ふかきは守の神のかしは手を なれもたゞきて鳴水鶏かな 為  
うつりゆく月日をおもへかきりなき もろこしふねの波路也とも 為

ふる郷の空はひとつのわたのはら なみもみどりの色にこひつゝ 政  
都人まつらんものかまつらふね はやをのつなぬくるとあくるを 為  
つゆすかる萩の末はの夕月夜 おほつかなさのまさる影かな 同  
思ひこし秋かせふきぬ今よりの 木の間の月の身をはいかせん 実  
行末をかけても月におもへとや はつ秋かせのうき雲の空 政

有明のこすゑのあきも一はより 先ほのめくや三か月の影 為  
しらつゆの奥ふかきの鹿の音も」七八 たか面影のはなの色 為  
秋のこゑはしかりなる色もなし まはきしからみ紅葉ふみ分 実  
折しもあれ色なきものゝ色そへて 分るはなのをしかなくこゑ 政  
はきならぬこゝろのはなのしからみも かけてを聞やさをしかのこゑ 為  
いかにねん一よの床はやま水の かたらふこゑも袖ぬらしつゝ 為

かりねする袖にかけてや里の名も わか身のうへのうちの川なみ 実  
かりまくら川音ちかくすめるよに 水上いつく山かせそふく 政  
むへこゝろあれなあらなみ夢ならて ゆかむみやこに松からう鳴 為

同三年八月御百首 勅題  
山さくら空もかすみも何ならず はなこそわれをなをへたてけれ  
むかふうちにはゆくともみえぬ中空の 月にちかづくにしの山のは  
こゑむすふ井手のかはつは心あれや いはぬ色なる花の下水  
はなとみてひとつ草をも手折なよ あらぬかさしの名にもこそたて」七九  
あさ霜の身にしみかへる春の色の 野守におしきうくひすのこゑ 実  
今日ふるもしくれにはあらしいつそめて もみちをはしの天の川なみ 同  
なき名とは人しるらめといかゝせむ かをさしてゆふたくひなるよは 同

水辺旅宿  
かりまくら川音ちかくすめるよに 水上いつく山かせそふく 政  
むへこゝろあれなあらなみ夢ならて ゆかむみやこに松からう鳴 為

同三年八月御百首 勅題  
山さくら空もかすみも何ならず はなこそわれをなをへたてけれ  
むかふうちにはゆくともみえぬ中空の 月にちかづくにしの山のは  
こゑむすふ井手のかはつは心あれや いはぬ色なる花の下水  
はなとみてひとつ草をも手折なよ あらぬかさしの名にもこそたて」七九  
あさ霜の身にしみかへる春の色の 野守におしきうくひすのこゑ 実  
今日ふるもしくれにはあらしいつそめて もみちをはしの天の川なみ 同  
なき名とは人しるらめといかゝせむ かをさしてゆふたくひなるよは 同

寄獣恋  
ななき名とは人しるらめといかゝせむ かをさしてゆふたくひなるよは 同

飲酒戒  
さかつきのみきともいふなつたへける 手たにむなしき世々をおもは 同  
しら雪の木すゑうこかぬはなの影に けふこすはともみえぬいる哉 政  
秋さむき霜夜のちかし夕霧の 野寺のかねは普むせへとも 同  
かはりてもしるやいかなる玉手箱 うらみはふかき中にこそあれ 政  
のこる日も入うみとをくみる。うちに くるにやおしき沖津舟人 同  
枝ながら雪のとちにし谷の戸を 春来とたゞく松原のこゑ 為

まのうらやみきはも秋はさゝ波の 沖をふかめて咲尾はな哉 同  
ゆくとしのすへはなからも藤原や ありしみやこの世々をまつみそ 同  
さらたにうきねにみつるつまことの 外には何と心ひくらむ 同  
軒かすみころも手しほれ柴の戸に しほしもはれぬ春雨の空 宣  
守わひぬともし火きえて秋の雨の まとまつよはの虫の鳴ねは 同  
河霧のうきたることにさても身の ふるきとかにもしつまつとしれ 同

影うつすなきき清くも咲きくの はなにやなみの打いてのはま  
きしをあらふ色もさながらさゝらなみ うちいてのはまににほふ白菊 実  
色にいつや老せぬ花をみるきくも 水無瀬のさとの秋のむかしは 政  
咲きくのはなの淵とや水無瀬川 秋は色香のありてゆくらん 為  
はきのつゆに置まとはせる色とみて おらはおつへき霜のしらきく 為

秋のきくと今朝めつらしき初霜に うつろはざらん花もあやなし 実  
うつろふとみし色もなしをくしもの ひかりにくるゝきくの籬も 政  
松かえはみさほつくれる秋の霜に ほこるやすかた庭のしら菊 為  
手に取て思ふやいかにむら鳥の」八一 あともとめぬ物とみなから 為  
その人にあらんもしらぬ筆の跡も 待みるほとは打もをかれす 実  
そをたにとなくさめなから誠なき 筆のあとのみうき契りかな 政  
よる波のあはと消ゆく鳥の跡も おもひなくさのはま風もうし 為

見偽書慰恋  
手に取て思ふやいかにむら鳥の」八一 あともとめぬ物とみなから 為  
その人にあらんもしらぬ筆の跡も 待みるほとは打もをかれす 実  
そをたにとなくさめなから誠なき 筆のあとのみうき契りかな 政  
よる波のあはと消ゆく鳥の跡も おもひなくさのはま風もうし 為

同三年十月御百首 題為広卿 十題百首  
あしかきのよしのもちかき色香哉 春の雲みの花のしら雲  
明てみん雪は中／＼色もあらし よふかき山にかゝる月かけ  
駒とめて思ふもはかなこしかたに 心はかりはひきかへるとも  
いつくとか身をはすつらん道もなき 我かよをそむく人の心に  
あくかるゝ雲のそらめもたかならぬ こゝろのはなにかこちてやみん 実

雪  
あしかきのよしのもちかき色香哉 春の雲みの花のしら雲  
明てみん雪は中／＼色もあらし よふかき山にかゝる月かけ  
駒とめて思ふもはかなこしかたに 心はかりはひきかへるとも  
いつくとか身をはすつらん道もなき 我かよをそむく人の心に  
あくかるゝ雲のそらめもたかならぬ こゝろのはなにかこちてやみん 実

旅  
駒とめて思ふもはかなこしかたに 心はかりはひきかへるとも  
いつくとか身をはすつらん道もなき 我かよをそむく人の心に  
あくかるゝ雲のそらめもたかならぬ こゝろのはなにかこちてやみん 実

花  
あしかきのよしのもちかき色香哉 春の雲みの花のしら雲  
明てみん雪は中／＼色もあらし よふかき山にかゝる月かけ  
駒とめて思ふもはかなこしかたに 心はかりはひきかへるとも  
いつくとか身をはすつらん道もなき 我かよをそむく人の心に  
あくかるゝ雲のそらめもたかならぬ こゝろのはなにかこちてやみん 実

雪 木高くはさそ下折をしほ山 雪は小松のうへにこそみめ 同

述懐 何かおもふ人にもかなし我にをきて うかへる雲の行末のそら 同

積教 残りなくすくはんといふ誓には もれさらん身のなとまよふらん 同「八二

郭公 今夜しもねさめ。聞はほとゝきす まつにたへすとらみもやせん 政

雪 いかにともとふへくはあらぬ雪の内に 思ひやおなじ遠つ里人 同

旅 うきなからさすかなればかり枕 たゝ故郷のうたゝねにして 同

祝 三代かけてのほるも同じ位山 たえぬ日嗣の君をひかりに 同

郭公 月かけてこそ多のあやのみ折しもあれ なくやしつはた山ほとゝきす 為

雪 冬されはちりかひくもるはななから にほひむなし山風そふく 同

旅 椎のはにもるいひしらぬ里人も たひにしあれはたのまさらめや 同

無常 光なき身ともなきかし灯火の またるゝ中もいさしらぬよは 同

同三年後十一月御百首 勅題 後撰集句

はなのあるしや ゆき／＼てとへとこたへぬ奥山の はなのあるしや鳥のこゑ

色なきつゆは はなよいか野分の跡の村雨に 色なき露はひかりそひつゝ

つゝむおもひの したにともなみたはしらし紫の ねすりのころもつゝむ思ひの

ゆきかふとりの さま／＼に行かふとりの水にをちゝ八三 山にさかゆく春のさひしき 行李に如何

おきのやけ原 朝かすみ萩のやけはらとをきのに おもひいつるも秋の夕露 実

鹿立ならす 思ひある鹿たちならす山にしも なに妻なしの紅葉しぬらん 同

あはぬなげきや 立ころもあはぬなげきやかさねまし かへしてたのむ夢もみえずは 同

軒の玉みつ つく／＼とむかし忍ふのなかめには 袖よりおつる軒の玉水 同

おふるわかかなを かきねより生る若なをつみそめて 行のへことに雪間をそしる 政

あきのなぬかの 天河秋の七日の夕月夜 あふをはくらき波や立らん 政

まつはつ雪を めつらしき先はつ雪をみる程は 身をもわするゝ冬こもりかな 同

いとふにはゆる たえねたゝいとふにはゆる玉のをの なかきをさのみみえむさへうし 同

花もてはやす 春されははなもてはやすこゝろこそ 木にしられぬ色香なりけれ 為

音をなくむしの つゆにうつり霜に更行秋ならし ねをなく虫のすゝろさむけさ 同

などいつはりと 人をのみなといつはりと恨らむ われされこゝろわれならぬよに 同

ひしりの御代の 君／＼につかへまつらんこのはも「八四 聖の御代の道たえすして 同

夏のころもに おもかけのたちやはかへん花の色の 夏のころもにうつりきぬとも 雅俊

かきねのきくは 八重つくるかきねのきくは久かたの 雲井の秋にいくよかさゝむ 同

いかにちぎりし さきのよにいかに契りしはてならん つれなき中としたひ侘ぬる 同

谷のこゝろや ひかりなき谷のこゝろや埋木の くちのこる身もたれにしられん 同

同三年十二月三首

炭竈煙 朝な／＼けふりにくもる色もおし すみやくみねの雪の一むら

月雪のひかりににほふうす煙 あくるよおしき炭かまの山 実

たえ／＼にすみやくみねの白雲は けふりの外の色もさひしき 政

浦ちかき山かけしめて焼炭や もしほなからの煙なるらん 為

ことゝはんこの川舟のほともなく ゆきかへるとしも今の名残を

龍田河もみちもはなもなかれては よるのにしきとくるゝとし哉 実

飛鳥川ふちをはしらす名残ある 年はとしや立かかはらん 政「八五

年なみはなかれてはやし熊野川 よをすきふねのすきかてのみに 為

からころもなみたの程にくれなぬの こそめは色のかきりこそあれ

又もみぬ夢のひとよやうきふしを 身にかさねける衣／＼の空 実

かたしくはなみたの色に紫の ねすりをいつの衣にかせん 政

心まで二藍のはなの一重にも たのまはあさき色やみてまし 為

永正四年正月十九日

梅有佳色 朝かすみ咲いつる梅の一はなも 色香にあまる四方の春風

咲からに色もにほひも凝はなの 名にたかゝれや九重の春 正二位実隆

色そへて君みるへくは梅の花 はなのほるてふ初にぞ咲 藤原大内

先さくや千とせの春の色ならん 君かかさしに匂ふ梅かゝ 民部卿藤原為広

同四年二月御百首 勅題

關路早春 朝かすみ戸さしもしらぬ関こえて 都にいそく春はききにけり

海上待月 秋のうらやとをき限をそらめにて「八六 かすめる波に月をまたるゝ

従門帰恋 月ゆきのなへての友にまたるなよ よふかき門に残るうらみは

山家夕嵐 山にてもよその夕へに聞そなす あらしにしつむ入逢のこゑ

水辺古柳 龍田河はるゆく水のからにしき 神代もかくや青柳のかけ 実

松間夜月 雲は今まつ吹かせにまかせても 木の間わりなき内をみる哉 同

初尋縁恋 棹さしておしへやすることゝふも みるめはいさや海士のつり舟 同

旅宿夜雨 ふる雨やかことかゝれる草まくら 旅はもとよりほさぬ袂を 同

曉庭落花 軒ちかみなこそ有明の月影も こすのみたれのはなの春風 為

閏月七夕 天津ほしのちのふ月のよは。ひて ねかひのいとや思ふすぢなる 為

初冬時雨 きのふけふ冬にやならのはかしはを ならしかほする村しけれかな 同

疑真偽恋 こんこしの心まよひの床中よ おくとほ夢かぬとはうつゝか 同

同四年三月三首

呼子鳥 おく山のふかき心をよふことり こゑもきこえぬたくひとはなし」八七

のとかなる春をしらせて万代の いたつらにはるも過ぬと呼子鳥 たかあらまし山に鳴らん 政

こたふるもそれとはなしや呼子鳥 うつる羽翼の山ひこのこゑ 為

かせをあらみおほふ袖にも散はなを おのか青葉につゝむ程なき

ななめきてはるの日数もさきはりと 梢にはありやなしやとみるはなの

したひわひうらみんとすればかつ咲し 忍ふにはあらぬさよの

今更にいひいてかたきことのはよ 新まくらたのむにかたきこゝろ哉

よし野川いもせの山のなかにみよ 身のよそにきかむ逢せか聞わかぬ こゑをよすかのうちの川波 為

初逢恋 同四年四月御百首 題鶴飯香也

春色 なひきあふ柳さくらの八重かすみ」八八 春のにしきも中はたえけり

春声 はなになく初鶯のこゑはかり 我うちいてんことの葉そなき

冬声 下おきのしはしつれなき影をたに かつみても色をはそれとわく花の

秋香 いかにそめいかにおりけんさほ姫の 霜をきわたすまへの板はし

春色 さすとなき草の戸さしもむすほゝれ 思ひわく身にこそとまれ秋の

冬色 よをさむみ柴たきさむ袖の香や 思ふともなき名残とむらん

夏色 あかす猶むすひなれてはすゝさを 色なる水にそむこゝろかな

冬色 おもかけの千種なからに霜雪の 分のほる人こゑとをくかすむ日に

春声 あやめ草はなたち花に五月こは 物の音もなひくやなきの花そめや」八九 しらへにかよふ春かせそ吹 為

夏色 あさはかのわかことのはもくれなみの 降雪のこしのしらねもうす墨の

同四年五月三首

海辺郭公 ほとゝきすあかすとかきく苦やかた はなもみちも今のこゑ

あま人も波のよな／＼ほとゝきす わかなのりそ心かはらん 実

海こしはやまほとゝきすなきすてゝ 行かたしるやかへるしらなみ

ほとゝきすむへこゝろあれ夕なみの たちてみめてみまつかたら嶋 為

このさとや山をもおへるかやり火の けふりのうへはさねのしら雲

たきすさふよるのかやりのうす煙 山もとしく明るそらかな 実

色かはるよそめもしるしかやりたく けふりのうへにみゆる末末は 政

村違もしほのけふりたてかへて すまのあまりにわふや蚊のこゑ 為」九〇

むら雨もよそにはすきす竹のはに 吹やむほとの風にまかせて

呉竹のまとうつおとはくらき雨の は分さやけき月のしたかせ 実

すなほなる竹のはかせもいつはりの ある世しらする雨のおとかな 政

あしかきやあしとき雨ははれてさへ はれぬをときく竹の下かせ 為

同四年六月御百首 題政為卿 新作賦

あやめくさ 芽かやふくむかしの宿をわすれすは ねなから軒のあやめをもみん

秋の田 うきわさにねぬよなわひそ小山田の いほもる月もこゝろありけり

わかれ したふとて立わかれすはわれそ先 心にかなふ命なるへき

にしき 文にたにあひおもふほとはしられしを おるやにしきの色にみえぬる

衣かへ 香をたにもなをうつせみのから衣 かへてもはなのわすれかたみに 実

むまや 袖もさりふりくる雨はしのつかの 人のうへにかたりなしてもあはれなる

物かたり さねかつら 岩かねの露をかさねてさねかつら」九一 くるしかりけるかり枕かな 同

同四年七月三首

はつあき

そま

もとゆひ

しゐ

神まつり

そほつ

なき名

みくり

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

早秋

袖にをくひかりもすゝし夕月夜 さやかになひく萩のうは風  
からころもおりすきけらし蟬のはの うすさおほゆる秋のさよ風 実  
袖のつゆかゝらましとは思ひこし 秋かせなから身にそおとろく 政「九二  
いつまでか秋をこゝろの松風も 身にしむほと月のすゝしさ 為

野虫

秋のゝのはなにましりて鳴虫の 松は色こきものとしもなし  
たゝならぬ野原の秋を松虫の わか身ひとつの色香とや鳴 実  
なく虫の思ひのみかは。立てぬ 野守かいほは同じよさむを 政  
したひきて分るのへかな風のうへに そこともしらぬ虫の鳴ねを 為

尋恋

かけてしもおもはぬふしに竹しけき かけを契りにたつねよるみは  
おもはずはそれとなげきのつくは山 わくるにさはる道はなくとも 実  
夢とたにあはぬをうしと思ふ身を 先たとらする宿の道しは 政  
思ひわひぬ風をたよりの家嶋や あとなき波の行多いかにと 為

同四年八月御百首 勅題

七夕月

よをのこす月にわかれをさきたてゝ みる空もなき星合のかけ  
わかこゝろ下にかよひて恋しさも 水無瀬の月のいにしへの空  
山里の岩かきもみち枝もなし「九三 萬のかつらのかゝるはかけは  
あまのかはけふたなはたのあふくまに 霧たちわたる思ひそふらん 実  
たれゆへととへと忍ぶのみたれには かせも吹あへぬのへのかるかや 同

古寺月

人なくてひとりひらける松の戸に 月やいくよの法の灯火 同  
そめあへぬ山は紅葉のかりころも ぬれて時雨の色もかひなし 同  
きゝわひぬよのはけしさも今日に明て きのふにかはる秋の初風 為

立秋風

露はなとなひく心そおみなへし はなこそよはき姿なりとも 為  
まのゝ浦や入江の尾はななきぬらし かねなて波にうつらなく声 同  
心をは野山にとりて色ならぬ たもともなしや秋のもろ人 同

江鶉

紅葉遍 同  
政為卿不詠之

紅葉透松

同四年九月三首  
霧よりはわたるをいつくひろせ川 袖つくほとのみかさまさりて  
さす棹のしつくもささし朝霧は またよやふかきうちの川長 実  
秋かせにたつ河霧のつれなさは「九四 なるゝ浪もさそふとはなし 政  
秋ふかみたかねは雪に明る夜を 麓にのこすふしの川霧 為  
霜の後しくれの跡に木ゝの色も 松のはかしは染もつくさす

対月懷旧

松のは紅葉を人にねたしとや 木の間あらはすかせもつれなき 実  
紅葉するなかもわかす松のはの へたてもはてぬ色にてりつゝ 政  
吹分る松の木間にみえてけり あらしやしくれみねの紅葉ゝ 為  
月やしのおのかよゝなる思ひいてを はるやかに忍ひちかくこひつゝ  
月よなとよゝの面かけさそひこと ちきらぬ空のかきくらすらん 実  
今はゝやみしよもとをき身の秋を そら行月はたれ忍ふらん 政  
むかしなを忍ふもくるし月といへは みまれみすまれ老の身の秋 為

同四年十月御百首 題雅俊卿

帰雁幽

かすみにはまよふかいか別路の つゆけさしらぬころもかり金  
それとなくみえつる夢の名残さへ つゆけき物を萩のうは風「九五  
つもりては風ある竹の雪もおし あたりひかりの玉もくたけて  
かねのねにけふもくらしあすか風 たゝいたつらの身をいかにせん  
はる風の吹しく池のみつとりや あしのいとなき青柳のいと 実  
まねくらん心そしらむはなすゝき いつれをみちのよもきふのやと 同  
分し野にみしやあらぬと松はらの かけゆくみちは降雪もなし 同  
松にふくあらしは雨の雲ふかみ よるの月なきほらのうちかな 同

洞松

さくらにはなさかとはとこそは契りつれ まつ間をたれにかりあはせん 政  
露しくれそむるはやしの外ならし 月のかつらの秋のひかりも 同  
それにも名残やはななきさえくらす 今のはとしの雪もこほりも 同  
よの中の夢うちうけれ手まくらに みはてぬのみを何したふらん 同  
夜の間に梅さきぬらし松の戸を たゝくはかりにかほる朝かせ 為

曉夢

戸外梅 行路初秋  
行袖は千とにやもろきつゆならん おつる一はの桐のした道 同「九六  
板間さへめはあはぬよと床のうへに ぬる玉あられ乱てそちる 同  
たれもよの波のうへにてあまの子の たゆたふ舟をよそにやはみん 同

遊女

同四年十一月三首  
さゝなみになくや千とりも山の井の あかてわかれし友したふらん  
よをかさねうみふくひろの山風に 夕なみちとり立空もなし 実  
たれきけとしかの浜松かせさえて 友なし千鳥こゑうらむらん 政  
昔浦やさらぬしほつ波のうへに おのれみちたる村ぶとりかな 為  
我なれやみやこのしくれみねのゆき おなし雲井にふるかひもなき  
野へは今朝打ちる程のうすくもり はるゝをみれば嶺の初雪 実

湖千鳥

遠嶺雪

初逢恋

吹をくるあらしをはやみ雲かへる ゆふへもわかぬ峯のしら雪 政  
 心あれやさえしあらしのすゑの松 まつらんものとみねの白雪 為  
 さ夜まくら又もかよまぬ夢ならば 身はならはしの思ひもそそふ  
 行末をいかにかけまし思ふにも」九七 あまりわりなきさよの手枕 実  
 おもひきてあらぬ契りをさよ枕 身はかさねてもえやはたのまん 政  
 逢よはの道のさゝはらそよさらに 今身をうちの山かせのこゑ 為

同四年十二月御百首 勅題

浦鶯 紅もみよりもしらぬうらなみの 千里にかすむ鶯のこゑ  
 春径月 くらへても山ちのこけは露もなし はるかにきてし袖の月影  
 春恋 はなに人散なん後もかはらずは 春をちきりに恨ざらまし  
 古寺松 心すむあかつき月のたか野やま いつをか更に松風のこと  
 原上霞 風さえしあたちのまゆみ末つみに 雪けをこめてかすむ空哉 実  
 名所七夕 稀なるもよしや契りの末の松 まつよりこえぬ天の川なみ 同  
 滝辺時雨 よとむまもあらはそわかん落滝津 しくるゝをとゝいつれたかけん 同  
 夜恋 ほたるにもあらぬ思ひはさよころも つゝみてみせむものとしもなし 同  
 海懐旧 うらみても帰るをみれば大よとの 波にもかなやこふるむかしは 同「九八  
 春花 みすてふとはなゝ恨そ暮ふかみ こゝろとゝめてかへる木影を 為  
 晩夏 河のへや瀬せのみそきの一方に 秋をよせくる波のすゝしさ 為  
 閑山月 音に高きよはの滴の山かけに ぬれて更行月の木くらさ 同  
 閑路雲 すゝか山きりの丸はし末かけて 雲一すちの関の下みち 同  
 寄杜恋 引ふるも心にのるや鶯ならん つかれし駒のあしふちの杜 同  
 為広卿、毎々詠同躰之由、満于人口矣 政為卿不詠進

永正四年十二月御百首

閑山月 をと高き夜半の滴の山かけに ぬれて更行月の木くらさ 為広卿  
 同六年閏八月御月次  
 松月幽 山ふかみ滴音する松の戸に 木くらき月も袖ぬらしけり 宗清入道以後此類ノ不断也  
 永正五年正月十九日  
 鶯有慶音

花になくはこれもひとりの鳥の音に  
 民の草葉や春にあふらん

野も山も道しありとや君か代の  
 春をわかよの鶯のこゑ 正二位実隆」九九  
 君か代の春やうれしき鶯の  
 今朝九重にいそく初音は 政權大納言藤原  
 巢。すみしそのよのはるに立かへり  
 道あるときと鶯の声 民部卿藤原為広

\* 以上四首、底本ノママノ字配トス

同五年二月御百首中 勅題

立春 九重やこそ嵐ものとなる 空にわかぬ春や立らん  
 秋夕 ほともなき日影なからにうき秋の 夕をすくす空や久しき  
 夜埋火 うつみ火のもえぬ光もおのつから ものゝ色わく闇のうちかな  
 寄書恋 心せよ袖にゆるしてをく色の おちてなみたにまきれやはする  
 路梅 さして行方をも花にわすれきて 道さまたけの梅の下かせ 実  
 朝野分 からころも野分の今朝の朝さむに 秋すさましき花をこそ思へ 同  
 寄山恋 思ひ入は岩木のやまたかみ こえても同じ身をくたくかな 同  
 閑居木 風はらぬみきりの本の松もしれ 心にかゝるちりもなき身を 同  
 春月朧 はるふくや月のかつらのあすか風 たゝいたつらにかすみはてぬる 政  
 原薄 秋かせの末のゝはらはなすゝき」一〇〇 散ての後は行袖もなし 政  
 寄雨恋 たのむよもなき身よいかにさはりとも きゝしはいつか村雨の空 政  
 暁山 残るよに又ねやすらん有明の 月に起いつるみ山からすは 同  
 栽花 うつつうへて映しこゝろの一はなや 天か下枝のはるをみすらん 為  
 遠聞鹿 山の名のあらしの末にきこゆ也 月より西のさほしかのこゑ 同  
 寄河恋 袖のなみ我こそくゝれ鳩とりの 沖中川にあらぬ契は 同  
 故郷草 荒はてゝ軒はにおよふ蓬生や おなしみたれの忍ぶなるらん 為  
 郭公過 おもひしる心の末のほとゝきす 我にかきらぬ名残までうき 済継  
 竹雪 竹の葉にふるはしられぬよるの雪 こほれてそよく音のさやけさ 同  
 浦舟 おそくとくこきいてし浦の夕波に かへるこゝろやおなじ友ふね 同  
 此卿、稽古雖実父卿練習成功、既為  
 道遙院諷諫也、姉小路済継  
 同五年三月三首  
 落花入簾 にほひこしほとたにあるをこそすの内の 袖をはなゝる春風そふく」一〇一

さそふをもたかゆるさせはか玉たれの ひまもとめくる花のしたかせ 実  
こすの内の雪にうらみのかつ消て 思ひし花の春かせもうし 政  
玉すたれわりなきひまをもりきても 又さそはるゝはなの春かせ 濟  
したふなよまつもむかしのとばかりに あたなる花の春のわかれば  
とゝまらぬうらみは春にかくしても なをその人としたふ春かな 実  
是も身をいとふとならはいかにせむ 友なき老の春のわかれち 政  
したはるゝ道にやすらふ春ならば 同じころの友とこそめみ 濟  
浪ならぬうきねをいかすまのうらや 又なくおもふよるのなみしに  
いはぬ色心のそのしからみに かけてもかなし井手の山吹 実  
わするやと思ふわかりにうとはまの まさこもつきしかすゝのうさ 政  
袖にちり心にみたれとしへても ふかき忍ぶの山の下つゆ 濟

寄名所恋

同五年四月御百首 題政為卿

すゝしきは波のはなもやかほららし 一〇二 南のかけにむかふうなはら  
いかにみん人のころのふたおもて このてかしはのこのころのよを  
あけまきのわざにしたかふ馬牛も あしたゆふへの道はしるらし  
ますかゝみかけの中にもわするなよ 心をてらす神にむかひて  
よるの雨の名残もみえずあさみとり 色なき空の色そすゝしき 実  
霜かれもはる風ふけはわか草に いくよときはの色をみつらん 同  
哀いかに木のはにすかるみのむしの 身のかくれ家も風は吹らん 同  
世にこゆるちかひの舟の道なくは 猶此のきしにまよふへきみを 同  
立かへぬ雲のころもなつきても みねのみとりにかさねてそみる 政  
おさまれる道をしてふ鳥も今 あらはれぬへき時やきぬらん 同  
池水は色なきはるの面かけを をれのこしてなくかはつ哉 同  
をろかにておもひしらすはいかならん うけかたきみの世ゝのむくひを 同  
たのむには岩木のかけそせて猶 一〇三 ほとなきよをもつくすとはみる 濟  
おなしすの契りかひなくうくひすの かへればいつる山ほとゝきす 同  
人こゝろあまりてもれるちりの世に 神もひかりのかくれてやすむ 同  
庭どりの八こゑはあれと一こゑに 猶ゆめさますほとゝきすかな 雅  
尺教 いかにせむ法のなかれは涙とても こゝろの水のすみかたき世を 同  
同五年五月三首  
蘆橋晚薫 夕月やすゝしき影もたちはなの 枝に霜。く色そにほへる

たちはなのみとりにくるゝ木陰より にほひまきれぬ花ぞ散くる 実  
うちかほるゆふへをおしとなかめては 花たちはなにたれを待らん 政  
くれそうきかへしたもとも墨染の 空おほれせてにほふたちはな 宗清  
飛ほたるをの。おもひにはれさらは あはれなるへきよるの雨かな  
雨になをきえぬ思ひをみせかほに よるの袂をとふほたるかな 実  
ともし火にあらぬほたるも雨のよは しめる色にて窓かすか也 政 一〇四  
岩波は雨くらきよなきふねかは ほたる玉ちる光さやけさ 宗

山中蜜

同五年六月御百首 勅題拾遺集句

山家人稀 山ふかみひとりゝのかくれ家は する人なからとふ道もなし  
さすかわか庵ならふるかたもあれと それをたよりの山ふみもなし 実  
山里ははなもみちもおもふらん さすか人めのかゝるうらみを 政  
春とひし人のころの色は秋に 待みんもいさふかき山さと 宗  
花みてかへる とかむなよ遠山守もゆるしてし はなみてかへる袖のにほひを  
空ゆく月の うつるらんひかりもかけも秋はたゝ 空行月のうへにかなしき  
いはて物思ふ まけてしも人につれなき程やみん いはて物おもふ心つよさを  
草のまくらに たれにかは草のまくらにおもひねの わかなき夢もかたり合せん  
ぬるともはなの 立よらんぬるとも花の色になを そめよなへての山の雫も 実  
かりのつかひに とふ蜜つけしやいつの秋のかせ よさむもよをす雁のつかひに 同 一〇五  
なきてわかれし もろともになきてわかれし今朝の袖 たれかまさるとほさてみせはや 同  
みねのしらくも 吹たえしあらしや松にかへるらん 立かはりゆく峯のしら雲 同  
としたちかへる 山のはゝかすみを色に吹なして としたちかへるよもの春。せ 政  
宮古の月を 我心みやこの月をみてもなを しらぬ野山の影にそふらん 同  
なみたをのこふ よなゝのなみたをのこふ袖の色は たれゆへそむる千入なるらん 同  
こゝのかさねの あふけなをこゝのかさねの外にこそ 道しあるよも遠くしらるれ 同  
わかなつむへく 消かてに雪はふるとも朝ひこか やへさす。のへにわかなつむへく 宗  
あへるたなはた あまのかはまれのわたりはこれやこの 亀のうきゝにあへるたなはた 同  
わか名はたちて よとゝもにわかなはたちて人はたゝ あとなき雲を心ならずや 同  
松と竹との 君も臣も代とのねさしやこれならん 松と竹とのたかきみきりは 同  
このさみたれに いつあれと此五月雨にとちそひて 猶雲霧のおくの山里 濟  
はるのとなりの 限あるとしのへたても遠からて はるのとなりのかねてしたしき 同 一〇六

いひはなたて なをさりにおもはてもある心をや いひはなたて人にみるらん 同  
同五年七月三首

女郎花露 たちまたん契りならしををみなへし はなにつゆけき日くらしのこゑ  
なひくらん心よけさを朝つゆに あたくらへせむをみなへしかな 実  
女郎花むすひとめすはしらつゆの ひとりあにみえん物かは 政  
なひきあへぬつゆの色さへあはつへき 心みえたるをみなへしかな 宗  
わかこゝろうきにもあらぬあはれさの 秋ともわかす秋の夕くれ  
秋よ世につゆのかゝらぬくれはあらし 岩木を人の心なりとも 実  
夕くれのうきにはもれぬこゝろもて ひとゝせなから身は秋の空 政  
むしはうらみ荻はこゑしてうき暮を とはゝ岩木もいかゝこたへん 宗  
立かへり又もとふやとのこるよの 今のうつゝを夢にたのまん  
しのはしよいたつらふしのかへるさは ことほりかほにさよ更ぬとも 実  
我のみと枕はうきぬゆく人の一〇七 よふかきつゆに袖やぬるらん 政  
送れ月明はつるともわかれなむ 夢のやみちはふかきよそかし 宗

深夜帰恋 山ふかみふるすなからのしはの戸に はるとつけぬもうくひすのこゑ  
新秋露 置まよふ色に秋もみえけり  
橋落葉 しからみは風のかげはし一すちに せはや木のはのとをき水かけ  
鞆中衣 名残思ふ古郷いてしなみたとや われからこころもほしもやられぬ  
早春雪 春の日の光なからのあはゆきに かすみつけき嶺の松かせ 実  
杜夏祓 木陰ゆく小川をきよみみそきする 杜のしめ縄くるゝすゝしさ 同  
寒夜月 何を世に心とゝむるいろならむ 月は霜よの木からしの空 同  
寄絵恋 きえねたゝつねにかくてもあらなくに これをみよとの筆のすさひも 同  
古寺藤 紫の雲をなこりの色もおし 野寺のはなの春のくれかた 政  
里黄葉 あさくすむ里のしるへの木すへとや またはつしほの秋の山もと 同  
寄琴恋 うき事のねにたつばかり中ののを 中ゝたえぬほととはかなし 同  
思往事 みし夢はわするゝたにもいかばかり ありとしありし事をこふらん 同  
霞隔村 村遠み立やかすみのみつしほに みててすくなき磯の朝明 宗  
待七夕 よしやまてまつらむとのみ思ひやる 心そ手向ほし合のそら 同  
寄鐘恋 こゑゝのかねのみたけよせめてさは こんよもきかむ別ともかな 同  
山館竹 みしはなも紅葉。あらぬ山まどに にほひこほるゝ竹の下風 同

同五年八月御百首

同五年十月御百首 勅題  
帰雁幽 半天の山なき程にかくるゝや かすみをこゆる雁の一つら  
寝覚荻風 荻はらやまた初かせの秋のよを ね覚かちにもおとろかす哉  
竹雪 光あれやかけくらかりし程よりも このころ雪の窓のくれ竹  
澗松 谷ふかき水のひゝきもうかふらん 一一〇 うへに波こす松風のこゑ  
花洛春月 いろぬへき山路忘よかすむよの 月はみやこの半天にして 実  
閑居薄 まねくともうきよの外の友ならば 宿は尾はなにまかせてそみん 同  
杜初冬 きふたにしくれしこゑを今よりは さこそ木のはの木からしのもり  
遊女 からろをす水の煙のひとかたに なひくにもあらぬうきみや思 同  
雪中鶯 春きてもふるや何なる古としの 雪にはいてぬくひすのこゑ 政  
杜夏祓 世をいの心をうけはたかみそき へたてはあらしかものみつかき 同  
時雨知時 ふりゆくを身におとろかすさよ時雨 思へや冬にうつる程なき 同  
洲鶴 なくたつの心のやみもしられける かけしすさきの松陰にして 同  
花慰老 みるからにかしらの雪も思ひけらぬ はなやむかしの春さそふらん 宗  
袖月 月の中のかつらもきるやかかけさやに こよひいつみの袖のやま 同

採早苗 小山田や落ゆく末の川水も にこる日おほくとる早苗哉 濟  
陵園妾 有しよにかへらぬみをや秋に思ひ 春にうれへて年のへぬらん 同  
(一行分空白)

残月掛嶺 明てしも麓のさとはよふかき ゆふつけりとりにみねの月影  
雁のくるみね行月の名残にも 心あるへき朝霧の空 実  
入空のいまはのみねにつれなしと わかよをみえん月もやさしな 宗  
白妙の袖のほかなるいろもみつ きくのかきねにほふ紅葉ゝ  
あはれいかにくれなぬながら春ならぬ 秋の木の葉ゝおいの面かけ 実  
紅葉ゝ折たく人のこゝろをや くみて千入の色にみすらん 政  
春かせのはなにすゝめし酔の色を 秋はたつゆや木ゝにみすらん 宗  
波間より朝日さしきて名残なき よるのうしほの遠かたの空  
海みゆる木の間あらはに柴の戸の 明ゆく山は雲ものこらす 実  
村雨の跡なき空をうつしきて すむかけさそな末の川水 政  
波路はれ明ゆくよさのうら風に まつをつくしていつるつり舟 宗

晴後遠水

紅葉如酔  
同五年九月三首



初恋 汲しらん心となしにはつしほも 何しほしめる袂なりけむ 同

狩猟 かしこきをえ物にしけんさかりはは 一一一 おもふくまなき心ならめや 同

浜五月雨 なみにうかふみとりをそれか五月雨の 汀もあかぬしものはまゝつ 濟

歳暮近 うつり来て残りすくなきとしの内に ことしけきよやかきりしもなき 同

同五年十一月三日

橋下水 契りかは世を小筵の霜水 むすひかさぬるうちのはし姫 実

ふむあとのとけてなかれし朝霜も たるひにすかる谷の板はし 宗

竹川やかれなてさむし橋のつめに 氷はてたる波のはなその 宗

朝氷ゆめはくたくる音はして 行かけみえぬ水のうきはし 濟

山路雪 はらひゆく落はもおき袖なれや み山のゆきの松の下みち 実

限あれはこゝろのみちも山ふかみ はかなやたれに松の雪折 実

み越ちやそりのはや緒の一すちに 雪を引ゆく山かせのこゑ 宗

山かけははれていくかの雪ならむ 松のふるはもうへにちりつゝ 濟

みもわかほこゝろのきはをへたつなよ 思ひは人の下ならぬ身を 一一二

くり出すいとふを人にかこちても たゝわれからの賤のおた巻 実

さていつをまつらんものと玉かつら おもはぬすちにかけはなれけん 宗

おもひあれは神にたにこそななくみを をよはぬきはといひなはなちそ 濟

同五年十二月御百首 勅題

立春 いつる日の光をはるとむかふうちに かすみそめぬる空もみえつゝ

萩風 いつの間に軒はおきにうつしけん ねやのあふきの今朝の秋かせ

歳暮 霜雪に冬こもらん柴の戸や としのゆきゝもしらすかほなる

述懐 浪のうへ野山のすゑにおもふなよ みちとは人のこゝろなりけり

春曙 はなをのみ春とはいはし春の色は いろなき空も明ほのゝやま 実

夏祓 年なみのつみによるせは我そとも しらていくたひみそきしつらむ 同

寄月恋 よるともゆるさぬ袖を浦の月 いつしりそめし涙なるらん 同

田家 雲井飛かりのすまゐの春秋を さいも過ける小田のいほかな 同

岸柳 動なき岸のやなきのねさしもて 一一三 よはきは何の枝のはる風 政

女郎花 あたなるは千種なからを女郎花 さくをうき名とと思ふらん 同

閑中雪 降つめはたれこそとはぬあさちふに 雪たに友を待しとやする 同

浦松 うら波のまくらこすよは松かせも なを身をしほる磯のかりふし 同

初花 思ひねになれこしはなや今朝咲も 猶さめやらぬ夢の面かけ 宗

七夕 袖つきてほすらんものか天のかは やそせの波は分まよふとも 同

初冬 落そめし一はにきえし秋風も いてそよ冬と木からしのこゑ 同

寄源恋 たれと君いかなる床にふしいとの 心とけてもよをあかすらん 同

郭公稀 ほとゝきす今はまとをにたのむよも 猶かならすの契とはなし 濟

氷始結 ほともなき水のおもても今朝は又 こほりもはてぬ色にさえつゝ 同

寄玉恋 もとめてもきすなき玉とみる人に 身をわすれてや思ひよりけん 同

(三分空白) 一一四

本三三 享禄三年贖十月五日、以

他筆令書写早、穴賢、

不可有外見者也

尊俊 一一五 (以上上冊)

永正六年正月十九日

每家有春

浪かせをさらにおさめて四の海も

みなわか家の春そかしこき

時しあれは花鶯のかすならぬ 垣ねの

うちも雪まみゆらむ 正二位実隆

たれも世に戸さし忘てすむ人の 心や

春のやとりなるらむ 権大納言藤原政為

家の風の光ある世に弓筆の みちや

かた / 春のきぬらん 沙弥宗清

\* 以上四首、底本ノママノ字配トス

同六年三月三日 二月分關

対月惜春 花のほかにうつろひかはる色もおし 木すゑの月のにしになる空

ゆく月のこゝろもしらて春かせの うはの空なる花はうらめし 実

散花のよるのおもひに月かけの はれぬ霞も立やきえなむ 政

夜もすからあらしもよきてはらふなよ 月にさはらぬ花のしら雲 雅俊

わけこしは外山の雪に散はてゝ をよはぬみねの花のしら雲

たれかする外の後ともおもひけん 一 花は山よりふかきこゝろを 実

深山花残

散のこる花のこゝろよ山ふかみ けふわけこすはたれ見はやさん 政  
さそひてし風のやとりか世はなへて のこらぬ花をみ山かくれに 雅  
あさはかにわするな人も草まくら ねぬ世に夢はみゆる物かは 実  
思かけぬそれそ契をかりまくら たのまぬ物のわすれすもかな 政  
故郷にかよはぬ夢のゆくゑとて 人そむすはんくさまくらかは 雅  
契あればこよひかりねをするこもの 思はぬ床のちりもはらひつ

(二行分空白)

同六年四月御百首 題政為卿 新作にて

河霞 水のうへも霞ふきとく山かせを まちてやいてし宇治の川長  
虫近枕 月たにももらぬすきまを求めて 枕にくらきむしのこゑかな  
初雪 さばかりにまたれてけさそ初雪の つもらぬ程をなをやうらみむ  
潤戸雲鎖 すむ身こそ道はなからめ谷の戸に 出入雲をあるしとやせん」二  
処々立春 もろこしもおなし春とや日本の けふの光を空にしららむ 実  
七夕木 天河うき木の道のたえさらは いまも見えてましほし合の空 実  
椎柴 音たてゝおちし木のみの秋かせも 霰に残る峯のしむしは 実  
霧中燈 かり枕わか影かなしふるさとの さこそひとりの闇のともし火 実  
子日友 かはらしを子日の春の色に見よ ともなひいつる人のちきりも 政  
遠郷早秋 ゆくすゑの夕はしるやと山より かせのつけくる秋しのゝ里 政  
雪上浅深 ふりくれば水なき空のしら雪も つもるかたへにふちせをそみる 政  
霧中鐘 うしとのみおもふたひねをすかむしろ しくはかりなる宿たにもなし 政

(二行分空白)

同六年五月三首

暁月聞郭公 ほとゝきすまた有明の半天に 月もをくらぬかへるさのこゑ  
ありあけの月や明ぬといそくなよ また夜はふかし山ほとゝきす 実  
山かつらかゝるおりとやほとゝきす」三 わかしのひ音を月になくらん 政  
またて聞鳥は八こゑを一声の 名残の月や山ほとゝきす 宗  
すみれつむ花の一夜のいくよとも わか床夏にあかしてそ見ん 実  
きり／＼すなく秋かせの千種にも しのはれん色やなでしこの花 実  
山かつのかきほなりともなでしこの 色をはなにの花にたくへん 政  
春秋の色千種にさく花も なにしきしまの山となでしこ 宗  
対鏡知身老 空に見る月日もつゝあにますかゝみ こゝにうつりて老となりぬる

むかひみるかけのほかにも思しれ あはれ老ゆく人をかゝみに 実  
いつはりのなきをならひのます鏡 それたに老の身はうかりけり  
向ふにもしらぬ翁にさらは身の むかしをかたるかゝみともかな  
(五行分空白) 四

同六年六月御百首 題 宗清

梅香留花 そことなき道行ふりのかへるさに 梅か香をもみ袖のはるかせ  
雪朝遠樹 うちいつる都は野への今朝の雪 それとみ山の梢たになし  
寄月恋 夜かれなく今よりかけを三日月の うすきもふかき契をそ思ふ  
山家人福 一すちの苔のかよひちそれをたに 木葉にたるとる山すみもうし  
荻音近枕 夜な／＼のまくらをさらぬ荻の音の さすかなれける夢もはかなし  
嶋夏草 みな月の水かれ／＼の川しまに ふかくも草のしけり行かな 実  
湊頭旅泊 わか袖はもろこし舟の往来のみ 思ふにさはく湊をそしる 実  
寄鐘恋 逢とみし夢のさむしる残る夜に 又さはかりの面かけもかな 実  
水郷柳 青柳は霞のひまにうちけふり よそめも春の川上の里 政  
狩場養 うちばらふ雪をはいはしかり衣 身にしみまさるけふ養に 政  
寄山恋 まよふには知ぬ山ちと思ふ身に たかこゝろをかしほりならまし  
往事催涙 朽ぬへき袖はつれなしこし方の」五 夢をかそへて落るなみたに 政  
霞遠山家 天人や霞のころもほしぬらむ さほ路にはるゝ雪の遠山 宗  
落葉 やよいかにかかさましや色しなき わかことの葉の木からの風 宗  
江寒蘆 大井川入江にあらき松かせの よはるやかれば霜のむら蘆 宗  
草庵貽夢 よるの雨のたもとことほる苔の庵に うき世のゆめのなに残るらん 宗  
連日苗代 水とをくひくしめ縄のくりかへし かへす日おほき春のあら小田 濟  
射照 消はてぬをのか思ひのたくひにも ともしを鹿のあはれとやみん 濟  
暁猿吠喚 ましらなく有明の月の山かけに 落行水の声もすみつゝ 濟  
(一行分空白)  
同六年七月三首  
残暑 木のまもる月をはいはし夕すゝみ 心つくしの秋のはつかせ  
萩の葉にきけは秋なる風ながら また袖かろぎすゝしさもなし 実  
待とるははつ秋かせの夕すゝみ ふく程もなき袖のうへかな 政  
秋もなすてぬ扇よあつき日の」六 こゝろはせをはいつかやふらん 宗  
草花 秋の野のしめゆふ花になくしかを こゝろせはくはいとひしめし

露にのみうつろはてまで萩か花 いまこんかりの涙もぞある 実  
わけなれし草のはらをもさく花の 秋こそさらにとふへかりけれ 政  
草のはらにしきぬ物のむたてぬきに すかたをりなす花のもろ人 宗  
世をいとふ心にまとふ野もやまも 人を恋路のうへにしりぬる  
ありしにもます田の池のうちはへて おふなる草のうき身をそしる 実  
とたえをはおとろかしてもあらん身を いとふは人のわすれぬもうし 政  
わか心そのみたれのうきくもを 月のうへにも宿見さらめや 宗

(一行分空白)

同六年八月御百首 勅題

朝尋花 のとかなるけさの日かけや花ならん 鳥なく山のおくもしられて  
秋夕雲 われのみや心をつけてこゝろなき 雲もかなしき秋の夕ぐれ  
庭初雪 心あらむけさはつ雪の楨の戸を」七 立出てしも人はとはしな  
寄蛛恋 このくれをたのむもいかにさゝかにの いとくりかへす風のけしきに  
夜思花 夢さそふあらしよいかにおもひねに 見しをうつゝの花もこそあれ 実  
新秋雨 風の音におとろきそめし秋の色を さやかに見する夕ぐれの雨 実  
寄山鳥恋 ひとつとなくわか身ひとりの長き夜を 遠山鳥のおもひみたれて 実  
暮林鳥宿 暮ぬとてねくらは鳥の木との枝 いつれ。さしてわかとしららん 実  
梅薰枕 ねさめうきならひわするゝ手枕は ゆめやはおしきむめの下かせ 政  
閑屋月 鳥がなく閑の荒かきあらはなる 月影ながらあくる夜半なし 政  
寄鴨恋 思ふにはわかしのひ路にふすしきの たつ<sup>つ</sup>あた名のたくひかなしき 政  
旅行友 たひの友なるればふかき名残とや ふる郷人におもひかへまし 政  
元日立春 なやらひし袖ひきかへて雲のとや 又節に会春はきにけり 宗  
薄隨風 かり人は見えぬ野かせにはしたかの きりふのすゝきたれまねくらん 宗  
寄鴻恋 清見かたわりなき中にかよひゆく」八 こゝろせきもる浦浪もかな 宗  
遠村竹 河上にさしのほる日も一竿の 小舟ほのめく遠のむら竹 宗  
蛙鳴苗代 なくかわつ雨をなをやいそくらん せく水ほそき春のあら小田 濟  
落葉有声 庭のおもにはやくの霜のくちはまて 又うちそよく木からしの空 濟  
寄沼繩恋 朽はてぬ契なからやうきぬなわ 来る世もしらぬ中。こふらん 濟  
(三行分空白)

同六年閏八月三首

沢畔鳴 鳴のふす跡さへみえてうらかれの 沢辺の茅原かけそすくなき

秋にたゝうきも沢田の身つからを おもひもいれし鴨の羽かき 実  
をのかうへに尽しはてゝき鴨の立 山さは水のふかきあはれは 政  
夕されは身にしむはかりさは水の あはれかすか鴨の羽かせよ 宗  
をのれこそつゐにもみちぬ松ならめ 木のまにうすき月の色かな  
浦かせの月やはくもる大よとの」九 松はつらくもかけかくしける 実  
もりかぬるはま松かえの秋の月 まさこに晴ぬかけをしそ思 政  
山ふかみしつく音する松の戸に 木くらき月も袖ぬらしけり 宗  
みやこにとうつゝにかへす身ならはや 夜のころもはちきりなくとも  
おとめ子か羽衣もかな故郷は 雲井なりとも行かへりみん 実  
うつつ音はおとろかすにもいかならん 衣かたしく秋のたひ人 政  
とても身はやつすを苔の袂そと 岩かねまくら露もはらはし 宗

霧中衣

(一行分空白)

同六年九月御百首 勅題

春月 雲もなく空すむ春の月にこそ かすむ光もそれとみえけれ  
霧深 軒はまて立くるきりや降雨の もらぬ板屋のうちも露けき  
水鳥 うらとけてわれやはねなん水鳥の 水に霜もわひてぬる夜を  
別恋 うつり香を身にそふ物とおきわかる 袖にかなしきみち芝の露  
残雪 したとけておつるにつもるまつかけは」一〇 こそみしよりもふかき雪かな 実  
見月 名残あれや今いくかへり秋の月 いるさの山は名さへうらめし 実  
朝恋 かひなしやわか歎より朝きりの たつやとたにも人はなかくし 実  
瀬魚 水をあさみ行瀬の波のなひき藻に はかなや魚の身をかくしける 実  
余寒 世は春とゆるす心にふるとしの としをもこえてさえまさるらん 政  
対萩 おもふには露けき袖を花に見よ わか身ふる枝のま萩さく比 政  
暁恋 またよひと待ならふ身のはかなさは あかつきしらぬ床のうへかな 政  
海村 夕波のいり江を見ればしほ木つむ 舟さしかへる里の一むら 政  
隣霞 野山にて心ゆるさは昔のそても 春はかすみのたなひきやせん 宗  
原蘭 小薄のいとよはからしふちはかま ぬふもほころふ秋の野原は 宗  
尋花 そことしみ何たのめしかひかねや さやにもみえぬ雲の行急は 宗  
岡松 ことゝふもふる郷人は声たえて のをれならしの岡の松かせ 宗  
卯花 たつねこはたそかれ時の山里も」一一 道やはまよふうの花のかけ 濟  
爐火 かすかなるひかりもさむし明やらて なを夜半のころうつみ火の本 濟

測亀 ばかりてもたれかはしらんふちにすむ かのよはひもそのかきりも 濟

(一行分空白)

同六年十月三首

山路時雨 かせはやき山ちの雲にしはしなを われはをくれてゆく時雨かな 実

ぬれてこし山ちの袖やそらめかと ゆふ日の野へはしくれざりけり 政

むら時雨おなし山ちにあふ人の ふるそらしらぬ袖もこそあれ 宗

さためなきしくれ。見ればわれも世に うきてつれなきむら雲の山 宗

葉落月明 松杉も中／＼見えてさやかなる 月にくまある木からしのやと 実

しらすたか月のためとか木枯の 一葉をのこすくまたにもなき 政

てるとみし秋の木葉の名残とや 枝にくまなき夜半の月影 宗

よそにのみななめ柏はちりはて、 月ふきいるゝまとの木からし 宗

かはるらむ道かとしればまつち山」一二 わか駒うきもさすかなりける 実

うきてのみいかにせむやとをし鳥の おもふか水のかくれなき名を 宗

つらからぬ心ともかないもとわれと あひおもふ道は身にしらすとも 政

せめてさは夢もかよはて道の口 はけしや人の心あひのかせ 宗

(一行分空白)

同年十一月御百首 題宗清

鶯 都にはをのか古巢の山も見す 霞をいてゝうくひすそなく

郭公 ほとゝきすこゝを雲あと思には 声のかきりもわれやきかまし

紅葉 それとなき草のかつらうへまでも 秋の木のはの色にいてぬる

述懐 をのか世におもひなからむ時やこれ 上もめくます下もなひかて

鶯 心あらは谷にもしるやうくひすの こゑもかくれぬ春のひかりは 実

七夕 織女に心をかしてなむれは けふのゆふへはうき秋もなし 実

七夕 たつぬへき里をもかれて冬草の 老はかなしき雪のうちかな 実

恋 つれなきそ人のためにはことほりの「一三 ふかさも見てましたひわひぬる 実

梅 梅かゝにさめてはおしき夢もなし はなこそ夜もみまほしけれ 政

七夕 逢瀬より身にやしむらん七夕の 夜ふかき霜のかさゝきのはし 政

雪 はらひこしあらしのこの冬こもり 雪にわするゝ朝戸出の山 政

述懐 おもふ事なき世に成ぬいくほどの 身のゆくすゑはとにもかくにも 政

鶯 里ちかみくとなきて竹のはの をしてあらはす鳥のこゑ／＼ 宗

桜 有明もにほひこほれて山まゆの うす花さくら春風そふく 宗

七夕 さらてたに露にかしぬるこけの袖 ほさしや星のかけん手向と 宗

紅葉 見し花の色をはちて霜のはに 心そみ秋のやまかけ 宗

述懐 したかはん耳ならなくに老のなみ きは六十やちかのしほかま 宗

(二行分空白)

同六年十二月三首

禁庭雪 うれしさはつかふる人の世々の跡も たえぬを雪のみきりにそみる「一四

四方の山もかゝみとこゝにうつりきて くもみの庭をみかく雪かな 実

なしつほやことは花もふる雪の みのしろ衣あさかせそふく 宗

はらふなよ雲井の庭のくもりなく ふりしく雪をあさきよめにて 雅

外山なるまさきはいかに冬かれの もりもあらはに庭火たくかけ

そのこまも声神さひてすめる夜に 又ふみならずもりのした草 実

うたふ弓のもとたつ道をさらに今 神やたゝすのりのしたかけ 宗

をく霜も杜の木かけの八重櫛 うたひかへすやおもにあふらん 雅

妹にこひたか心とかなくたつも つまよひわたる和かの松原

つはさには霜やかたみの浦とをみ 明行月のあしたつこのこゑ 実

朝なきやすゝめくりするうら舟に なかはま遠くたつかけるみゆ 宗

君か世のなきためしもかまふ野の 玉のを山のつるに見よとや 雅

(二行分空白) 一五

永正七年正月十九日

鶴遐年友

のどかなる世は春風にうちはふき

鶴の毛ころも霜やへぬらん

君か代は雲のはるかにたかさこの 松も

むかしの友つるのこゑ 正二位実隆

かきりなき雲みにそきく君かへん 千世

万代のたつのもろ声 権大納言藤原政為

仙人の道まな鶴や老らくの こむ門

いらて君にとりへん 沙弥宗清

\*以上四首、底本ノママノ字配トス

(一行分空白)

同七年二月御百首 勅題

立春 春といひてよろつの道も立かへる ためしをけふの月日にそしる  
杜月 月はなを木たかき松のかけはれて やとりのこせる下露もなし

霧中衣 野への露舟路の波にしほれきて ほしたにあへぬたひ衣かな  
柳露 あさみとり枝に玉ぬく青柳や よしみむ人は萩のうへの露 実

原虫 あさははらかなれはともにとなく虫も 霜をうらみのこゑの冬かれ  
被忘恋 おどろかす身を偽と人や見ん 名残たになき物わすれには 実「一六

春月 春霞かこつはいつのむかしにて 老のわさなる月そかなしき 政  
瀉月 秋さむき月に鶴なくあゆちかた はらはぬ霜の夜やふけぬらん 政

変恋 秋風の末のゝあさち色もうし むなしき暮はたれたのめけん 政  
霞隔花 田兒の浦かすみの水尾にしつく花も 波やおもかけうきしまかはら 宗

秋夕 袖ひかれ霞し春のあけほのも おもひけたるゝ秋の夕つゆ 宗  
寝覚鶴 やよいかに老をもはかり鳥の春を なかはね覚や心やすめむ 宗

同七年三月三首  
野雲雀 そことなくひはりなく野になかめてそ 霞のうへも露けかりける  
なくひはり猶床しめよ雲にいる 鳥をうらみの春の末野に 実

沖津空のかすみに消し夕ひはり おちても浪のあはつゝの原 宗  
かすゑ行空にすかたはかくれ野や こゑのみそれと立ひはりかな 雅

無風花散 ちる花もこゝろかろしと人や見ん さそはぬ風にいづち行らん  
かせもたゝふかせて見はや花はなを「一七 しつかにちるも物そかなしき 実

ありはてぬ世のことほりを花やみよと 風よりさきにわきてちるらむ 宗  
いかさまにあはれもうさも今よりの ことのはつきす人にきかれん

言出恋 山吹の色をおもひのこの葉に あさくはなにか井ての玉水 実  
屈しなは見えむこゝろと一言を あ。きになして人やうらみむ 宗

(一行分空白)

同七年四月御百首 題 雅俊卿

野春雨 春雨はみかさといはむほともなし ぬれてをゆかんかすかのゝ原  
故郷萩 なくかりの涙もいさやふるほとは たゝわれからの萩のうへの露

炭竈煙 山にても空は雪けの雲のそこ すみやくけふり下むせひつゝ  
釣漁 たれかしの釣のうてなのうへにても 世にはみえしの身をやくらん

帰雁幽 たか方によるの枕のかりのこゑ 名残も春の夢はかりなる 実  
行路早秋 かり衣ふきかへすみちのやま風も うらかなしきや秋のきつらん 実「一八

湊千鳥 なく千鳥たれを心の松ならむ よさの湊の浪かせのこゑ 実  
樵夫 薪とるおなしその身のくるしさに 法のためなる道しらせはや 実

独待花 かひなしや永日くらし待身とも 花にしられぬこゝろつくしは 雅  
聞擣 秋かせの空にやたかくきこゆらん 天つ乙女のきぬたならしを 雅

祝言 君か世のめくみを風のすかたにて 豊蘆はらはなひかさらめや 雅  
岡卯花 暮のこる色をやとはむ卯花の かきねを道の岡のへの里 濟

遊女 舟の中につゐのわか世を尽すとも こゝそとまりとたれをたのまん 濟  
(一行分空白)

同七年五月三首 冷泉兩人并雅俊卿等在国  
郭公声老 ほとゝきすなれも老ぬとうくひすの ふる巢の山ち又かへるらし

夏月透竹 郭公かへる山路のいまはとや 声も老樹の雲うつむ空 実  
下かせのすゝしかるへき心をも 月にみえぬる庭のくれ竹

あつき日のもりこしまゝの窓の竹 月にはおなし葉わけともなし 実「一九  
いそくらん舟出もいかゝこのきのの いさこのひかり苔青きかけ

岸頭待舟 岸におふる松とは知やをひかせの おほ江にむかふ沖つ舟人 実

(一行分空白)

同七年七月三首 六月御百首 聞

稲妻 出ても月やはみゆるやまのはの 雲のおくなきいなつまのかけ  
をく露はちりて消えゆく草の上の かせにのこるやいなつまのかけ 邦一

たのむにもあらぬしるへか稲つまの 光のうちのよるの山みち 実  
風のまにかさなる雲の面かけも あらはにみゆる稲妻の影 濟

山はたゝ散ぬ木葉に吹かせも さながら鹿の声にみたれて  
いぬすこそ鹿はなきけれ小倉山 こよひもなをや妻はつれなき 邦一

露よ袖にいつくの野へのほとりより さそひかきぬるさほしかのこゑ 実  
よそにきく音をこそそへねさほしかの わけぬ露をもしほる袖かな 濟

うきふしの色になみえそくれ竹の 世をへぬほとをわれはたのまん「二〇  
生あはゝとはかり人や契けん いときなきよりかくるこゝろは 邦一

行すゑをいへはえにとやいはけなき こゝろひとつはわれにゆるすも 実  
あさみとりまたあさはかの心をや 中の心の色に見えけん 濟

式部卿親王御詠、依無人書加之

(一行分空白)

幼恋

同七年八月御百首 勅題

原上霞 へたてある春の霞にみわたせは 行すゑちかしむさしの原

菅径月 かすかなる山ちの露の影もおし こけにむもれる月と見ながら

滝邊時雨 おちたきつうちくる浪のよとゝもに しくれははやく晴まともなし

山家燈 山ふかきあらしの窓にそむけても 見し世かなしきともし火の影

花有遅速 あちきなくたゝ一たひに咲ちらは はなに久しきおもひそはしを 実

秋花月 秋きては月の桂のはなそのに 春の色香も忘れてそみる 実

故郷寒草 里はあれて心のまゝにしけりしも まこそ有けれ霜の下草 実二一

夏恋 いつまでと思にたへぬ下もえの たくひもかなし宿のかやり火 実

落花未遍 散ことのつれなき名をや思ふらむ わきていそくと花にみしより 濟

水郷紅葉 大井河水の朝きりふく風に そこよりうかふ嶺の紅葉は 濟

冬恋 かこちこし秋をそ思袖のつゆ なをしきわふるよるの氷に 濟

(一行分空白)

同七年九月三首

月多遠情 たれに又わか見るはかりみせむせむ 雲のうへなる月の千里を

行月にたくふこゝろよ海山も かきりこそあれ秋かせの空 邦一 実

かたふくやそなたの月のいかならん もろこし舟の浪のまくらも

いつくまでゆくをかきりの心とも しられぬ月にあかしてそ見る 濟

あま衣いかにうつらんわたつみと あれにし床を秋にうらみて 邦一

蘆火たくなにはあまのぬれ衣 ほすまありとや夜半にうつらん 実二二

たかため心あるあまのさ夜衣 うらしまかせにたへてうつらん 濟

あま衣うつもひまなみあしのやに すくもたく火の影たゆむらし 濟

松葉不失 下もみち散もや草にまきららむ おなしみとりの松の木ふかさ

一しほの春の色より松をみよ 秋にもみちの雪のうへまで 邦一 実

露霜の松やふりせぬ深みとり まさきのかつらく世かけても 實

嵐にもちる事しらぬ松かけよ いつのふる葉のなをつもるらむ 濟

(一行分空白)

同七年十月御百首 勅題 建保

春日野 かすか野やいまは霞の下もえに 雪まの草そさらにすくなき

明石浦 あかし方有明の月にこく舟も ゆくかたしらて浪にのこれる

伏見里 うき中にわか世へかたき恨をも ふしみのさとおもひをけとや

布引滝 雲きりの空につゝみてしらしきぬの はたはりせはき布引のたき

高砂 ふりつみし梢の雪の高砂や きえぬもかすむ松のむら立 実

水茎岡 秋の色よたか水くきの岡へより つたへしかせの露のここの葉 実二二三

安積沼 かる草のかつ身をつまはおもふこと あさかのぬまのあさくなさめや 実

生浦 今身によるとしなみのおふの浦や なにとはなしに名残かなしき 実

大淀浦 よる浪も遅き霞とおほよとの 松をそれともわかぬ浦かせ 濟

白川関 朝霧にたか行さきもしら河の せきの木すゑに秋風もふけ 濟

鳥羽 なく雁のつはさもさそなしら鳥の 鳥羽田のいなは霜むすふ也 濟

(一行分空白)

同七年十一月三首

冬夕風 冬の日のあらしにきほふ鐘の音は 暁またぬ霜やをくらむ

故郷雪 花の春をいまもや雪にみよしのゝ ふる郷人は冬こもるとも

逢夢恋 又も見ん面影のこせふかき夜の くらふの山の夢のやとりに

冬一 冬ふかき風そ色はまさ木ちる 外山のくれをなに思ひけん 実

荻の葉の夕の秋を霜枯に 又おとるけと吹あらしかな 雅

さえくらすあらしの末の雲まより 残る日かけのみえてさひしき 濟二四

花にたにむなしき友よふる郷に まことの雪のけふの夕くれ 実

おもかけにさくとも志賀の花そのに おもひやたえむ雪のふる道 雅

つもれはと思たえてもなくさめん みちなこのしそ雪のふるさと 濟

かたらはやあたる夢のゆくゑにも おもひあはせてあはれしるやと 実

こよひ又別を鳥のはつねには かけぬもつらき夢のうき橋 雅

心から見える夢をとほかりに わかおもひねのたゆむ夜もかな 濟

同七年十二月御百首 題雅俊卿

鶯 春の色に千里の梢こきませて 花にほへるうくひすの声

鶯 人はたゝこゝろのくまになかむらん この世にかけのおしき月哉

雪 さこそほといひし太山もとほてみる 都の雪にあさきみちかな

梅 吹風の色の千くさも梅か香の にほひひとつに消むとすらん 実

郭公 しつかなる雨の夜ふかき忍ひねは さも世にしらぬほとゝきす哉 実

月 秋の月中にありてふくすりもか 二五 老をかへしていく千世も見ん 実

恋 わひはつるこゝろかへする身にしあらは くるしや人うきめみせん 実

鶯 波は又こほりにかへるたにかけを 出てなかるゝうくひすのこゑ 宗

郭公 なきすてゝむなしき雲に心さへ 空のみたれのはつほどゝきす 宗

月 なからへてうけくに秋とかこちなは 見なれし月や老をうらみん 宗

述懐 あれはありし哥のひしりよせて我 こゝろ師たるこゝろともかな 宗

鶯 とししあれは氷も雪もうくひすの 声よりとくる春の谷かけ 濟

月 出て入山より山のなかそらに 都を月のかきりとや見む 濟

述懐 寸糸の世の人のこゝろをいかにせん 空にくもらぬ月日なりとも 濟

(一行分空白)

永正八年正月十九日

寄若菜祝言

わかなつむ都の野へも松の雪

いく世つもれる年とかはしる

若なつむをとめやしるやをしなへて 山跡の

くにはのとかなる代を 正二位実隆」二六

とをくつむためしをいかゝかきりなき 君かよ

はひに野辺のわかなよ 権大納言藤原政為

道しあるものとねさしと困栖等や よし野

よく見て若菜つむらん 沙弥宗清

\*以上四首、底本ノママノ字配トス

(一行分空白)

同八年二月御百首 勅題

立春 いく世かも都の空にたちかへり ふるき道しる春はきぬらん

夕顔 卯花の散しかきねにさらに又 おなし色にもかゝる夕かほ

待月 夜な／＼の空にはさしもゆく月の またるゝほとやいそかさるらん

神楽 神もさそあかす聞らむ雲の上に ほしうたふ声のすめる夜の空

旅行 旅衣なみたよりをく露ならば 野山にはらふかひもあらしを

春雨 花のえのしつくならにとふ鳥の は吹もよはき春雨のそら 実

野分 よしさらは月をたに思へふる郷は 野分にいとゝ荒まさるとも 実

野宿 いらざりし一夜の野へよ一もとの ゆへたにあらし草のやとりは 実

尋花 いたつらにわけこし跡を又もとへ けふを待ける花もこそあれ 政」二七

松虫 秋かせの夕にかよふ軒はにも のをれまされぬ松むしの声 政

樵夫 霜雪の道をやかねておもふらん 嶺のあらしにひろふ妻木は 政

落花 松の葉の色にとらるゝたつた山 あらきあらしや花のしら波 宗

江鶉 捨舟はくちし入江の草かけに わか床かほのうつらなく声 宗

眺望 ふしのねは雪より明てたこの浦や 波はかすみのみほの松はら 宗

松藤 いつよりかおなしねさしに契けん 岩まの松にかゝる藤なみ 雅

秋田 折しもあれ色付そむる秋の田に かりかねさむくおつる夕かせ 雅

山家 うき世ともしらてやそむく山かつの をのつからなる柴の戸ほそは 雅

菖蒲 水のうへの末葉のみかはあやめ草 ひく手になかきねさしをも見つ 濟

木枯 しほるとはしられぬかけの草までと のこる色なき木からの庭 濟

忘恋 おもひ出んかきりを人にたのみしは わかをこたりとおとろかさはや 濟

(一行分空白)

同八年三月三首」二八

花下言志 暮にけり又このまゝにしたふしの 花をは夢に見はてすもかな

残花薫風 風はなをにほひのみとはさそほしに こゝろゆるしてのこるはな哉

忍伝書恋 世にもれとはかりおもふ一ふてに 人はことはをそへてつたへよ

花下 花やたゝとしふる人にあらたまる 名残はしらむ春の木の本 実

残花 老となるこゝろの色はうつりはてゝ 花につれなき身をはうらみす 政

忍伝 香をのみと木すゑを吹も春のかせ 花をはいまにさそひのこして 政

残花 陰ふかき色は青葉にとられても なをこれ春とにほふ山かせ 宗

忍伝 あたならぬよりとおもへとことのはゝ ちらむこゝろをのこしてそやる 実

忍伝 ちらすなとたのむつてこそはかなけれ 行すゑしらぬ露の玉つさ 政

忍伝 ふみ見むはわりなきみちと人しれぬ こゝろつかひやうちのやまかけ 宗」二九

同八年四月御百首 題 政為卿

夜梅 この比の身のならばしよさ夜まくら すきまのかせを梅かゝにして

山五月雨 山かせの雲ふきはらふたえまより たきなみしろき五月雨の比

暮秋 あひおもふ名残なりせはわかれ行 秋のなみたと露をこそ見ぬ

寄名所恋 いかにしていひもはるけん名とり河 身はむもれ木のしらぬ逢せに

住吉 住吉やふり行松のかけにても ゆきあひのまの霜は見せけり

夕帰雁 かへるかり花さく山の夕月夜 さすか名残はおもひをくらん 実

暁擣衣 あくる夜のゆふつけ鳥かから衣 うつにたくひてほのかなるこゑ 実

寄名所恋 恋わひぬむあらぬくすりもとめはや ふしのねをたに雪の山とて 実

春日 佐保河のなかれて代とを祈りをかん 山はみかさのかけたのむ身に 実

朝若菜 かきくらしけさふる雪をほらふまに わか菜もしはしつみやをくれん 政

田家時雨 霜はいつをきかはれとかかりあけし 門田しくるゝ露のいなくき 政

河述懐 思へいまわか身にしれははやせ川 三〇 たかとしなみの末とをくとも 政

賀茂 その世にもいま立かくれ霜雪の 空をはしめのかもの神事 政

翫花 をのれ先酔をすゝめて花の色の けふをまかする今日にやあらぬ 宗

遠村紅葉 風かよふ遠山もとのむら竹も にほひこほるゝうすもみち哉 宗

寄名所恋 思のみすかのあら野ようき中の こゝろのくまもゆくゑしらはや 宗

里述懐 われにいさ春日のさにとすむとてもしるよしはせむやまとことのは 宗

山家虫 まつとしもわれやは思ふ山かけに はかなき虫のたれし（つら）のふらん 宗

寄名所恋 またしらぬあふ坂山のいはし水 よそにもなとか袖ぬらすらん 濟

(一行分空白)

同八年五月三首

夏松 夏ふかきもりの下草花ならて さかり過たる色もこそあれ

をのつからすさめぬ駒のこゝろもや 秋の花まつもりのした草 実

露のほる夕やいづれ大あらしの うき田のさなへもりのした草 政

柏木にやとりの神もすゝしさや 三一 かせならせとの杜の下かけ 宗

夏鳥 月見よとおとろかしけるくみなにも たゝやとからのあはれそひぬる 宗

みしか夜はわたせる橋のほともなく 空行月にかさゝきのこゑ 実

夏山やしけみかおおくになく鳥の それともわかぬ声のさひしき 政

うかふ身はくるしき物をかるの子の かるの池へに巢たちかほなる 宗

ほとなくはおしと思はん夏の夜を ねてあかせはや夢もみつらん 宗

暮かたき夏の日わふるよひの その事となき夢もはかなし 実

いつのまに見てはさめけん夏のよの まとろむほとみなきそ夢なる 政

心たゝ世は五月雨の雲となり 夢とさめ行身のむかしかな 宗

(二行分空白)

同八年六月御百首 題 民部卿入道宗清

海辺春曙 空とをくあかぬみるめよあけほのゝ 春をおひ手に舟出してしる

権一日栄 霜のゝちをはるかにいはむ松の色も 思へはけふの露のあさかほ 三三二

隠名切恋 袖ぬるゝたくひのみかはかずならぬ 身にあま人のなのりそもうし

谷蔵 光なき谷はなへての草木にも わきて物うき初わらひかな 実

閑居虫 松むしやこゝろもしらぬしつかにと すみなすやとはたれを忍はん 実

答言恋 とけかたきうらみをとかくはるけんは ことえりしても又やとかめむ 実

輩車 中のえの門ひきいるゝ小くるまに めくみことなる跡を見るかな 実

故郷春月 故郷のよしのゝ春は月たにも かすみのおくにこもる影かな 政

初秋露 をきそむるなのみなりけり秋風の 一葉とゝにもろきしら露 政

追離 おしすやこよひなやらふあしの屋の あしからすしてくるゝとせ 政

寄道祝世 たまほこの道といふ道は君か代の ひかりやなへてしるへなるらん 政

依花忘老 老となる月はめてしのことほりも 花にわすゝる春の木のもと 宗

左右聞雁 月を待山のみなみにきゝそめて 又北になる天つかりかね 宗

卜遇恋 なひくやとかれなくとふもうきは猶 ま菅のうらのうらめしの世や 宗 三三三

田家燈 たかいほそ空にしられぬ稲つまの 小田にほのめくよはのどもし火 宗

葺菖蒲 あやめ草いつくの池の夕かせか あらぬ軒はに吹かはらん 濟

庭樹高低 軒におほひ庭にのへふす松かえも とみに千とせのかけはみえけり 濟

(一行分空白)

同八年七月三首

初秋月 手にならず物にもかなや秋立て あふきにかふる袖の月かけ

よそよりも月の都の秋やとき かけみる水そ先は涼しき 実

蟬の声のこるもすゝし月はゝや 木のまを秋ともりそむるまで 政

うつりゆかむこすゑの秋も一はより 先ほのめくや三日月のかけ 宗

かせたかき柳もあれとわか門の 一むらすゝき先みたれつゝ

こと草やなき心ちする花すゝき 袖の中なるのへの秋かせ 実

なひきあふお花は知や秋かせに たか思草色に出らむ 政

心とや尾花はやとす袖のつゆ うけくに秋とはらふたかせ 宗 三四

滝つせに玉ちるほどの思をも たれなくさめて袖はほさまし

亀のうへの山なる玉の枝なれや おりてみかたき恋のなげきは 実

思かひ有てひろはん玉もかな 枕のしたのしほひまつ身に 政

うき中の心やみよいかさまの 玉かと夜の光とは見む 実

(一行分空白)

同八年八月御百首

尋花 よそに見てあらまし物を花なりし 雲も色なき雲をわけぬる



浦月 しかのうらや浪の千里に月は出ぬ 山はかゝみを空にかけつゝ

寒夜千鳥 ゆく方も波風寒きさ夜千とり 心をいつちやらむとかおもふ

山家経年 山にてそ思なくてはとしもへし すぐさりし世にかゝらましやは

暗夜梅 くらき雨の窓ふきいるゝき夜風も ぬれぬにほひや梅の花かさ 実

虫怨 うらむるよをのかため。は虫のこゑ 秋のかさなる露のさむさを 実

汀水 汀ゆくこまのあをとにくたけちる 氷はいしをふむかとそきく 実 三五

寄忍草恋 わひはつるうき名は露もかへらしを いつくをしふ草につまゝし 実

海霞 をのかすむいく里いてゝあま小舟 かすみのみおをこきわかるらん 政

月出山 真木ひはらわけのほる月よいかはかり 出てたかねに露げかるらん 政

聞落葉 心してちる木のはかなよもきふの やとは音する人もあらしを 政

鞆中雨 空はなをあしとき雨の道とをみ 出しやとりに立やかへらん 政

庭堦 春ふかみ垣ねにちりし藤なみの 花ささかへるつほすみれかな 宗

岡萩 妹とわか往来の岡のさいはりに 花すり衣こそめにをせん 宗

積雪 降まゝに嵐は雪にうつもれて ひとり声する松の下折 宗

社頭鶴 道なをく関守神はあふさかや ゆつつけ鳥のたれをわかまし 宗

(一行分空白)

同八年九月三首

夕霧 秋はこれあやめもわかぬおもひかな きりのうちなる袖の夕霧

秋の色よなかめさすへき夕にも あらぬまかきの霧になり行 実 三六

秋かせの吹空なからきりこめて 雲はかへるもわかぬ空かな 政

葛懸松 葛かつらかゝる契も色に出ぬ をのれしくれてそむる松かせ 実

玉かつらはふ木は秋の千種にも 松のほかなきつたのもみちは 実

松にふる世とをはしらす葛かつら 秋いくかへりもみちしつらん 政

ともし火のうすき光やをのつから 窓よりにしの月をみすらん 実

法の道にいまはかゝけもつくさはや この世は夢の窓のともし火 実

つく／＼とわか影おもふまとのうちを てらすもかなしよるのともし火 政

(一行分空白)

同八年十一月三首十月十二月等閑

芦間水鳥 しほみちてなくなるたつのかけとみし あしへもこほる水鳥のこゑ

枯てしめたのむ影とは水鳥の あし辺によるの霜はらからん 実

芦の葉の霜にはたへぬ色みても 思やさそなをしひとりね 政

山家雪朝 けさみれば夢ちばかりのあともなし 太山の雪のたれをまつらん 三七

音つれば花もみちもことつきぬ けさやはまたむ雪の山もと 実

ねくらたつ鳥たにきかぬ柴の戸を たれうち出んけさのしら雪 政

われのみのおもひの色よ花かたみ めならふ人のかすならすと 実

あはれしらはそれそ思ひのかひすらも いもせはあるにうき身なりとも 実

世中よ思道にはわりなきを たゝ身ひとりの名にや立らん 政

(一行分空白)

永正九年正月十九日

松添栄色

いくとせをふる枝の松の若みどり

又たちかへり春やかさねん

花よりもふかくやそむるさほひめの こゝろも

千世の松のみとりは 正二位実隆

ちりうせぬたのしのみかは松のはゝ 春いく

しほをかさねきぬらん 権大納言藤原政為

君か代はまし常磐なる松かえの 葉さへ

花さへいく春か見む 沙弥宗清

\*以上四首、底本ノママノ字配リトス

(二行分空白)

同九年二月御百首 勅題 三八

立春日 けふに明て人の心もうつる日の 春といふよりのとかなりける

虫声怨 蟬のこゑくるしきよりもきくす 秋のおもひのわれやまされる

嶺初雪 木のはかはしくれ／＼てみねの雲 けさより雪に色かはりゆく

山こえしけふの嵐をわひつゝも 松かねまくらたのむはかなさ

いまはとて昔にかふとも梅のはな うつりし袖の香をや忍はん 実

ちきりきやね覚の空にいてわれを とふへき物とあり明の月 実

有明月 わきかへるこゝろは見えしつふ／＼と 岩まの水のいわせてもきけ 実

言出恋 浪かせのゆくゑをそ思身にかきる わかれならても遠つ舟人 実

望遠帆 月かすむ浦のとまやの明ほのに たれかは春をかこちてはみし 政

浦春月 行空の月もさそはぬこゝろかと おもひしる身はあさちふのおく 政

閑見月 よそにて忍ひははてめ山さくら 立そふ花のおも影もよし 政

見増恋

往事夢 思ふには夢にかはらぬ送りこし 身のいにしへも世々のむかしも 政」三九

夜掃雁 おほろけの名残ならぬを人やりの 道とや月にかへるかり金 政

野徑薄 わけすてゝ人はすき野の小薄や わか袖ひとり露はらふらん 宗

懸樋氷 山ふかみこほりはてにし竹の樋の かけしやなにのいのちなりけん 宗

江辺鷺 あちむらはさほく入えの山かせに たてるやすかたなみのしらさき 宗

路卯花 ゆく人はたそかれ時のそらめにも 道やはたとうの花のかけ 濟

霜夜月 鐘の声やおのへの霜ををくるらん きくより月のそらにさし行 濟

経年恋 しるしなきみたらし河のみそきにも いくたひおなし袖はぬれけん 濟

(一行分空白)

同九年三月三首

風静花芳 にほへとも枝にはうこく風もなし かくてちるへき花とやは見る

世中にたえて春風なくもあれな ふかても花の香はにほひけり 実

吹としもおほえぬかせや香に匂ふ 花ともよそにしらすかほなる 政

そことなくさそふ句もかすみはてゝ 嵐にたどる花のおもかけ 宗」四〇

ちらてこそ人をとゝむる花ならめ かへる山なき山かせのこゑ 宗」四〇

山とをく行に跡なき花のうへは たゝ月かけをふむ心ちして 実

よきて行みちこそなけれ山さくら こゝろせよとはちらぬ花かな 政

こそわけししをりならずは雪とのみ 思やけたむ花のやまふみ 宗

いかにせしとはすかたりのゆくゑとて わすれぬ人の我をとらん

見る人のこゝろをしりてかたらふも さらにをはすて山のはの月 実

みすやいかにいも恋しらの月そとは さもあらぬ人もあはれとふ夜を 宗」四二

(三行分空白)

同九年四月御百首 題政為卿

垂柳臨水 かけふかき柳を見てもことゝはん 春はいく世のうちの橋もり

初冬時雨 時のまにめくるしくれの空ながら 秋をきのふにはやすくしぬる

人伝恨恋 思ぞめしほとそたよりももとめしか いまのうらみをよそにいへとや」四一

花時不閑 花さきは心よはしややしまくら とちはてゝしと思ふ戸さしも 実

秋情寄萩 秋といへはわれそしめゆふ萩原 たれさをしかのつまとみゆらん 実

契久恋 よそにのみいつまで思つゝみつゝ むすひしまゝのかけをたにみん 実

冬夜夢 雪のうちもたゝ花をのみ思ねん これや小蝶の夢のかよひち 実

連峯霞 をちこちのみねをもわかぬ朝かすみ 昨日や雪のとやまなるらん 政

嶋辺虫 なくむしや声にもつきぬ秋草の まかきのしまの波のあはれは 政

霧中恋 しらせはや海山かけて物おもふ 道ははなれぬ世々のむくひを 政

寄世祝君 うけきつる君か日つきに神代をも 何そはとをくおもひへたてん 政

岡辺早蕨 よそにしも人は逝廻の岡の辺に をのれ折手のはつわらひかな 宗

七夕迎夜 こよひそとほしの逢せのやす川や 月の御舟もふなもよひして 宗

白地恋 しらせはや道行ふりの袖の香も 心のしみのふかきおもひも 宗

心静延寿 うくつらくかゝつらひにしたまのをや すつる太山は千世ものはへん 宗」四二

卯華隔隣 心をはうとくもみえし卯のはなの 花の中かき中にもありとも 濟

秋深夜長 いくたひのね覚を夢にかへしても 明ぬ霜よや秋にうらみむ 濟

聞村笛 笛のねもさらに露けきいにしへの 秋にかはらぬ里はしらねと 濟

(一行分空白)

同九年後四月三首

待客聞郭公 ほとゝきす先とふこゑにまつ方の さもやいつれと人やあやめん

ともに今きかまし物を待人に さきたちてとふほどゝきす哉 実

郭公こゝろそしらぬ人とはゝ われつたへよとなきてもやこし 政

待人はおもかけのみに月夜よし よゝとことゝふ山ほとゝきす 宗

陰たかき草のは山のすゝしさは 松ともいはし野への夕かせ 宗

秋の色にしほれん末も夏くさの しらすかほなる野辺のゆふ道 実

まかふ色なくてや風のなひくらん 夏野のすゝきわくる袖にも 政

里はあれて人は影みぬ野嵐に けたてたく火やさゆりなるらん 宗」四三

世中よ夢路に過てうつの山 ゆくさきしらぬ物をこそ思へ

寄名所述懐 代とのかせのすかたは四方にちらしても いさやこと葉のわか松原 宗

(三行分空白)

同九年五月御百首 題宗清入道

梅 雪にみしこそのかきねの梅かゝも 思へは春をにほひなりけり

わひてしもさてやはすくすあさ柴に 秋風ふけはころもうつこゑ

涙せく心もくるしやま川の 岩まにむせふすゑをしらばや

世の外とおもふばかりの山すみに こゝろゆるさはかくれ家やなき

見すやいかにおほろ月夜の朝ほらけ 春の色とはかすみなりけり 実

過ぬとはきゝてほとふるたまくらに いかなる袖の猶しくるらん 実

かた峯におふなる松のいつまでと うきねのほとを敷てかへん 実

寄松恋

神社 かつちなきそれこそ神のことはりを おもふにふかきみわの杉むら 寒 四四

霞 なにの色もわかぬを老のならひそと 身をしる外にかすむ空かな 政

鹿 夕暮はしかたちならず山ふかみ なへての秋の思とやしる 政

寄竹恋 老とりねの夜なかきうへにくれ竹の 窓うつかせはたれしほらん 政

仏寺 朽はてぬかはらもいまはちりの世の 末の御法よのころかすかは 政

梅 軒ちかみ梅さきぬらしたき物の にはほひあわすのすのおひかせ 宗

擣衣 夜さむにやわきてなるおのあま衣 波もうつたへの松かせの声 宗

寄雲恋 ことのはの空おほれせば雲をさへ 跡なき物と人を見さらむ 宗

禁中 つかふみ。や百の司もすゝのつなの たゝ一すちに心ひくらん 宗

寄山恋 立ぬるゝ袖をはしるやとしをへて おなし岩木の山のしづくに 濟

海路 海つたひかちよりきてもかちまくら 舟にかはらぬいそのなみ風 濟

(一行分空白)

同九年六月三首

浦夏月 夏の夜をあかしの月も松原の 陰にたゆたふほとはみゆらし 四五 実

みくま野やいく夜を月にかさぬとも 夏はほとなきうらのはまゆふ 政

月はたゝ秋の名たかの浦なみに たちまさりてもあけやすき空 政

浦の名の十ふのすかこもみふにさへ みるほとなみのみし夜月の月 宗

夕すゝみかせをこゆるものつから 雲のはたてのおもひなるらん 実

しるへあらはゆきてすゝまん花にこそ 恨むといひし風のやとりを 政

天つ空吹あさこち。かはるしも すゝしや雨の残なるらん 政

道の口袂すゝしくわけこしや 夏か秋かのこゝろあひのかせ 宗

おもへともかきりある世のしのゝめを 人にしたはんことの葉もなし 宗

思はずやけさこそかきりかはかりの 一夜も身にはあらし契を 実

つれなさのかきりを見ても別路の のりおほさはたれをかこたん 政

思そめし心をしれはうきもたゝ われからあゐのきぬの空 宗

同九年七月御百首 題雅俊卿 四六

尋花 いかにとはん花の心もかくれ家の よし野はあさき山路ならしを

閑居月 露にたにかけとゝめける月みてそ すみはてぬへきよもきふの宿

歳暮 思出は忘ぬふしはなになれや 一とせなれし年の名残も

旅泊重夜 浪まくらなれぬるまゝにねぬる夜の うらめつらしき夢のかよひち

待花 いそくより手にとるはかりにほふかな えたにこもれる花のおも影 実

古寺月 こゝにてもうき人しもと月や見ん をし明かたの雲のはやしに 実

寄沢恋 恋わひぬ身はいかさまになる沢の うきにはふしのねのみなかれて 実

寄夢懐旧 こしかたのみな夢ならはめのまへの うきかうつゝにのこらすもかな 実

故郷春雨 はつせ河かすみて音はすか原や ふしみの里のなか雨の空 宗

七夕夜深 ふけ行はつきあへぬ袖にうらみをも かさねん夜半か星あひの空 宗

寄山恋 心よりいそくやとりは暗布山 あげやすからぬ夜半もあやなし 宗

寄老懐旧 世をあきの木との木葉よかはりはてし かしらの色といつれたかけん 宗 四七

晚郷雁 忍ふへきゆへやは空にあり明の 夜ふかくはなと雁かへるらん 政

禁中月 つかへてや身をてらしけん雲の上の 月にめてこし世とのむかしは 政

寄嶺恋 いつかこの身にはたのまんみねたかみ わかるゝ雲のかへるゆふへを 政

寄涙述懐 老はつる身のつれなさを忘るやと もろき涙やおとろかすらん 政

暮春 花鳥のおなし道をと尋てや をくれもはてす春のゆくらん 濟

夜雪 ちりそめし夕の雪のほともなく はや夜をふかくつもる色かな 濟

路苔 行はあれとはらふ人なき道ふりて 木葉もこけにふかき山かな 濟

(一行分空白)

同九年八月三首

暮天旅雁 草木にもみよや旅なるかりかねの なみ。におつる秋のゆふ露

なくかりやとこよはなれて草枕 ゆふへの秋を空にわふらん 実

身をしほる夕の秋を雁たにも なきてことほる声かとそきく 政

かりはなをたひなる空の思ひもや なくねにあまる秋の夕暮 濟 四八

よそにこそへたでもあらめをのつから わかみる月は空のうへにて

影きよしさそなにしより秋の月 名も世中にひろさはの池 実

晴くもるひかりをわくや松のかけ なみのうへ行たかさこの月 政

思はずの影をも見しかうき雲の あさき所を月にまちえて 濟

山すみもしらるゝ世にや立かへり 人にまきかれて身をかくすへき

日のひかりわかぬめくみやしら雲の しらぬおきなも山を出きて 実

すてはてんとはかりはいさ世中に 立かへる山のかひもこそあれ 政

道しありてかへるを世にははちしとや 契し山をおもひすつらむ 濟

同九年九月御百首 題政為卿

むめのはな はるかすみ立枝やいつく梅の花 匂ふしるへもなかな空にして

とこなつ 露ならぬ心をゝくもをつから わか床なつの花にそ有ける

うつみひ 月見ては寒からし夜を埋火の 闇にふかしてあかさむおし 四九

おもかけに けさは猶おも影にそふ恋しきや うつゝなからの夢を見つらん

あさかすみ をきとめぬ露もこそあれ女郎花 なひくかあたの名を 思はて 実

をのゝすみかま 松の葉のいつともわかぬ煙をも をのれふかむる小野のすみかま 実

つゆふかし かせをまつ小萩にもあらずわか袖よ たれかはらはん露ふかしとて 実

あさかすみ かひかねをとしこえぬとや朝かすみ はやたちかくすさやの中山 政

はしもみち 初しくれいつより満<sup>みち</sup>てはしもみち 立枝色こきをちかたの里 政

うつみひ うは玉のよるをく霜は埋火の ひかりに消てあかしつる哉 政

おもふこと とにかくにやすからぬ身のことほりを 思ふ事とて世をやつくさん 政

むめのはな なにゝかはくらへても見ん梅の花 色香ならへてふかき梢を 雅

ふちはかま ちらすなよ又もきて見んふちはかま 野は秋風のふきしほとも 雅

おもふこと 老か世のね覚の床よおもふこと なき身なりともいかゝ明さん 雅 五〇

かきつはた たくひしもあかすみきはのかきつはた 藤さくいけのなみもこえきて 濟

はなすゝき すき行もかはらぬ袖を花すゝき とまる物とて露ならみそ 濟

あかつきは きえて又をくともしらぬ露をなと 身のあかつきは思はざるらん 濟

(一行分空白)

同九年十月三首

夕時雨 あかつきの霜にきくへき声もなし しくるゝ雲のいりあひのかね

なかめこし秋の夕にくちもせて しくれにあへる袖のつれなさ 実

吹しほるみねの木からしくもる也 夕ある雲やうちしくらん 政

しくれゆくあらしの末は猶見えて 夕日に遠き嶺のうきくも 濟

庭寒草 枯やらて霜にさやくもほのかなる はつ秋風の軒のした萩

しほれけり朝の霜の庭たゝき うちらはらふ草のおきかへりても 実

冬草のあさちか庭のよるの霜 あけてもはらふ袖やなからん 政

しはしとてしめゆふほとのかけもなし 霜をはなゝる草のまかきは 濟 五一

しらせはや人をうきねのとまり舟 ひとり袖こすなみのまもかな

あひみまくほり江の小舟いくかへり おなし波にもひかれてかこし 実

あたなみのよるゝ身にそ思しる 蘆わけ小舟さほりおほきは 政

こゝそともうかへるふねにいひわひて あらぬとまりを思ふ波かな 濟

(一行分空白)

同九年十一月御百首 勅題

梅薫夜風 梅かゝにふかすはいかにうちわひて ねぬへき物を春のさ夜風

海上待月 名残なきしほひのうらの夕なきを してや月の空にまたるゝ

旅宿逢恋 はかなしや一夜のやとの枕とて 草ひきむす露のちきりは

浪洗石苔 山水にたかこけ衣あらふらむ いかほ。中をすめるかけにて

湖上朝霞 あさことの老もはつかし鏡やま うつるもかすめしかの浦なみ 実

深山見月 さをしかのしつかにわたる木葉まで 音さやかにすめる月かな 実

疑真偽恋 いつはりをいくたひ人に忘らむ わかまことある心ならひに 実 五二

春秋野遊 紅葉はもあはれうき世のさかの山 わけしは花の春のふる道 実

田辺若菜 里とをき田つらのわかなつむ人の まれなる袖やうちかすむらん 政

初秋朝風 秋風そはや吹むかふあさ日かけ さしてかはれる色はなけれと 政

屋上聞霰 槇の屋のまとうつ嵐先たてゝ ふるはほとなき玉あられ哉 政

途中契恋 ゆくゝもしらぬちきりを道のへの 露はかりたになをやたのまん 政

騷中間鶯 谷の戸を出てやなれも旅ならん あさたつ野へのうくひすのこゑ 雅

松間夜月 夜もすから嵐の木のま晴くもり 月にそむける松の下庵 雅

返事増恋 かきやりしわかことの葉にかけそふる 露の玉つさきえかへりつゝ 雅

社頭祝言 天となし地とかためてこの国の 内外の神のまもる久しき 雅

山家郭公 ほととぎす嶺の雲路も遠からぬ 軒はの山のたよりわするな 濟

歳暮澗水 とちそふる水のこほりを谷の戸に 暮行としの光に見ん 濟

隔遠路恋 行かへる夢はちかきもかひなしと うらみん道も月日をやへん 濟 五三

(一行分空白)

雪与歳深 降いてゝほとなき空につもらん 雪をおもへはとしのくれぬる

身にとまるほとやいかなるとしのくれ つもるも雪はかきりこそあれ 実

月も日もつもればくるゝとしのうちに 友まつ雪の空はいつまで 政

身はさても何まつかひのとしよ雪よ いったれたけんつもる日かすの 宗

聞さむきすましられて吹おこす かせを光のうつみ火のもと

むかふうちもなをさえわひて埋火の 色にとられぬ霜雪の空 実

影ふけぬ嵐もこほる手枕は うちとけてやはねやのうつみ火 政

まきの戸の音も嵐にわれも又 吹おこさるゝねやの埋火 宗

暮林鳥宿 むら鳥のをくるゝ空やいそくらん 夕のかねも木かくれのこゑ

をのかえとちきるもあれや暮ことに 木しけき中を鳥の分きて 実

いかばかりゆくとか見えしむら鳥の ねくらにもるゝ木とやなからん 政「五四

一つれはねくらしめけりむら鳥の すゝめ色なる雲の林に 宗

(一行分空白)

永正十年正月廿一日

霞添山色

春の色を花にははす霞より

心になひく四方の山かせ

うこなき山をためしに春ことの 霞も

いく世たちかへるらん 正二位実隆

ときはいまは春の山辺や一しほの 霞を

色に万代のこゑ 権大納言藤原政為

世のめくみ大内山や雪はきえて みどりの

かすみ袖おほふらん 沙弥宗清

\*以上四首、底本ノママノ字配トス

(一行分空白)

同十年二月御百首 勅題

桜巻頭 さくとみてうつろふ色を花さくら 花にはいはし心なりけり

雪 ふもとまで降もつゝかぬけさのまは 雪やいつくのみねのしら雲

忍恋 思ふとて忍はすもかな身に知ぬ なき名も世にはなきならひかは

桜 としをへてさらにさくらの初花よ ちらすはけにそかひなからまし 実「五五

雪 うつろふとみる色もなきしら雪の こほるゝ枝におしき暮かな 政

忍恋 あひ思ふ中こそしのふならひをは しらてこゝろをゆるさぬもうし 政

初会恋 かきり有て思しるさへいかならん 人の夜かれを身のちきりと 政

桜 いとまなき大宮人やをのつから 雲井のさくらおらてかさゝむ 雅

初恋 おもかけはそはぬ物から夕月夜 おほつかなくもなかも初ぬる 雅

忍恋 たれゆへのけふりとたにも知れずは よしやうき身の思きゆとも 雅

会不会恋 いらさきあふの松はら立わかれ 有しにかへるこゝつくしは 雅

月 いくくにもまたれて出る月ならば 心ををかぬ山やなからむ 濟

初会恋 名残のみなれにし夢のたくひには あらてはかなき物や思はん 濟

(一行分空白)

同十年三月三首

花浮水 こほりよりうち出る浪にみし花の いまやまことの水の春かせ

ちりてこそ袖ぬらしけれ行水に おられぬ花をなにおもひけん 実「五六

ちる花の瀬たえあれなと思ふかな 水のしらあわきえさらんまも 政

ちればかくうつろひかはるおも影の われさへうしや花のした水 濟

めくりあふ月をしるへにたのめをけ 又こむ春のわかれちの空

いまはとて月たにおもへばな鳥の うらみ尽せぬ春のわかれを 実

さたかにもなき物ゆへに行春の 名残にもれぬ夜半の月かな 政

かすめとも春のひかりのうつる夜は 月にくまなき有明の空 濟

あさはかに一夜二夜をからむ名よ としの三とせも待はならひを

はかなくそたのむ一夜もまでもいひし ことはのこりて鳥はなきける 実

とはしとも思は出ぬこゝろをは けさしら露の身をしほりつゝ 政

うたゝねの枕おとろく鳥かねに 夢のたのみの残る夜もなし 濟

(一行分空白)

同十年四月御百首 題政為卿

庵春雨 花みにと出しや雨に立よりて とふ人かほの草のかりいほ「五七

荒籬荻 荻の葉のほかにや身をもしほるらん 庭もまかきも野辺の秋かせ

竹裏雀 むらすゝめわか家鳩のかけしむる 竹をあらそふ夕くれの声

野朝鶯 みよし野やみかきかはらのあさ霞 むかしをこめて鶯そなく 実

停午月 出し嶺入へき山もふもとにて ちりなき月や四方の半天 実

寄苑恋 一枝も世はゆるしなき花園に かけてや恋ん竹川の橋 実

とまり舟いさ。や雁もたちわかれ みなのみなどのあけほのゝ声 政

おとろくもたか里よりか冬こもり いまはとつけてあらし吹らん 政

初冬風 しのひはつるならひはかたき石の火の うちいてゝともおもふはかなさ 政

寄石恋 かさなれる梢の色よなくせみの つはさにたくふみとりともなし 濟

緑樹蟬 いまは身のかげはなれ行玉かつら あらぬすちにもたえぬ思ひよ 濟

寄髪恋 いたつらにつもるを思ふ年をへて ぶりぬる雪に物そかなしき 濟

冬述懐

(一行分空白)

同十年五月三首「五八

夏雨 しほるなよけさそさゆりの初花に あまり露けき夏の雨かな  
吹すてし軒のあやめのかれはさへ まちつけかほにかゝる雨かな 実

一むらの雲にかけろふ夏の日の 草木によはき雨そよきかな 政  
時のまに過つる雨の名残さへ しはしすよしき空のうき雲 濟  
夏山 萬かへてみちなき物をうつつやま おりしも夏の色にあひぬる  
たくひなき山はふしのねいつはあれと 夏はこの世の雪とやは見ん 実  
見し春の花にかへるやさよなみの すよしくむかふ志賀の山こえ 政  
ふかくなる夏のみとりの玉すたれ あくるもくらき山のしたいほ 濟  
夏衣 すよしさをあかぬ契そから衣 つまふくかせに秋をかよひて  
ねをそなく蟬のをりはへからころも うすきもたへぬあつさをや思 政  
うつせみのは山の木との下露は ぬれてもかるき袖のうへかな 濟

(一行分空白)  
同十年六月御百首 題雅俊卿 五九  
春月 うちなひきしらぬ緑やかすむらん 月のかつらのこのめ春かせ  
行路時雨 山かせにしくるよ雲もゆくごとく いくたひ道にめぐりあふらん  
寄浜恋 あちきなくまれにきてともたのまれす 身はうとはまのあまのは衣  
庭梅 夕月夜そことしもなき庭の面に 木かくればはてぬ梅かよそする 実  
社頭月 松かせも秋さむからしかたそきの ゆきあひの霜いそく月かけ 実  
鞆中憶都 都出しその明かたの鳥のねを いく夜の宿に恋てなくらん 実  
旧巢鶯 花になくならひわすれぬ鶯は ふるすなからやさくを待らん 政  
禁中月 雲のうへや花のあしたのことのはも をよはぬ月の秋の夜の空 政  
寄山恋 色かへすおもふ心はときはやま 時こそ有けれ夕ぐれの空 政  
社郭公 あかすなをぬれてやさきかん郭公 もりのしつくをなみたなりせば 濟  
朝雪 有明のおもかけ遠しきえそめて ひかりわかるよ峯のしら雪 濟  
寄嶋恋 としをへたて身のうき嶋のかけにしも つれなき松のねこそたえせね 濟一六〇  
同十年七月三首

(一行分空白)  
秋来水辺 浪のまに又ふきかへてたつた河 秋のとまりの秋のはつかせ  
桐の葉も木のまみえつよつあつの いつより秋のかせはふくらん 実  
夏なしとさしも岩ねをゆく水や はや秋風の音すむらん 政  
\*書陵部(二五二・三二三) 本作「音にすむらん」  
わすれ水夏こそ秋とあかすのみ むすひし物をけさの初風 濟  
霧間野花 秋の野よきりのしめりよ山桜 かすみは花をしほりやはせし

なかめわひぬ花のさかりの往来にも あさ夕きりを秋のさか野に 実  
むせふともたれわけ過ん朝な夕きりのしめりに匂ふ花野は 政  
見つよし末野の花のくれもおし たちもさためぬきりのまかきに 濟  
かへるさのわれまとはすな月たにも 夜ふかき道に行空もなき  
夢よりもはかなき夢におき出て かへる空にそ鳥もなきける 実  
影とめぬ人のかたみとみるからに 涙夜ふかき袖の月かな 政一六一  
いたつらに人におしまむ夜はもなし つれなきまよのかへるさの空 濟

(一行分空白)  
同十年十月御百首八月分關  
浦鶯 雪きえぬ山をもしはしうくひすの 声きかすはのうらの菅屋に  
菅径月 月そとふみ山の苔の露けさを 秋にかこたんことほりもなし  
冬池月 月はいさ雪に晴たる山のはの 影もくまなきひろさはの池  
春恋 なひくらんほとたにもなき若草に 露はいつよりおもひかけらん  
さきてとくうつろふをのみうらむなよ をくるよ花も山かせそふく 実  
秋宮霧 秋きりやふかくかくしてとふ人に いはぬうへ木の心見すらん 実  
春恋 せきそあへぬわか水上もうくひすの おなし涙のこほりとくらむ 実  
山家灯 すきまふく風にいつまで草の庵の かけはかなくものこるともし火 同  
暮春 さそはれてをくれぬ道にいそくとも 世にはわかれの春や思はん 濟  
岸千鳥 松かねをおなしまくらのさ夜千鳥 きしうつ波に夢さそふなり 濟一六二  
古渡雨 くもるよりかねても雨のみわかさき やとやたのまぬあふ人もなし 濟  
(一行分空白)  
同十年十一月三首十二月分關

夕鷹狩 あかなく山のはなくとはかりに 入日やおしきけふのかり人  
かりころもぬれすやいかに夕露に きえをあらそふ鳥のおち草 実  
暮ふかき草の末野はたかの尾の たすけぬ鳥もぬすたちやせん 宗  
ねくらとふ梢の鳥もさはくなり 待こゑたかき山のしたみち 濟  
まかせてやもとこし駒もとふ人の こゝろなるへき雪の中かは 実  
とはれてやこゝろのうちの松杉も 雪のあしたの宿にみゆらん 宗  
雪はなを友まぢかほの庭の面を 先とふ人やなさけつむらん 宗  
時のまに跡ふりまかふ雪もかな かりにとひしも立とまるまで 濟  
一かたに今をなき名に歎くとも しらすちきりの世くに有きや

霧間野花

秋の野よきりのしめりよ山桜 かすみは花をしほりやはせし

名立恋

一かたに今をなき名に歎くとも しらすちきりの世くに有きや

かけきやははるかなりける河舟も 風にさきたつ波のさはきは 実「六三  
はれやらぬ心まよひよ君ゆへに 立名をせめて思わかはや 宗  
わかためにはるくる名にはあらずとも よそなるさまにいひもけちてよ

\*書陵部(一五二・三一三) 本作者名作「済」

(二行分空白)

永正十一年正月十九日

水石歴幾年

池水の氷も浪にいくかへり

としは春なるけふのはつかせ

池水の世とのいはほもさゝれ石に かへし

てや見む天のは衣 正二位実隆

いすゝ河にこらぬ瀬とのさゝれ石を 君か

千とせのかすにかそへん 従二位藤原雅俊

すみそめしその世やおなしさゝれみつ

いはほをひたすかけふかきまで 参議藤原濟維

\*以上四首、底本ノママノ字配トス

(一行分空白)

同十一年二月御百首

立春 かすみにも都はにしき色見えて 柳さくらの春やたつらん

江月 すみのえや松のこゑすむ秋かせに 月を光の沖つしら波

寄鳥恋 明ぬ夜をつける鳥のそら鳴や 人はなみたのかへるさの空「六四

簷梅 あは雪はうつみもあへぬ梅かゝの 枝にかゝれる軒の玉水 実

野月 たれにかもいはたのをのゝ秋の月 ひとりあかぬ山路こえ行 実

寄雨恋 ゆくゑなき霞の空に降雨の 雲まもらぬ身のおもひかな 実

帰雁 秋きりをわけこしかりや霞にも 空おほれせてかへり行らん 宗

河月 とね河や月かけきよ秋かせに いしはふむともいさゆきて見ん 宗

寄原恋 後の世もなをおもかけやけさならん 身はあた夢のまのゝかや原 同

待郭公 おもふにはしのふの山をほとゝきす こゝろのおくにまかせすもかな 済

閑中雪 ふかき夜の物にまきれす聞人に ひとりさやけき雪のこゑかな 同

故郷 あらすなる里のむかしを尋ぬれば 人はまれにもふりのこりけり 同

(一行分空白)

同十一年三月二首

花形見 恋しきはちりなむ後といひをきし 人をも花のかたみとや見む

とまるしも花やあたる水のあに 〔つゞ〕 あらしの雲やかたみはかりに 実「六五

たかなれしこゝろに残るおもかけか まことの花のかた見なるらん 済

あふことはかた山きゝすわか草の つまこもる野に音をやなくらん

かりころもすそ野の雉忍ふへき 身をわすれてもつまやこふらん 実

遠き野のかすみもふかき草かくれ こゝやありかときゝす鳴らん 済

旅にしてあまのすさみよかりそめの みるめといはゝあさきちきりを

おもふ人なきになしてや草まくら 都の露はほさしたもとを 実

思はずの草のまくらをうらみてや 故郷人の夢もたえなむ 済

(一行分空白)

同十一年四月御百首題民部卿入道

花 をしなへて露を花のほひには 色なる峯の雲もおよはし

あけぬまそさたかにみつる朝日かけ まはゆき山の雪はわかれす

露霜や又なみかせにしのはまし 野山のはてのけふの舟路に

さま／＼のみちのひとつさかひをも ふみゝぬ身こそ先くるしけれ「六六

うらむへきあらしもなしやふくまゝに 霞をいつる花の木すゑは 実

ほとなしやすゝきをしなみふるとみし 雪はよのまの松のした折 実

そらにしもおなし事のみしつたまき かすならぬ身も君は千世まで 実

うつつる世の色になれすはなからへて 命にむかふ花を見ましや 宗

つくさすはこむ世もうきを契りそと おもふもつらき身のすくせかな 宗

うかふ身はつなかなぬ舟のいつちゆく 〔つゞ〕 いつちとまらむ水のあはれさ 宗

\*底本「き」ニ「く」ト上書ス、書陵部(一五二・三一三) 本作「行」

有漏の世はよしみなしことまよふとも 不退の里やりののかそいろ 宗

思つゝ夢に見るにもほとゝきす きくよりほかの面かけそなき 済

たかこえし跡をへたつる山ならん わかおもひたつすゑのしら雲 済

ゆきめくるおなしこの世をおもふには 人につねなきことほりもなし 済

(一行分空白)

同十一年五月三首「六七

五月雨久 降くらす五月の雨もみな月の てる日にかゝる雲は残さし

世にふるはいつともわかすいたつらの おなじなかも五月雨のころ 実  
あかず思ふたくひにはあらぬ春秋を 心にをくる五月雨の空 濟  
螢火透簾 玉すたれまきあけてみん夕つゝの ほしのまきれにほたるとふかけ  
行ゑなきおもひそへとや玉すたれ ひかり見えさすよひのほたるは 実  
夏夏の夜のみしき軒の玉すたれ おくあらはにもとふほたるかな 濟  
かきならすおなししらへにあはれてふ ことをあまたの松かせのこゑ  
松風入琴 吹よるもわかれやはすることのねに うつしとりてしみねの松かせ 実  
かよひくる心なるらす琴ウツシのうへに ひきもとられし松かせの声 濟

(一行分空白)  
同十一年六月御百首  
残雪 山とをき春のかすみのむら消も のこれる雪の色やわくらん  
権 あさかほの花の光のさやけさは よふかき露もにほふ色かな 六八  
山家 をくれしの人をおもひすてゝしを 鳥けた物に又なれにける  
子日 うちはへて松は玉のをなかくしてふ ためしにひきて子の目すらしも 実  
七夕 けふならてなとかわたらぬ天の川 人めつゝみもそらにあらしを 実  
苔 くれなひのちりふみならす跡つけは み山の苔のいとひもそする 実  
春駒 廿あまりいちしるきけふの白馬や 君か心にまつひかるらん 宗  
露 いのちまていつれたかけんとはかりに 野山の露そあたくらへなる 同  
祝 一すちにあふく心のやす国や 八百万なる神議そと 同  
廬橘 見しとみしむかしの夢の名残まで 花たち花やとをく知らん 濟  
霜 日影さすまきこの庭の朝しめり とけてもさむき霜の色かな 同

(一行分空白)  
同十一年七月三首  
萩露 露けさもあかず思秋はきの 花にふりせぬたかまとの宮  
あさな／＼色ことになる下葉をは おもふかいか萩のうへの露 実 六九  
いく秋か露ふる枝にかへるらん さけはま萩の色をふかめて 雅  
露ながら花すり衣きつゝ見む 御かさもとらし宮城野の萩 宗  
花そちるわれのみもろさちきりとも 露なうらみそあき萩のうへ 濟  
なかに空にしはしやきかむ有明の 月の行ゑのさをしかのこゑ  
暮はては月と友にや出てこん また山ふかしさほしかの声 実  
いそ山やあらしのすゑのきりのまに しつみもはてぬさをしかのこゑこゑ

鹿声幽

見恋 \*書陵部(二五二・三一二)本作「本二無作者字敷」  
なくしかのひとりさやけ声もなし おのへの月のむら雲のそら 濟  
ちりをのみおもひなるへき花に先 おらぬなげきのそふもわりなし  
わすれはやほのかなりしも面影は さたかにそふをうきおもひかな 実  
垣間見のかひなき名のみなかれてや わか中河も袖にうからむウツシ 同  
\*書陵部(二五二・三一二)本作「宗」  
夢になれうつゝにそへるおもかけは みるを見るともたのみやはせん 濟

(一行分空白)  
同十一年八月御百首題「七〇」  
帰雁知春 ゆくすゑや雪をもわけむ天つかり かすめる山に思たつとも  
谷月 くるゝ夜にもりくる月も秋風の 谷よりのほる雲にあふらし  
寄思草恋 心とめて見よやお花か下草は なへてにもあらぬ露のみたれを  
春日遅 暮かたき雲のいつこをわたるとも 知ぬかすみにはふ日のかげ 実  
海月 しほかまやあまのすむてふうらみこし けふりも月にきえむとすらん 同  
寄雨恋 いまはとてねなむもかなしつく／＼と 身をしりはつる雨のまくらに 同  
曉眠易覚 またふかき夜のねさめ。さひしきに 八ゑの鳥をおどろかさばや 実  
雪中若菜 つみあへぬふる野の雪の花かたみ めならふほとまなきわかな哉 宗  
湖月 さゝ波や下くゝるにほのうら風に 月のうき巢もこゝろたゆたふ 同  
古屋蔽 われのみとあられきく夜にふりはてし まきの板屋も目はあはずして 同  
老後懐旧 うさのみも耳したかひし六十年あまり 四方のあらしのはけしかる世は 同  
庵五月雨 つもりこし落葉もくちて五月雨の しづくにたへぬ松のしたいほ 濟 七一  
寄忘草恋 わすれ草人のつむにも住の江の きしなる波や袖をこゆらん 同

(一行分空白)  
同十一年九月三首  
暁出月 空たかくのこらむほとのかげもやは 有明の月のうすき山のは  
秋の夜のいくねさめせし空の月 おもふ事とは待いてつる哉 実  
あひ思ふ影とや見まし老か世の 月もね覚をまち。いてける 雅  
なをのこる夜はいくほとか有明の 面影なからいつる月かな 濟  
秋の色をしらぬもあれやたつた山 木とのにしきのなかたえてみゆ  
たつたひめいかにそめてか七夕の 手にもをとらぬ錦をららん 実  
ときは木も染出す色か山ひめの にしきにこもる秋の梢は 雅

紅葉似錦



塩屋煙 明ぬまの夜のにしきの色もおし しくれてくれし峯のもみちは 濟  
波のうへになひきやはてんすまの浦 しほやくけふり山かせそふく  
浪風のおなし家ゐも夕けふり しほやくかたそみるにかなしき 實「七二  
たえず立煙のすゑやあま人の いとまもなたのしほやなるらん 雅  
夕けふりしほやく浦の秋の浪 あらぬあはれもたちやそふらん 濟

(一行分空白)

同十一年十月御百首題侍従三位為孝卿

春草短 音たかき秋かせよりも露けさの 春や身にしむ荻のやけ原  
旅泊雁 浪こゆる袖うきねのとこよゝり きてしはいかにころもかりかね  
河時雨 はれくもる空もやふち瀬あすか河 かはるもやすきむらしくれかな  
寄木恋 あひみねは又ともいはす二本の すきしをしのおおもひ出もかな  
早春雪 松の雪はなをふるとしの山かせも みやこの野へに霞てそゆく 実  
秋田風 いなは吹夜ふかき音よそよさらしに たれ身にしめし荻のうはかせ 同  
尋網代 夕月夜おほつかなくやたとらまし あしろのかゝりそれとみえずは 同  
山館竹 夕けふりさやまかたしく窓のまへに みさゝはかりの峯のむら竹 同  
杜首夏 若葉そふ梢もおなしいまよりの ふかさあらそふ杜の下草 濟「七三  
開水鳥 しきわふる床の霜夜はわれのみも あらぬ友ねの水とりのこゑ 同  
関郭公 ほとゝきすこの一声のほかにいま 関となひひそあふさかのやま 為孝  
水辺菊 色にこそをられぬ水としらきくの にほひはなみに袖ふれてみん 孝  
澗底松 かけといまたのむも松の万代は おもはん物か谷のしたいほ 孝

\*書陵部(二五二・三三三)本作「本二無作者」

(一行分空白)

同十一年十一月三日

冬山月 山ふかみ落葉かうへにやとしても 月にちりなきひかりをそ思ふ  
木からしの山路くもらて松のはの みとりを空にすめる月かな 実  
あらし山ふもとは浪の音さえて 嶺よりこぼる月のかけかな 雅  
山かけや冬はあらはにすむ月の おくものこらぬみねのしら雪 濟  
うち出てあかすみやこの野への雪 山ともいはしふかきこゝろは  
身にとまる紅葉も花もきえぬへし うちいつる野へのけさのはつ雪 実  
春日野や分つる跡は遠けれと なをわすられぬ雪のふる道 雅「七四  
秋の色もなにかはてなきむさしのゝ 草はみながらみねのしら雪 濟

寄河恋

ことゝへなしらすいく世のみなかも 涙の川のほかにやはある  
人しれすわたりそめてもにこる名を たつたの川のかへりやはせん 実  
しらざりきかはかりおもひそめ川は 心つくしのゆくゑなりとも 雅  
名とり河名は埋木のたくひにも あらぬうき世を身にやなげかん 濟

(一行分空白)

同十一年十二月御百首題

柳 花とのみ見つゝ心ををく露の やなきにかせのふかぬまもなき  
月 ゆく舟にきしうつるみちも空にみて 月をそはこふ雲のをひかせ  
千鳥 なく千とり妻恋すらししほ煙 なひくをみるもおもふ事として  
羈旅 いそけなをわけのこす野の入り日かけ 山路にかゝる末そくるしき  
若菜 君かためわれもたち出んさかさまに ゆくとしをつむわかなゝりせは 実  
九月辰 朝きりのはれぬそらかな長月も 有明の月にをくりつとして 実「七五  
霰 ふりみたれうつ音はけしなよ竹の おるへくもあらぬ霰なからに 実  
寄猪恋 恨あるこゝろのうちはいかり猪の たちむかふへくもなき身としれ  
梅 さそひても又春かせやかへすらん おなし軒はにふかき梅かゝ 雅  
雁 いつはりもなき世の空にまちえつゝ さたかにむかふ雁の一つら 同  
歳暮 なすわさもあらずなからの月日へて われにおとろく年のくれ哉 同  
暁鷄 まされなきね寛の空に聞そへぬ 我里ならぬ鳥の八こゑも 同

永正十二年正月十九日

竹為師

我見ても葉かへぬ色に契をかむ  
うてなの竹の代のためしを  
千尋あるかけをわか君にならへとや みかきの  
竹もうへはしめけん 正二位実隆  
すくならむ道しまなはゝわしりつる 庭の  
をしへや窓のくれ竹 沙弥宗清  
世はなへて民の草葉のすかたもや なをき  
心になひくれ竹 参議藤原濟繼  
\*以上四首、底本ノママノ字配トス

(一行分空白)

同十二年二月御百首 勅題一七六

立春 出る日のひかりにみせて春はけふ かすみにたてる空としもなし

野萩 月草にすれるたもとの露よりも ぬれての後に野への萩原

待恋 まつにたえぬ一夜二月日へて あひみるたにもあはれある世に

津梅 梅かゝやひきとめつらむつなて 縄 こゝをつによる舟のをひかせ 実

嶺月 中空や月に忘んいつるみね 入山のはのなかめのみして 同

聞恋 ありときく人や滝川なかれての いもせはしらす袖に落ける 同

春雨 雨のいとどなか／＼し日やけふに明て きふの空とかすみはつらん 宗

崎霧 けさ立し雲つははるゝ夕浪に すゝのみ崎そ霧の底なる 同

折恋 神もさてあはれはかけよよはし の これや恋路の天のうきはし 同

卯花 石ま行まことの水のしらなみの 色にもこゆる卯花のかけ 濟

時雨 いつふるを心とか見ん雲かせに 身をまかせても行時雨かな 同

瑞籬 いのりをかは君そしらましみつかきの 久しき世にもかへるためしは 同」七七

同十二年閏二月三首

(一行分空白)

見花恋友 おもふそよ雲井の花の世々のもとも わか見るいまのたくひならしを

花やしるこの世かの世と見し人の おほくの春をさそふおもかけ 実

おもひしる身にこはれは花もその こゝろの友をさそしにふらん 濟

ちりても苔にまき多の花の色の あかぬこゝろをいかにみえまし

朝戸あけて昨日の花のかけとへは 苔に跡なきよるの山かせ 実

苔のうへにちるを見つゝそ木の本の 外にもつる花はしらるゝ 濟

隔海路恋 いかゝいはむ波路もたえて八百日行 はまの真砂のまさるうらみを

ありといふ名にのみ聞て恋衣 うらのはつしま浪かせもうし 実

かねてよりたれをかなしき名残をや あかしのなみに思をきけん 濟

(一行分空白)

同十二年三月御百首題雅俊卿

花 見る人よ花にたちならふ太山木も あれはありとや袖かはすらん」七八

忍恋 思ふとておもひならひぬかはかりに しのふかたにもふかきこゝろは

旅 草枕野山の露のぬれころも いはしやをのか涙なりせは

花 しほれてもちるへくはあらぬ雨風も さかりの花はこゝろとやせぬ 実

不逢恋 そめて後うつろはむよりよしさらは よそにこそみめ花の心は 同

眺望 なかめきてあはれことしとくれの春 おほろけならぬ山のはの月 同

花 さく花の雲のかよひちかほるめり くだるや乙女天つ春かせ 宗

氷 水分の山は名のみによしの河 おきやふかめてこほりはつらん 宗

祝 さらに今君か日嗣のさしなから あきしけき世を空にしれとか 同

暮春 春よいまかねてわかれし花鳥の 名残を身にもなしてこととはれ 濟

後朝恋 立わかれ夕をいそぐみちにても この朝露をいかに分まし 同

(一行分空白)

同十二年四月三首

新樹 春は今若葉の山にうつるふも こゝろの色や夏にそむらん」七九

ときは木の下葉も今やちる花の 跡はあらしにしけき山かな 実

あさな／＼もみたす露にはつあひの 色より青き夏木たちかな 宗

なをさりの露やはもらむ花にたに かけふか／＼りし木との下葉は 濟

いかにみていかにみてましほとゝきす 空行月の夕くれのこゑ

わか涙つくしやはてんほとゝきす 秋にもあはゝたくれの声 実

妻や身のくせならし百千とり 夕とゝろきの山ほとゝきす 宗

ほとゝきすかへる夕の雲を見よ こゝろなくともいでし山路を 濟

ぬれにけりあしとき雨にをくれしと ゆけはあやうきまへのたなはし

板はしの音もとゝろにうちわたす こまのあしときむら雨の空 実

すゝか山よそになり行急雨の 雲一すちやきりの丸はし 宗

あすは又いつくの淵に飛鳥川 けふふる雨の瀬まの岩はし 濟

(一行分空白)

同十二年五月御百首題民部卿入道」八〇

五げふのはるさめ ほともあらし四方に桜の 一花の 木すゑほのめくけふの春雨

四あふきのかせの 玉すたれ夏ははしぬのおもかけに あふきのかせのうちかほりつゝ

一かみな月 神無月花そめならぬ袖をしも かへるに秋の名残やはなき

二さはへのこまの なかき日をささへへの駒のあかすとや たゝ水草をおもふはかりに 実

五夏はらへかな うきせゝをこえていまはの老の後 なにゝもあらぬ夏はらへかな 同

三きりこめて あやなくやもみちの山は霧こめて よるのにしきと立へたつらん 同

三をくしもの 松にすむつるもめさめてをく霜の 身にしみとほる袖の月かけ 同

四さ蕨あさる しつたまきしつ心なくわけ入や さわらひあさる木のね岩かね 宗

四ほたる飛かひ すゝさは夏か秋かの中河や 蛍飛かひ月はなかれて 同

はつ雁の はつかりの身にしむ声に高円の おのへの小萩色つきぬらん 同

瀬とのあしろ木 見し秋に朽ぬこゝろと田上や 又もりわふる瀬との網代木 同

春の明ほの いかみむなへて霞のたくひにも あらぬ名残のはるの明ほの 濟一八一

三つみ火に さえこほる夜ふかき窓の埋火に あくるを春とまつ光かな 濟

(一行分空白)

同十二年六月三首

夏草露 さはらてや秋もいまこむ夏くさの 葉山しけ山露ふかくとも

朝夕の露こそ花の草のはら あつき日かけもこゝろをやをく 実

百草はみながら青きあさは野に わか露見する花のくれなゐ 宗

水風夜深 秋もいさ涼し 色はなつの夜の 空にふけたる天の川か

\*底本一文字分空白、書陵部「一五二・三一三」本作「」

梓弓いその松かねよる波の よるこそまされかせのすゝしき 実

しは川やふしのねおろし夜さえて こほりにふくる六月のかけ 宗

いかに見てなをあかさりし夕顔の 露のゆくゑをおもひをきけん 実

おもひわひぬなにかあかぬとうきふしに なしてやむへきこともなし 宗

薪つき身はきえぬともおも影や 世とのほのをとなりてのこらん 宗

(一行分空白)

同十二年七月御百首勅題「八二

垂柳蔵水 枝ながらしからみかけて青柳の かけにそむせふ水の春かせ

月前恋友 月よいかに松むしの音に忍ひしは かすにもあらぬ空に恋つゝ

松歴年 松にのみいく世のとしを忘くさ きしにおふてふ種はありとも

野外霞 雁なきて月は雲井にたか松の 野のうへかすむ春の明ほの 実

秋夕情 いつかたに心をやりてをく露の 身をかわずれん秋の夕くれ 同

垣根寒草 をきのこす霜も有やと冬草の たのむかきねも嵐ふくなり 同

海上晚霞 のとの海や霞ふきみたす夕かせに 嶋めぐりする舟そいさよふ 宗

雁成字 雲をしのくたか筆ならむ薄墨の 空もほのめくかりのおもかけ 宗

寄天恋 神かけし言葉の末もあさはかの 夢路になすや天のうき橋 同

行路卯花 夕月夜をのつからなるうの花の かけ行みちに誰をとゝめむ 濟

炬火似春 窓のうちの春ふかゝれやうつみ火の あたりにぬるむかせの光は 同

寢覚懐旧 涙川かへらぬ波をおとろけは 見えつるのみの夢はゆめかは 同「八三

同十二年八月三首

(一行分空白)

月前雁 もれ出るかけ待月のさ夜かせに 雲まのかりのいつちゆくらん

月下擣衣 衣うつあるしは月かあらはなる 浅茅か宿も松のどほそも

旅宿月 明はまたおき出ん宿の名残をも はかなや月に思ひをきける

月前雁 たれも世の思尽せぬ月をしも なく音にたてゝ雁は来ぬらん 実

浦とをみ月の御舟にから櫓をや をしあけかたの天つかりかね 宗

おりしあれかりのなみたをそへすとも 袖には月の宿をかれめや 濟

月下擣衣 白妙の月のきぬたや七夕の 手にもをとらぬ物とうつらん 実

きく音のつゝきの里や月きよみ 風のゆくてにころもうつらん 宗

見し夢やたえてうつらんから衣 かへさぬ夜半を月にかさねて 濟

秋のよの花と月とのくさまくら わすれね旅の袖の露かは 実

月もみよ旅にしあれば椎の葉に もるいひしらぬ宿にかりねと 宗「八四

なをさりの草葉の陰もくさならぬ かりねを月もあはれとやみん 濟

(一行分空白)

同十二年九月御百首題雅俊卿

見花 いにしとしわすれぬ花のおも影の 今の色香にとをさかりつゝ

原月 行えなくわけこし物を月影の 明るやかきりむさし野の原

暁 こゝろすむ今そさま／＼おもひねの 夢はうつゝのあか月のそら

浦霞 春のきるにしきのうらのあさ霞 花ともいはいしおきつしらなみ 実

うたゝねのよひの枕はかりかねに うちおとろけは月かたふさぬ 実

おもふ事なりもならずも行末を するとはなしの身をや尽さん 同

すくなるをこゝろとしるもくれ竹の うきふしあれや世に逢すして 同

竹 松浦かた春はかすみや袖はへて ひれふる山のすかた見すらん 宗

山霞 影きよみ月のなかれに枕して 秋と岩ねや敷もあかさん 同

納涼 たかの毛の松原かくれけふる日に 立や鳥かけのむすほゝれゆく 同「八五

鷹狩 くらとあくのこゝろのねさしいかならん いはぬはいふにまさの葉かつら 宗

増恋 としといひてをくるもおなし夢の中を かつをとろかす春のくれかた 濟

三月尽 あらぬ名もおもふかたよりあらはれは たれにかこたんつらさともなし 同

顕恋 (一行分空白)

同十二年十月三首

落葉 一つのまに花は木葉に散ぬらん おなし梢に山かせの声

千鳥

見すやいかに風のちからもなにならて もとよりもろき霜の木葉を 実  
山ふかみなを朽のこる花のうへに うきをかきかねてちる木葉かな 宗  
散はてゝ木葉さはらぬ日影にも 山のしつくはほすとしもなし 濟  
夕しほのひかたの真砂一むらに 又みちくるや千鳥なるらん  
旅にして浪風さむきさ夜衣 うらかなしくも千鳥なく空 実  
それとしもいさしらの磯千鳥 いかなる筆の跡のこすらん 宗  
かすかなる夕なみ千とり立かへり よるの河瀬のこゑぞへてなく 濟 八六  
とにかくにこの世はなにをまことゝも さためぬものを人はうらみし  
うらみしなかならずこれをたのめとは 思にもあらぬことはなりせば 実  
ひたみちに人もうらみしこゝろさへ 身にいつはりのある世ならずや 宗  
まことなき心はおなしこと葉にも なをおもふとはきかまほしきを 濟

偽恋

同十二年十一月御百首題右衛門督為和卿  
春曙 かはかりに思をくらん春の色も おもへむなしき夢の曙  
影やとす月もさなからから衣 すそ野の露ははらはてそみん  
春秋のほかにくれ行としならは 名残おほくはおしまさまし  
世の中よわかこゝからみちもなし 人にしるへはありもあらずも  
白妙の波路うらゝにわたつ海の かさしも花の春やたつらん 実  
こゝろあれやうらみんとおもふ煙たに 月にをよはぬしほかまの浦 同  
人はいさいく重の雪のふる道に もとこし駒のこゝろをそみん 同 八七  
わすれてもみし世の夢を忍ふなよ 身は山かせにまかせはてゝん 同  
あかすみる池のこゝろにさをさすも そこみしられぬ藤波のかけ 濟  
ねくらいつるあしたの鳥の羽風にも 乱てさむき霜のむら竹 同  
思へとも跡なしことのゆくゑにや 雲路の鳥の音をもなまし 同

(一行分空白)

同十二年十一月御百首題右衛門督為和卿

春曙

かはかりに思をくらん春の色も おもへむなしき夢の曙  
影やとす月もさなからから衣 すそ野の露ははらはてそみん  
春秋のほかにくれ行としならは 名残おほくはおしまさまし  
世の中よわかこゝからみちもなし 人にしるへはありもあらずも  
白妙の波路うらゝにわたつ海の かさしも花の春やたつらん 実  
こゝろあれやうらみんとおもふ煙たに 月にをよはぬしほかまの浦 同  
人はいさいく重の雪のふる道に もとこし駒のこゝろをそみん 同 八七  
わすれてもみし世の夢を忍ふなよ 身は山かせにまかせはてゝん 同  
あかすみる池のこゝろにさをさすも そこみしられぬ藤波のかけ 濟  
ねくらいつるあしたの鳥の羽風にも 乱てさむき霜のむら竹 同  
思へとも跡なしことのゆくゑにや 雲路の鳥の音をもなまし 同

\*書陵部(二五二・三一二) 本作「へす」

野月

歳暮

述懐

立春

浦月

積雪

山家風

池藤

朝霜

寄鳥恋

(一行分空白)

同十二年十二月三首

神楽

歳暮雪

そのかみの岩戸はしらすあくる夜の おしくやはあらぬうたふ声／＼  
名もしるしやまとはあらぬから神の はるかにすめる明かたのこゑ 実  
さくもそのみ山のあられ袖の霜 さむき庭火の色そ深行 濟  
いかにせむ又老らくのとしのくれ ふりつむ雪は門させりとも

柳松

身につもる数のみ有て行としの 跡とていつる雪に見えける 実  
ゆくとしも雪ふみ分ておもはずや 夢かとのみの春秋のそら 濟  
いかへり亀のうへなる山まつの 木たかきかけに千世をならへん 八八  
ことの音になるゝみきりの松かせは をのかしらへも世には似ざらん 実  
都には松を軒はのまくらにも 四方のあらしをへたてゝそすむ 濟

(一行分空白)

永正十三年正月十九日

柳弁春

うちなひくみとりやにほひ春柳の  
枝より花の春のはつかせ  
時はいまみどりのいとをくりかへし 千世も  
へぬへき春のやなきか 正二位実隆  
花をゝきてをのれ時めく春柳の いとより  
みゆる千世のはるかせ 沙弥宗清  
くり返しいく春そめんさほひめの こゝろの  
色を春柳のいと 沙弥宗清  
吹かせもおさまれる世を白露の ひかりに  
みかくたま柳かな 権大納言藤原雅俊  
春の色ををのれしるしも青柳の かけより  
なひくかせのすかたは 正三位藤原濟繼  
冷泉大納言入道法名曉覚政為卿  
\*以上六首、底本ノママノ字配トス

(二行分空白)

永正十三年二月御百首勅題 八九

立春

見月

寄浦恋

沢若菜

河上水

暁山

窓梅

おさまれる世の声にして海山の 浪もあらしも春や立らん  
松をばらふ秋かせたかくすめる夜に 見る一きはのまさる月かな  
なをさりのなみにおもふな時のまも ほさぬ袖しのうらみある身を  
わかなつむ袖や友鶴しるたへの 影をならへてあさるさは水 実  
くたけてもやかて氷の谷川や いくへとちあくる水のしらなみ 同  
いまは身の夢もほとなし山ふかき 暁おきの道をならさむ 同  
うつしをく袖にとまらむ影もかな かたふく月のまとの梅か香 暁覚

寒草霜 うき世とはかれずや人のおもひ草 おはなかもとに霜はをけとも 曉

夕野 みさひある沢辺をみれば色くるゝ 末野のみちはあふ人もなし 同

河辺柳 身は六六田の淀のふる柳 なに世の<sup>\*</sup>に朽のこりけん 宗

曙山霧 \*底本一文字分空白、書陵部「一五二・三一三」本作「」

祝言 日の声滝のひゞきも水無瀬山 霧みなきりて有明の空 同

待郭公 月ほしの名たかき国もさもあらは あれな日本あきらけき代そ 同

夜埋火 夢路さへつれなく明てよこ雲の 山のはつらきほとゝすかな 濟

寄虫恋 かきをこす影をたしき光にて ともし火くらき埋火のもと 同

（一行分空白） とふほたる身を秋かせの夕くれも たくひかなしき思をそしる 同

同十三年三月三首

夕落花 思へかしちらすはけふもかへらしの われやいさむる花の夕かせ

人もみなこり行花の柴の戸を 雪にとちてやくれんとすらん 実

ちらすともおしかるへくはくるゝ日を いとゝ名残の花のかけかな 曉

人はちり花はむなし山かけに ひとりかすめる松の夕かせ 宗

山かせも空にくれ行しら雲の かへるをみてや花もちるらん 濟

山吹の花のしからみかけもあへす 水ゆく河は春もとまらん 実

よしの川はやくの春を山ふきの いはてもかへす色に出らん 実

さそふ水ありともみえず山吹の 花のかけうく春の川なみ 曉

春ふかみよしのゝ川にうつりけり さくやいもせの山ふきのはな 宗

影なからをくも音してゆく水の うへはつれなき山ふきの花 濟

色かはるちきりもさそとわか門の あさちかうら葉うらみやらなん

ひきむすふ草葉のかせの伝にても あはれしられん門の中には 実

たのましな身はいたつらに松の門 たれにたかへてとはるへしとも 曉

たゝきなはあなかま夜はと妹か門 さすかにうたふこゝろしりてよ 宗

とちはてぬ道は心にのこるとも むくらの門をたれにはらはん 濟

（一行分空白）

同十三年四月御百首冷泉大納言入道曉寛

梅 冬こもり雪より出し梅の香の 花にあらはるゝ春のはつかせ

雲 あさみとり水なき空にわき出て 一すちみえし雲のみちぬる

猿 山ふかみ猿の声ふむ橋の上は 雲路をゆきて行ゑともなし

桃 にほへ猶花にさく名ももゝとしの<sup>※</sup> 十つゝ三の春をかさねて 堯空

霰 あらし吹椎のうら葉の白妙に みそれもつもる雪とみゆらん 堯

牆 宮の中にまぢかくなれて芦垣の よしのを宿にたのまぬもうし 同

虎 わけ入はよのつねならす山かせも はけしき虎のかくれてやすむ 同

鶺鴒 雲かすみあかるひはりやのとかなる そらにしゆゆふ心なるらん 曉

霜 霜をへし身さへのこるを草も木も をのかさまゝ先しほれる 同

柏 陰おほふひろはかしはに音はして まとうつ雨もおなしうへなる 同

枕 しらすわか此世の夢のかり枕 むすひもはてぬかきりいつまで 曉

蕨 驚たてる小川の末の山かけに なれも手にきる初わらひかな 宗

扇 けふも又ひつしのあゆみちかしとを 意のむまは驚もせし 同

鶺鴒 かはり行世のあた波に嶋つとり うくもしつむもよそにやはみん 同

風 とりとめぬ物ともなしやこのころの あぶきのかせを手にまかせては 濟

蕨 おもかけそきゝしにもあらぬ末の世に いくたひかせもうつりきぬらん 同

野への草太山の苔のよなゝに しきもさためぬ露のさむしろ 濟

（一行分空白） 前内府入道法名堯空

同十三年五月三首

曉月郭公 雲にあふあか月つきのほどゝきす あらぬひかりをそふる声かな

夢さむる枕の月のひかりさへ なくねにきゆる山ほどゝきす 曉

短夜も老はねさめのありあけを みすやきかすや山ほどゝきす 宗

郭公かねてちきりやあり明の 山より月のみちもをくれぬ 濟

古宅五月雨 さみたれの故郷人よ月ほしの 影もるたにも軒のあれまを

五月雨をまたても朽し軒には ふる空とてもえやはかたらん 曉

荒ゆけは軒端におよふ蓬生も おなし忍のさみたれのころ 宗

しのお草露はかりたに五月雨の 軒のしつづくの日をそへにける 濟

雲の上にすむ身やなにのくらゐ山 しもにはのこす道もこそあれ

思入みちとをとるをもろかなる 九四 わか身くらふの山はかひなし 曉

吹つたふ風のすかたをまほにあけて いつかにゆかんわかうら舟 宗

思つゝしらぬもはかなあすか川 あすはこの世に遠き淵瀬を 濟

（一行分空白）

同十三年六月御百首 題為孝卿

梅発得客 梅かえに来ゐるや人もうくひすの ねくらあらそふ花の陰かな

遥思月 おもふにもちりをはなれてすむ月の み山の秋はみさらむもおし

伝聞恋 しのふなよきこそはふかき窓の中も いひあらはさぬたよりやはなき

泊雨滴蓬 あらき風にさゆらん浪のしつくより とまもる雨はうきねともなし

暁月春静 夜をふかくひとりおき出し花の下に 月は有明のをくれけるかな 堯

雨夜虫 なくむしの声もやます秋の雨の 明かたき夜にやなれもかなしき 同

思不言恋 神ならぬ身はいかさまにゆふたゝみ しらぬ心の末をたとりて 同

寺近開鐘 くらとあくとおのへのかねを枕にて さ山かたしく袖のさひしき 同 九五

岡残雪 松の雪消すはありともそれならぬ 木のめや春の岡のへのさと 暁

薄為墙 ほに出るたくひまれなる初お花 なひくにしるき秋の草かき 同

憑不逢恋 いつよりかたのみかけゝんつれなさは はしめも今もおなしこゝろを 同

心静延寿 世のうさもおもひのとめてすむ人の 心つからそよはひともなる 同

樵路春草 肩をゝもみおへる木こりは帰る日に おる手みせたる野へのさ蕨 宗

秋窓鹿 小萩ちり霧ふたかれる山まるとに われもしかなく夕へならすや 同

初冬朝 朝霞たつ空なからかみなつき 春の物とは何しくるらん 宗

閑中待暮 夜も又いやはねられん松の声 滝のひゝきにくらしかねても 同

橘散風 吹となきかせのゆくゑもたち花の 花ちるかけにみえてすゝしき 済

秋唯一日 けふといへは秋にそかつ種の 花にかけこし露のうらみを 同

披書逢昔 こゝろにそとゝめん世との鳥の跡を あとなしことにかゝみるへき 同

(一行分空白)

同十三年七月三首 九六

初秋衣 むは玉のよるの衣にかせもふけ あつきをかへすはつあき空

この秋そけの衣ははつかせに 思山路の露をならさん 堯

ほとなさやしつかきぬたの音までも おもふにこもる秋のはつかせ 暁

こし秋は一夜二夜のあしの屋に 波かけ衣すゝろすゝしな 宗

なをさりの霧のまよひにわするへき 家路とやおもふ秋の花野を

くれにけり月待<sup>ついで</sup>てもいはれ野の 花にうつらの床やからまし 堯

秋の日のかきりも花にわすれ草 生る野へにもねてやゆかまし 済

ともなひてねにゆく鳥は雨かとの 夕にさはるちきりとも見す

うらみしなその夜。かきるわかれとは まことは鳥もしらてなきけん

何ゆへとみるらん妹か庭たゞき よしなきすかた鳥もあらすや 宗

こえわふる関のこなたのねさめにも しられぬ鳥の音をほそへすや 済 九七

同十三年八月御百首 月百首

(一行分空白)

月前翫花 契あれやおなし光にかはかりの 花にあひあふ月のさかりは

又ふるも月。はなれぬうき雲は かせにまかする時雨ともなし

\*底本一文字分空白、書陵部「一五二・三一三」本作「を」

月前時雨 われならてわけし跡も木からしの 宿にくまなき月やうらみん

寄月疑恋 春の夜は花こそ月のひかりとて よしやかすみを空にまかせん 堯

月前見花 をく<sup>て</sup>袖やいく夜の露霜に かりそめならす月やとすらん 同

月前田 \*底本二文字分空白、書陵部「一五二・三一三」本作「もる」

寄月歎恋 たくへてはみるたにかなしよとゝもに 月のかつらのおらぬなけきは 堯

嶋月 秋の夜もなかく名にのみおほしまの 月やはや舟ゆく跡もなし 同

月前帰雁 なこりこそいやとをさかれかすむよの 月をかたみにかへるかりかね 暁

月前落葉 枝の秋を月も忘れぬこゝろとや ちる木葉にも影やとすらん 同

寄月遇恋 かりり出てもに見るへき月もなし 新手枕のあけぬかきりは 同

月前鵲 月みれはうちもねぬ夜の明かたを たれおとろけと鳥は鳴らん 同 九八

余寒月 山たかみけぬるか雪の玉水に くだけてかゝる窓の月かけ 宗

月前草 をくとなき霜のまかきの朝な／＼ 月にうつろふ庭のしらさく 同

寄月祈恋 いのりても身のなげきやは<sup>や</sup>し 月のかつらはきり尽すとも 同

\*底本二文字分空白、書陵部「一五二・三一三」本作「——」

月前懷旧 むかしのみ恋つ忘つおもひくま なくてやは見ん老か世の月 同

月前蓮 雲をわけにこりを出し心もや おなしはちすの露の月影 済

寄月悔恋 いまさらになれぬる月をかこちても いはん方なき秋そ身にしむ 同

同十三年九月三首

(一行分空白)

山紅葉 それとなき岩ほかくれの草木まで おなしもみちの山路をそゆく

ちらせても見ん人はみむもみちかな ちりなき山の苔のむしろに 堯

さそふかとおもふもくるし秋ふかき もみちをわけておつる山水 暁

立ならすおのへのしかの涙もや 時雨てふかき峯のもみちは 済

惜秋

大かたにみてしももろき露のまの 秋なりけりなけふそくれぬる 九九

なにそはと思すてゝし露の身も 又あはさらはあかぬ秋かな 堯  
うらみよししたふによらぬならはしは 暮行秋の名残のみかは 暁  
いつまでか秋ともかけんなをさりの あたのかたみの露は有とも 済  
見すやいかにかきねにはらふ草かつら いとふにはゆる物にやはあらぬ  
花ならぬ身はもとの身を今さらに いかゝあくとなしははつらん 堯  
秋風にみるもはかなきさゝかにの いとふをさへやかけてたのまん 暁  
なれてこそなるゝを人はとはかりの 心を身にもことよりはせせめ 済

(一行分空白)

同十三年十月御百首

高 雪ふりてつもれるほどやみるか中に いまもふもとのちりひちの山  
少 のこるをや身におどろかむおちかみの けつればつもるかすをそへつゝ  
聴 おもふ事けふもむなしく暮ぬとや いらあひのかねをゝくる山かせ  
清 かきはらふ庭のやり水をのつから のこるあくたはなかれてそゆく 一〇〇  
低 雲をしのく心やこもる小松はら 岡の草根にまじる二葉も 堯  
速 あはれなと老の月日は滝川の ありしにこえてせく方もなき 同  
薄 のこりけり有明の月のみるかうちに ひかりは空の色にきえても 同  
新 とし／＼にふりぬる物をたれか世に 都の雪のけさの山のは 同  
低 こほるらし松はうれ葉も音なくて かせにしられぬ雪の下枝は 暁  
少 一とせのゝこる月日を思へなを その春秋も夢と見ながら 同  
聴 たのむてふこゝろやをしへとく法の 身にはきゝうる道しなくとも 暁  
濁 わか身いまちりを出てもにこり江の すむほどもなき世をや過さん 同  
遠 くもりなき入日の波に海こしの 山もうかへる嶺のはつ雪 済  
厚 かきりなき道のこゝろをあふくには ひとりそうすきめくみやはある 同  
視 手もふれぬ人のためにはいにしへを しるせる文もしるしやはある 同  
(一行分空白)  
同十三年十一月三首 一〇一  
寒夜水鳥 さ夜まくらわかうへならし霜はらふ 羽音もさむきをしかもの声  
さへあかず夜床うかるゝ水鳥や 氷のうへもあしのいとなき 堯  
ねやのうちにきくたに寒し霜氷 さそ身にふかきあし鴨のこゑ 暁  
影ふくる月のうきすの波さえて 氷をくるゝにほの水うみ 宗  
霜水はらふもしくもさゆるよの うきねそたへぬ水とりのこゑ 済

雪蔵帰路

けさの雪にわれやゆかむととはれつる かへさやともにてゝまよはむ  
立かへる人にうらみん跡もなし いまも又ふる雪にむかひて 堯  
けさまでとはとひくる人の帰るさに 思たえねとつもる雪かな 暁  
薪とるかへさよいかにわけわひし 落葉も雪の涙のきたかせ 宗  
ふりはへて又くる人の跡もかな かへらん雪のみのちのしるへに 済  
われなからこゝろのおくはまたしらて ふかき山ともたのみけるかな  
世はなれてすむ身に山のかひもあれや 鳥の音をたにいつかきけん 堯 一〇二  
たれか又おもひはしらん山ふかみ かくても人はあられる世を 暁  
なかれては影もうつさし浮世そと すてしこゝろのおくの山水 宗  
こゝろたゝこの世をいてぬ山ならば かくてもあさきみちやたらん 済

(一行分空白)

同十三年十二月御百首

海辺霞 春といへはなたの塩やきいとまなく みゆるけふりやかすみ成らん  
早秋 くる秋もおなしやとりそ一葉ちる 枝にのみすむ鳥もこそあれ  
嶺雪 さやけしな月は空にて明る夜の 雲よりいつるみねのしら雪  
片思 われゆへのこゝろにかよへ。おもひ なくてすくさむ此世ならしを  
栽花 花もうし見さらむ後に植し世を わするゝ草の種をまかせは 堯  
七夕 天つほし霜をかさねていくたひの 秋にゆきあひの鶴のはし 同  
初恋 思てふ色もかくこそくれなゐは 末つみはやす花にやはあらぬ 同  
积教 こゝにきえかしこにうかふ空の雲 いつをまよひのはしめとかしる 同 一〇三  
春月 さく花の雲わけのほる月かけに かすむともなきみよしのゝ山 暁  
田鹿 出てこし山路わすれぬさほしかの いなほの雲に声きこゆらん 同  
歳暮 今さらにおしとはいはて又こえん 身をうらみけるとしの暮かな 同  
述懐 身にそしるなきたためしにひく年の をろかなるをもすてぬめくみを 同  
野若菜 つまてやはよそにしも見ん若年生る 野守のかゝみそれかあらぬか 宗  
六月祓 明日香川けふは御祓ともろつ人の なかすあさせにかはる淵かも 同  
梅恋 身のとかと今こりはつるこゝろこそ こむ世に及ぶ情なりけれ 宗  
炭竈煙 やかぬまも松たつ嶺のすみかまや きえん空なきけふりなるらん 同  
葵 あふひ草けふのむかしのみあれをも 見ぬ世をかけて露そこほるゝ 済  
水鳥 かさぬらんをしの毛衣なをさえて したにこほらぬ池水もなし 同  
増恋 日にそへてみちくる塩にしほれても 遠きあしへのうき身をそしる 同

(三行分空白)「一〇四

(二行分空白)

天文二年<sup>癸丑</sup>十一月十三日書寫之功畢

尊俊「一〇五(以上下冊)



【略解題】

『一人三臣和歌』（以下本書）に関しては、早く、伊藤敬「三条西実隆と和歌―その二 雪玉集のこと―」『国語国文研究』三〇、一九六五・三 改編の上、伊藤『室町時代和歌史論』〔新典社、二〇〇五・一一〕に再録）に成立・諸本についての論があり、その伊藤論をも包括しつつ論じられた、井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期（改訂新版）』（風間書房、一九八七・一二）における見解が、現在の研究の一つの到達点といへる。井上論を小論の筆者なりに整理すると、以下の通りである。

①本書は、一人Ⅱ後柏原天皇と、三臣Ⅱ（多くは）三条西実隆・上冷泉為広・下冷泉政為、の詠を、月次歌会等から抄出編集したものである。

②普通二冊本で、文亀元年（一五〇一）から永正一三年（一五一六）までの詠を収めるが、所収詠歌の少ない一冊本も多数存する。

③伊藤論などによれば、諸伝本の奥書には、享祿三年（一五三〇）・尊俊（内閣本・高松宮本他）、天文二年（一五三三）・尊俊（高松宮本他）、天文七年（一五三八）（伊達本他）等の年紀・書写者の名前が見える。

④所収歌人は、前記四名の他、数は少ないながらも、飛鳥井雅俊・中山宣親・邦高親王・下冷泉為孝などの詠も含まれる。

⑤題者は、勅題が最も多く、政為・為広・雅俊と続く。歌道師範家の人に限られてゐるやうである。

本書に関する問題点は、既にあらかた指摘されてゐると思はれる。

一点補足すれば、詠歌が所収される歌人に姉小路済継を追加しておくべきである（下冊においては安定的に詠が採られてゐる）。

もう一点、従来指摘されてゐないかと思はれる本書の伝来過程について、小論の筆者が知り得たことを追記しておく。

伊藤論が指摘した天文七年の奥書だが、東京大学史料編纂所蔵本（四一三一・四）他にも存する。史料編纂所本から引用すると、以下の通りである（A Bは仮に付したもの）。

A 已上御百首中

今上御製并三從之詠進等鈔出之當時宗匠

不過于此三輩歟雅俊卿稽古不足歟

世之所推難比于此問者乎仍畧之早

又御月次一ヶ月者三首懷紙被重之一ヶ月者御百首短冊也仍百首隔月也

（一面空白）

B 右者菩提山報恩院所持之本令

借用書寫同加校早仍竹園仁写

置給詠抄

天文七年八月十五日

兵部少輔中原遠忠

即ち、十市遠忠が「菩提山報恩院所持」の一本を以て『一人三臣和歌』を書写したことが分かる。この「菩提山報恩院」とは、柳原資定の男で実父は忠顕とする僧・尊俊である（『本朝画史』〔元禄六年刊五冊本・第五冊・一オウウ）、井上『中世歌壇史の研究 室町後期』、山本啓介『詠歌としての和歌』〔新典社、二〇〇九・一〕）。ちなみに、菩提山とは、現在の正暦寺（奈良市菩提山町）。

尊俊が『一人三臣和歌』を享祿三年・天文二年に書写してゐたことは、前述した如く、諸伝本の奥書よりそれと知られる。

従つて、現存伝本の多くの祖本は、この《尊俊本》に遡及するのではないかと思はれる。そして、尊俊といひ遠忠といひ、『一人三臣和歌』が成

立してさほど時日を経ないころほひ、早くも大和の一隅で、書写が繰り返されてゐたといふことは、『一人三臣和歌』の流布・伝来を考へる上で、極めて貴重な示唆を我々に与へるものといへよう。

『公宴統歌』や、京都府立総合資料館蔵『内裏御会』等との関連性に関しては、いまだ確言すべきものを持たない。今後検討を続けて行きたい。

○

底本の書誌・概要に関しては、既に、『国立歴史民俗博物館資料目録「8-1」高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」(二〇〇九・三、以下『目録』)に、以下のやうな記載がある。

一人三臣和歌 後柏原天皇・三条西実隆・上冷泉為広・下冷泉政為。

江戸前期写 二冊 〇七一三(み箱四六二)「装订」袋綴。「法量」二

七・八×一九・九。「表紙」鳥の子色地に水浅葱色卍繋ぎ文(原)。「外

題」一人三臣<sup>上下</sup>。(原・左・簽・書)。「内題」文亀元年三月廿四日内

裏御月次<sup>下</sup>。〔本文〕半丁<sup>下</sup>三行。和歌一首二行書。①歌題を歌頭

に記す。「丁数」全<sup>下</sup>二三三丁。「印記」「幸仁」。「備考」(略)第五六丁

ウに挟む紙片に「良正助写」一<sup>下</sup>たまつ浪 全/白々落葉之水玉表紙/

一千種 上<sup>下</sup>中<sup>下</sup>下/茶表紙/一千枝のしつく 全/浜木綿 全/一方糸

全/表紙有<sup>下</sup>/一おひのそこ 全/藤亀地白青の菊表紙/一白鳥の子

表紙 一冊/御筆<sup>下</sup>にて十七品之拔書/朱<sup>下</sup>にて被遊/第一八代之集序例

/已上七品とあり。(略)各冊丁数①一一六②一〇七丁。(二一八頁)

この書誌記載には、いくつか誤り・不備が存する。

まづ、半丁の行数だが、正しくは一二行である。

また、印記に関して、『目録』では「幸仁」のみを掲げるが、正しくは

以下の通りである。

上冊・墨付第一四丁裏・左下ノド寄り

「幸」(円朱印、双郭、陰刻)「幸仁」(方朱印、单郭、陽刻)

※『目録』口絵③所掲印記画像参照

上冊・後表紙・見返し・右下ノド寄り

「明暦」(長方朱印、单郭、陰刻)

※『目録』口絵①所掲印記画像参照

下冊・墨付第一〇四丁裏・左下ノド寄り

「幸」(円朱印、双郭、陰刻)「幸仁」(方朱印、单郭、陽刻)

下冊・後表紙・見返し・右下ノド寄り

「明暦」(長方朱印、单郭、陰刻)

遊紙が、上下冊ともに首部尾部に各一丁置かれてゐる。本文料紙は薄様。そのため、裏写りが袋綴にしては著しい。

挟み込まれてゐる紙片の釈文は、『目録』のものがやや不正確かつ誤植もままあるやうなので、ここに再度掲出しておく。なほ、高松宮本として現存してゐると思はれる典籍には、\*以下に函架番号を記した。もとより一私見に過ぎない。

良正助写

正胤

一おきつ浪 全

白<sup>三</sup>薄紫の水玉表紙 \*H一六〇〇一七六一

一千種 上<sup>中</sup>中<sup>下</sup> 三冊 \*H一六〇〇一六二九(存疑)

茶表紙 現高松宮本は一冊、表紙色は同

一千枝のしつく 全 \*不明

茶表紙 高松宮本二本と表紙色異れり

一濱木綿 全 \*H一六〇〇一六九六

浅葱表紙

一片糸 全 \*H一六〇〇一六九七

表紙右同断

一 おいのそ(イ)こ 全 \*H一六〇〇一六八七 (続歌仙落書)

藤亀地白青の菊表紙

一 白鳥の子表紙 一冊 \*H一六〇〇一三〇八 (存疑)

御筆ニテ十七圖之拔書

朱ニテ被遊

第一代と集序例

已上七品

本奥書が二種存する。

本ニ云享祿三年本ニ云歳年十月五日以

他筆令書写早穴賢ト

不可有外見者也

尊俊 (上冊末)

本ニ云天文二年本ニ云十一月十三日書寫之功畢

尊俊 (下冊末)

上冊・前表紙見返し・右上に「ほ」、右下に「三ノ二二二ノ三二」、下冊

・前表紙見返し・右上に「ほ」、といった書標等の小紙片が貼付されている。

別筆による書入れ、貼紙・不審紙は一切存しない。

○

最後に本書の筆蹟について一言しておく。本書は、上冊・下冊、各々書写者が明らかに異なる(下掲図版参照)。このことと、さきの紙片でいふところの「良正助写ノ正胤」がひびきあふのか否か、後考を俟つ他ない。

#### 【補記】

底本熟覧、底本としての採用、図版掲載等につき、国立歴史民俗博物館には多くの便宜・配慮を頂いた。心より感謝する次第である。

◇高松宮本・上冊・墨付第一丁表

文永三年三月廿五日 由素清月次御歌

五言  
あけにしころけり月世とわづらひし  
月れよとてわづらひし月世とわづらひし

五言  
おちよとてわづらひし月世とわづらひし

五言  
あけにしころけり月世とわづらひし

後期歌  
あけにしころけり月世とわづらひし

社及月  
あけにしころけり月世とわづらひし

ゆ存  
あけにしころけり月世とわづらひし

◇高松宮本・下冊・墨付第一丁表

永正六年正月十九日

每家有春

浪うせをけりていねとあそびの海を  
みまりの家乃喜うや

時あまは紅雲のそめぬ垣ひれ  
うらと香るる各々舞 三位實隆  
まねし世のやうとて心人の心や  
春の光より明あそび 権臣藤原  
家の風をよみあそび 長業乃人らや  
かこむる喜ばせぬらん 伊孫宗清